女子文壇

第三巻第拾六號

明治四十年十二月一日發行（毎月一回一日）
明治卅七年十二月十九日第三種郵便物認可



秦錦堂印刷



山茶花

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

婦人世界は四十一年を送るに如何なる記事を以てするや

材料清新

婦人世界

記事親切

十二月一日刊 毎月一回 二巻 拾四號 一冊拾五錢 郵税一錢五厘 六冊郵税共九十錢 十二冊同一圓七十五錢

▲天下を驚倒せしめたる村井弦齋の男女戀愛論は最後の斷案を下して痛快淋漓

◎初めて就職せる時の所感(山元幸子)
◎婦人寫眞師の實歴(徳力作子)
◎ミシン使用の實驗(伊藤せい)

◎林檎の料理(弦齋夫人)
◎安産に必要なる手當(榊順次郎)
◎最も重寶なる歳暮の贈物

▲私の最も感心せる歴史上の婦人……嘉悦孝子

▲私が祖母より受けたる感化……高等女子實修學校講師 星常子

▲十四年前の跡見女學校……桐島三菱銀行副長夫人 桐嶋銑子

▲愉快なるクリスマスの話……女子英語學會主任 藤生貞子

◎青年子女に對する母親の注意(中尾教諭)
◎弟を助けて苦學せる婦人實歴(山口しげ)
◎注意すべき小兒鼻カタル(加藤博士)

◎問答 婦人小兒科○歯科 質問隨意解答親切
◎流行の防寒具(近藤蕉雨)
◎小説 響(小倉富砂邸)
◎懸賞 繪探し

▲雙子は如何なる故に生るゝや……醫學士 伊庭秀榮

東京京橋南紺屋町十二 實業之日本社 (郵便振替貯金口座參貳六番)(電話新橋八七四番) 賣捌全國書店

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

文章界の新提供

文學士 大町桂月先生著

新體文範

今の世文章を説く者必ず先づ指を大町桂月先生に屈す本書は文を學ぶ者の軌範として**新に作**られたる文を集め又舊傑作を修正したる者をも集めらる實に先生の**粋の粋**なる者**叙事、抒情、議論**の三種に分ち其各種の**作法**を詳説せられ且つ文中の一文**作意**を説明せらるこれ古來例を見ざる事にして文を學ぶ者の便利此上もなく毎に先生の文の美益顯はれて眞に絶好無比の文範たり文を好むの士の必ず一本を備へざるべからざる珍書なり

洋裝美製全一冊
正價金六拾五錢
郵税金八錢

文學士 武島羽衣先生著

文章入門

東西の修辭學に精通せる著者が平明に作文の諸問題を解説したるもの最も簡便なる假字遣の記憶法を敎へ現代學者が文字使用の通弊を説破し雅俗語の使用法を明かにし、殊に學生の**最難關**たる**思想養成**の方法に力を注ぎたる如きは是書の著しき特色也作文教授法の不完全の叫ばるゝ今日國語敎員たるものも必讀せざるべからざる好著とす是根底ある學説を以て滔々たる世間濫作の作文書と混同すること勿れ

洋裝美製全一冊
正價金六拾錢
郵税金八錢

東京日本橋

發行所 大倉書店

振替貯金口座二三八

雜 木 林



三 宅 克 己 先 生 筆

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

壇友優待◎每號大懸賞◎筆戰雜誌

秀才文壇

每月一日十五日發行　一冊金十錢　賣捌全國書店

第廿五號（十二月一日發行）第七卷 第廿六號（十二月十五日發行）

每號賣切れの大盛況

水彩繪葉書（石版十色密刷）……三宅克己筆

スケッチ……山中古洞選

小説……吉本雅美筆

▲每號選評擔任大家▼

○叙事文……文學士 中内蝶二

○抒情文……同上

○短篇小説……徳田秋聲

○俳句……高濱虚子

○新體詩……馬場孤蝶

○新派和歌……文學士 尾上柴舟

○和歌……佐々木信綱

○漢詩……小笠原虚舟

○評論文○日用文○五行文學○人物評論○文士會（以上編輯局選）

正價

大判百三十頁

一冊郵税共金十一錢○六冊同六十三錢○十二冊同壹圓廿錢○廿六冊同二圓卅四錢

◉定期増刊年二回

明治卅四年十月創刊

▶少年之友見本一冊（入用の時は）郵券三錢送らるべし◀

少年之友

每月一日發行　一冊金五錢　東京神田文光堂

大評判少年雜誌 第二卷第十二號（十二月）

○頰ずり……（石版五色刷）……宮川春汀畫

○少年畫手本（石版二色刷）……山中古洞 吉本雅美筆

△雪△爐△雪の家△お人形

◉雪のうた……少年子

◉學問のお話……宮地竹峰

◉妙さん……こぎう

◉白銀城……鹿目野徑

◉ぼくの日記……記者

◉女神の像……稻田薄光

◉鼠と鳥とお饅頭の家……草屋松菊

◉室の梅……きみ子

少年文壇　○普通文○日記文○はがき文○四行詩○和歌○俳句○お笑草○新考物○友達會○○筆蹟スケッチ……

無比廉價　一冊金五錢○郵税五厘　六冊郵税共前金廿七錢○十二冊前金五拾四錢（郵券代用一割増）

發兌元　東京神田區旅籠町一丁目　文光堂（振替口座壹九五五五番）

賣捌　東京堂　北隆館　東海堂　良明堂　上田屋　至誠堂

改正賣價

河井醉茗著

詩と美文 玉むし

色クロス箔入上製　正價六拾錢

賣價金四拾五錢

郵稅六錢

諸大家選評

女子懸賞文集第二

全一冊洋裝五百頁　正價三拾五錢

賣價金貳拾六錢

郵稅六錢

第一は賣切れ増刷せず

小森松風著

言文一致文範

全一冊洋裝大判　正價四拾錢

賣價金參拾五錢

郵稅四錢

中村報知新聞記者著

實地精査 女子遊學便覽

全一冊仲裝校長肖像入　正價三拾錢

賣價金貳拾五錢

郵稅四錢

鈴木秋風著

小說美文 朝ばれ

全一冊本綴彩色畫入　正價四拾五錢

賣價金參拾五錢

郵稅四錢

小森松風著

美文作法

全一冊仲裝大判　正價四拾錢

賣價金參拾五錢

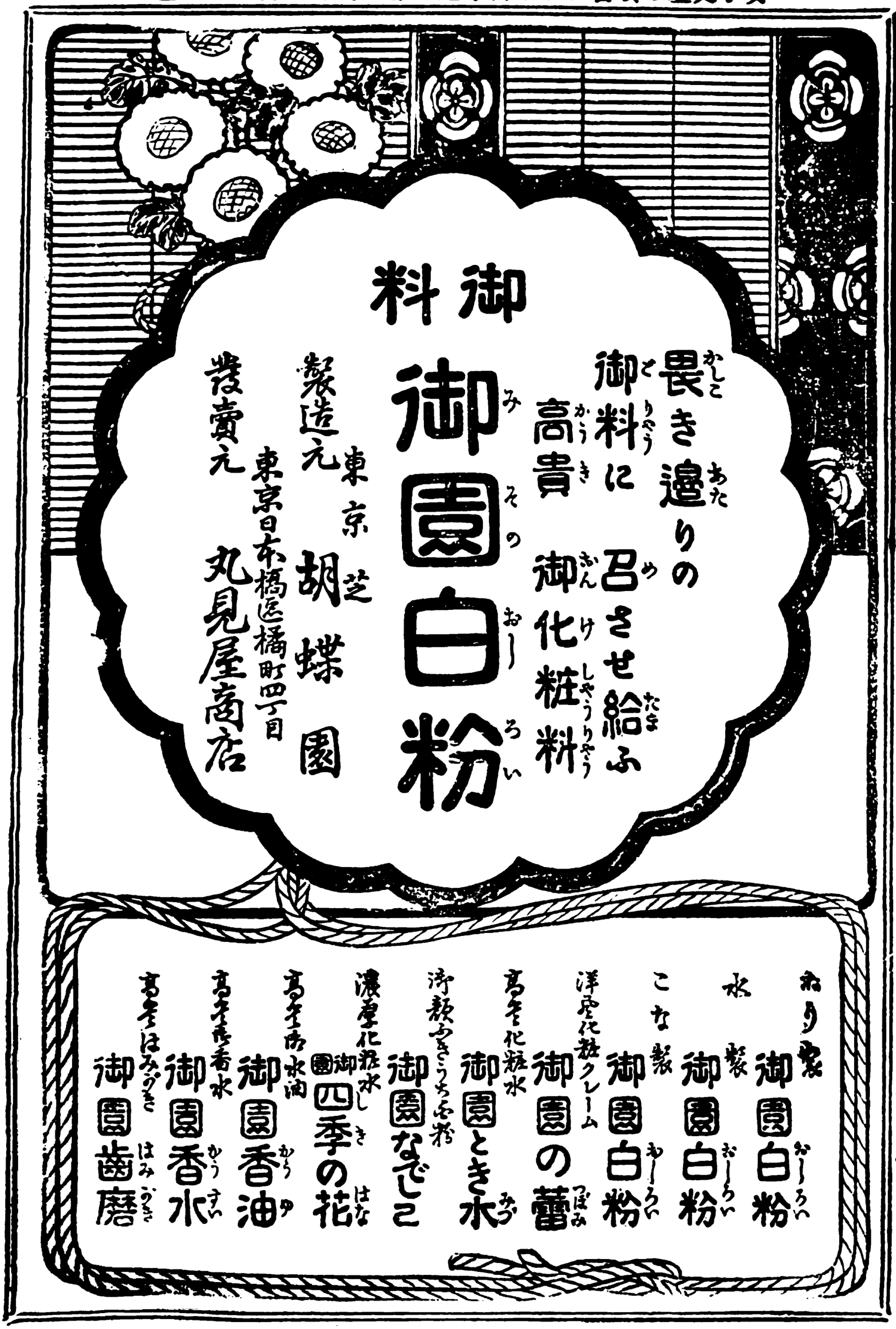
郵稅四錢

發兌元

東京市京橋區大鋸町十一
振替貯金口座第一七二九番

女子文壇社

賣捌各店


御料
畏き邊りの御料に召させ給ふ
高貴御化粧料
御園白粉
製造元 東京芝 胡蝶園
發賣元 東京日本橋區橘町四丁目 丸見屋商店
ねり白粉 御園白粉
水白粉 御園白粉
こな白粉 御園白粉
洋式化粧クレーム 御園の蕾
高等化粧水 御園とき水
洗顔あらひこ粉 御園なでしこ
濃厚化粧水 御園四季の花
高等香水油 御園香油
高等香水 御園香水
高等はみがき 御園歯磨

誌友おもかげ（二十三）



（松代）原千世子



（越中）佐々木てふ子



（仙臺）今野小濱

（沼津）四方ひろ子



（呉）後藤しま子



（續々御寄送下さい順次掲載の上お寫眞はお返し致します）

日本女學校紀念式餘興

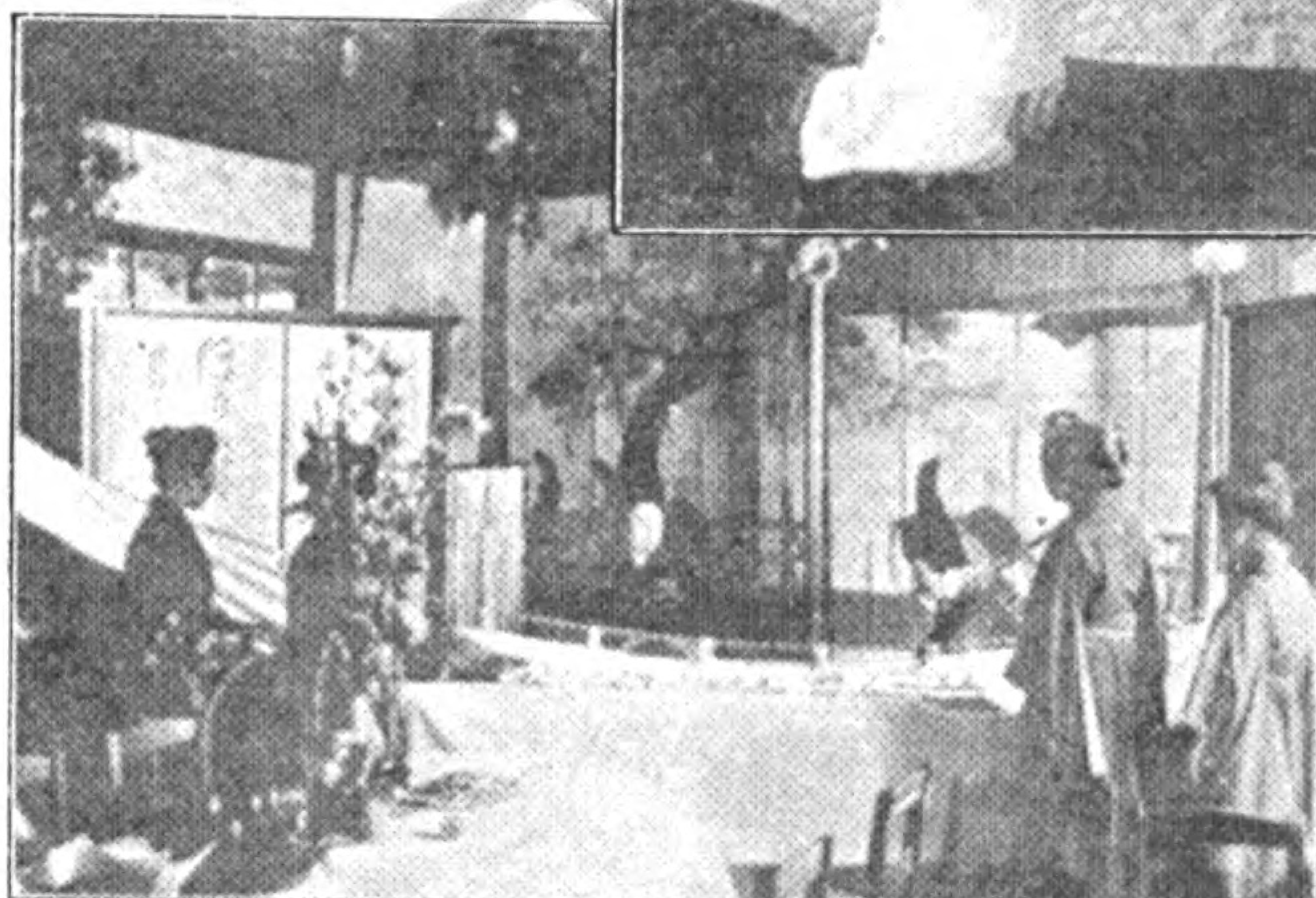


（上段）澁澤男爵の講話。（向て右）歷史人形御裳川。（同左）熱田の宮。

（十月十八日撮影）

日本女學校紀念式餘興







（上段）歷史人形三種の神器。（向て右）日本武尊。（同左）平重盛。



新潟縣北魚沼郡土川村縣社魚沼神社内紀念碑

（大山元帥書）

（山口千代子寄）



愛媛縣櫻井町小學校より
法花寺を望む

（村上晴子寄）



越中名勝大岩山より布引の瀧を望む

（安田崎子寄）

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

無比の安賣

●學生坐右模範的作文良書●

沼波文學士。佐々木信綱
巖谷小波。河井醉茗
先生序文

第二 懸賞文集

增刷出來

各地書店にて取次販賣す

▲全一冊洋裝上等紙刷五百頁
正價金三拾五錢
賣價金廿六錢郵稅六錢

本書第一輯は曩に大好評忽ち數萬部發賣の盛況を呈せしが、今又第二輯成る、滿卷重賞を懸けて募れる天下女秀才の金篇玉什明治文壇の珍品なり

出版元
東京京橋區大鋸町
電話本局六〇七番
(郵便振替貯金口座第一七二九番)
女子文壇社

特約元賣捌
〇東京堂〇東海堂〇北隆館〇至誠堂〇前川文榮閣〇上田屋〇良明堂

新年號の豫告（百廿四頁の處）巻末にあり就て見よ

女子文壇

第三巻第拾六號　目次



第三巻第十六號

(明治四十年十二月一日發行)



社會上の智識

學校時代の諸嬢には社會上の智識は必要でないやうですが、其實學校時代から社會上の智識は少しづゝ知つて置かないと、卒業して世の中に出た時、いざと云ふ場合にひけを取る事があります。學校では教科書以外、教課以外の事は餘り教はらない、社會上の智識は矢張自ら心掛けて知るやうにせねばなりませぬ、學問として習ふ事と、實際に應用する事とは、何と言ふても未だ懸隔があるのです、女子教育が進歩すれば、もつと實際的になるでせうが、今の處では自分で補ふていかねばならぬ。如何にして補ふかは、諸嬢が平素から見たり聞たりする事に、巨細となく注意するより外ないので、譬へば郵便爲替が來ても、自分では何うして金を取るか知らないとか、今の大臣の名を問はれても、即座に返答が出來ないとか、赤十字社と救世軍の區別が分らないとか、甚しいのは證券印紙と郵便切手の相違すら知らないとか言ふやうなことです。是等は平素から少し注意して、人に聞いて置くとか、自分で其事をやつてみるとかすれば分るのです、如何に學問が出來ても、下女や子僧の雇人すら知つて居るやうな事でも、實地にあたるとまごつくやうでは、他日家庭の主婦として社交界に立つことは勿論、一家を支配することすら心細い譯です。

小説の作法

文學士　武島羽衣

小説を作るといふ事、これはちよつと考へると何だか、忌まはしい言葉で、かやうな事は學校でも禁ずることであらうし、家庭でも好まぬ事であらうけれども、しかし實際小説を作るといふことはそれほど貞淑の婦人のなしてはならぬ事であらうか。これはたしかに問題である、今日東西の文學論を見ても、詩學を見ても小説は立派に一の美術として考へられてをる、いな繪畫音樂詩歌とならんで優るとも劣ることのない美術に相違ないのである。小説の領分は無限である。その効力は偉大である。他の美術と相角逐して決して引けをとるものではないのである。

しかるに、世の中が、いかに小説といふもの、小説家といふものを待遇してをるかといふに、彼等は小説は品格のないもの、表むきには讀めぬものと考へてゐる。小説家はのらくらもの、志操のなきものとやうに考へてゐる。徳川時代に小説家が一種の幇間と考へられてをつたほどでなくても、なほ社會の尊敬すべき階級の人として考へられてをらぬのは今日實際の事實である。學問の開けゆく今日、何事でもこれを教へてをらぬ學校はない。俳優の學校もあれば寫眞術の學校もある。裁縫、生花、料理の學校まであるのに、小説を教へる學校はない、たゞに日本にないのみならず、世界いづれの國にもない。小説がいかに世界の人に考へられてをるかは、この一事を以つても察する事が出來やう。

しかしながら、この現象を以て直に罪を小説に歸するわけにはゆかぬ。小説には罪がないけれども、小説家に罪がある。江戸時代の小説家は無論のこと、現代の小説家が、とかく自墮落にながれ、莊重の態度を缺き、やゝもすれば身を遊蕩にもちくづすもの多きに加へて、そのしるす事がらの如きも、眞に人情の機微、人生の眞相を描寫せんとするのではなくて、はかなき

戀愛談にのみ、筆を染むるといふことが實に世人の侮辱を買ふにいたつた大なる原因であらうと思ふ。
小說は美術である。したがひて小說家は美術家である。美術家である以上は、眞に天地人生の美を發揮し、この汚濁きはまる宇宙より玲瓏たる、淸淨なる乾坤をあばき出して、以て人間をたのしましめ、人心を高潔にし、世の中を理想の鄕にみちびかせむとすることを忘れてはならぬ かくして小說家の地位が世の美術家、學者と相並んで一步も讓らぬことになるのである。
この覺悟を以てをるならば、小說を作るといふことは一の立派な事業である。愧づべき事でもなく恐るべきことでもない、繪を習ひ、音樂をまなぶと毫も異るところはない。先生の前でも、父兄の前でも、公々然と勵んでさしつかえはないのである。
かやうに小說の本性を明にしておいて、吾人は今ここにいかにして小說を作るべきか。小說を作るにあたりていかなる注意をもつべきかといふことをざつと述べて見やうと思ふ。

まづ小說は大別して普通の小說と短篇小說との二にすることが出來る。短篇小說は、ある一人の身に關する一の出來事をしるしたもので、普通の小說はこの主人公又それをとりまけるあまたの人の身の上におこりたる複雜なる出來ごとをしるしたものである。
初學のものはこの短篇小說から練習するがよろしい。日本の小說でいへば今昔物語、宇治拾遺物語、雨月物語などを座右において、それに倣ひて物語をしるして見るがよろしい。西洋の短篇小說家では一番フランスのモーパッサントがすぐれてをる。これは英文に譯されてあるから英語のよめる人は讀んで見るがよろしい。このほか米國のアービング、佛國のバルザックなども短篇小說家としてことに有名である。帝國文庫のうちに短篇傑作集といふ一篇があるが、江戸時代の短篇の作をあつめたもので、これも參考としてよろしい。
次には小說の中にしるす事は必ずや作者が經驗、もしくは實驗の結果の事でなければならぬ、他の美術に

おいては、作者はその目的にしたがつて、隨分空想に走つた突飛な、現實にそむいた事をもしるしてもよいが、しかし小說にありてはその目的が人間ならびに人生を描くにあるのであるからして、中の人物事件は現實の人間、社會と一致せねばならぬ。吾人の目擊するところに背反せざる、きはめて自然のものでなければならぬ。それには、どうしても自分の經驗より引き來りたる人間と社會とでなければならぬのである。わかりやすい例をいへば、山國に住んでをる人は、海邊の出來ごとなどはかゝぬがよく、海邊にすみつけてをる人は山間のことなどはしるさぬがよいのである。田舍の人が都のことをかき、都の人が田園のことなどを書くと、とかく不自然な、辻褄のあはぬ事がおこつてくる。これは經驗の足りない事をしるす結果である。てあるから、決して自己の經驗の範圍をこゆべからずといふ事が小說をつくるにあたつて必ず守るべき一の法則てある。

また次に忘れてならぬ事は觀察を怠らざることゝ材料の撰擇をなすべしといふことてある。眞に感動を與ふるやうな小說を書かうと思うたならば常に自分の目擊するところをこまかに觀察してこれを筆にせねばならぬ。同じ風景を見ても同じ天然の諸物を見ても觀察を怠らざる人と怠る人との間にはそれから得る利益に大なる差別がある。さて觀察から、あまたの利益を得んとならば、帳面をたえず懷にして見るもの聞くもの、盡くこれを記入する事が最よろしい。步行する時でも車に乘る時でも、家にをる時でも自分の見るものを何でもかでもこれを書きこむが宜しい。これが實に小說の生きたる材料となる。とにかく小說にかきしるす事がらは書物の中から持ち來るものではなくして活社會にて見たところのものでなければならぬとを忘れてはならぬ。

かく微細に觀察することは缺くべからざるとてあるが同時に注意すべきは撰擇といふ事てある、觀察した事がらを盡く小說中にかきしるすことは考へ物てある。その中から、ある事物だけを撰擇して、以て小說

の人物なり、風景なりが活躍するやうにせねばならぬ。海岸の景色をしるすのでも、青松と白沙とを引きぬいて青松白沙としるして、かへりて明媚なる江山のさまが浮ぶが如く、ある急所だけをしるした方がかへりて小説を泣かしてくるのである。であるから、言ひかふれば話說を進行させ、人物を明確にし、人間行動の動機となるものを著明にさするに必要なる事件はいかなる塲合にも、拔かしてはならざれど、その他の事がらはなるべく省略した方がよろしいのである。

次に守るべき法則は小說中の人物の輪廓が明かになるやう描くべき事てある。人物のうちても殊に主人公の性質が明白になるやう、則その人はいかなる人てあるかといふことが判然となるやうしるすべきことてある。小說中の事件といふものは皆主人公の行動から起つてくる。それ故主人公の性格が明かになつてをらぬと、なぜかういふ事件がおこつたかといふこととの會得が出來なくなる。したがひてその事件がおもしろくなくなつてくるのてある。則小說の興味はうせてくるのてある。

人物の性格を明にする最簡便なる方法はその人の風采、性癖、あるひは言語などて知らすることてある。しかしこれは簡便てあるだけ、價値がとぼしい。次の便利な方法は自分の性格をかりに主人公の性格として描くことにある。人間は自分の性格を最よく知つてをる。故に自分を描くといふことはやがて最よく性格を躍動させるといふことになるのてある。しかしこれもあんまり好い方法てはない。よい作者になると、始め數言てまづ主人公などの人となりを描破し、それから漸次行動や、對話などてその如何なる性質てあるかゞおのづから分るやうにしるしてある。やたらに、人と異つた言行などをさせて、目立つやうに性格を示すことなく、次第々々に言はず語らざるうちに、人物の如何を示すやうにするが第一の功妙なる方法といふべきてあらう。

今一つ注意すべき事は、いかなる小說にかゝはらずその中には一の道德的の寓意をもたせなければならぬ

といふことである。小説家はやがて美術家なる以上は眼中必ず、人道、人間、人生といふことを置かねばならぬ、もし根本をこゝにおかずして空然小説を作るとならばこれは美術を侮蔑したことになる。最、道徳といふても必ずしも狹い意味の道徳ではない。同情の發達、個人の尊敬、美を愛する心、信仰や忍耐にありて美化したる人生を賛嘆すること、義務の觀念、これらは皆道徳の範圍内に屬するものであつて、いづれか小説家が注意しないてよいものがあらう。この道徳といふことを精神として、はじめて小説が尊ぶべきものとなつてくる、小説家が尊敬すべきものとなつてくるのである。

以上は小説を作るに臨みて第一に飲みこんでおくべき大綱である。そのほかこまかしい方法はあまたあるだらうけれど、それはわづらはしいから畧した。なほ詳しくは近日著者が公にせんとする「小説の書きかた」について見てもらひたい。

女子の體操

女子高等師範學校教授　井口あくり

世間一般の學校で教へる普通體操、或は兵式體操の外に、西洋には猶一歩進んだ高尚なる審美的體操と云ふのがあります、之は日本で云つたならば、踊のやうなものだらうと思ひます。日本でもよく云ふことて、踊を稽古したものは、身體が婀娜で、さうして何處となく確りした處があると申しますが、審美的體操の目的もそれで、所謂容姿を端麗にすると云ふことになりますのです。

よく世間では、女子が體操を習るとお轉婆になると申しますが、それは體操を習ましたものは、道を歩くにしましても、シヤキ〳〵として姿勢正しく歩きますから、日本在來の婦女子に比べたならば、如何にもお轉婆のやうに思はれるかも知れませんが、然し日本在來の婦人の姿勢と云ふものは、決して正しいとは申されません、何方かと云へば先づ見苦しい方ですから、それから比べてお轉婆と云はれるのならば、何程お轉婆と笑はれたからとて、決して恥づるに足りないこと

と思ひます。然し中には、姿勢が充分に整はずに、徒らに肩を聳かし、歩き方が亂暴で、見苦しいものが無いとは申されませんが、是等はまだ其技が充分に熟達しないのであつて、左樣なものはお轉婆と罵られても仕方がありませんのですが、能く眞に體操によつて身體が鍛へられて、發育の完全なものは、何事にかけても、自分の意志通りに自分の身體を使ひこなすことが出來ますから、よく優美なるべくして優美に、快活なるべくして快活に、その時と場合に應じて、自由自在に身體が使へて、自ら其場合々々に適應して行くことが出來ます。

以前も何時頃でしたか、當局者間に、何うも現今の體操と、日本在來の所謂日本式の作法とは、矛盾する處がありはせぬかと云ふやうな問題が起りまして、私共も調べて見たことがありましたが、決して矛盾するところではありません、然も、シックリと適合してゐて、よく調和することが出來ますので、益々所信を深くしました。

何時ぞや、何處であつたか場所は記臆して居りませんが、或る所で藤間の踊を見たことがありましたが、彼人の踊の姿勢は、足の踏み方と云ひ、體の動し具合と云ひ、私共の體操の姿勢と少しも違ひませんでしたので、其時も私は踊と體操とはよく似よつたものであると思ひました。

又、或の生徒から斯樣な話も聞いたことがあります、其生徒は私の學校で體操を習つて居るものでしたが、或る所へ小笠原式の作法を習ひに行きました處が、何うも他の人は甘く出來ませんのに、其生徒ばかりは、座つた時の姿勢でも、直立の姿勢でも、能く作法に適つて、何時も先生から、誰それさんのやうに成らなくてはいかぬと云はれて、他の人達の摸範にされたと申すことでして、其生徒が私のところへ來まして「先生妾は只今まで、體操と作法とは大變に違ふものと心得て居りましたが、今度作法を習ひにまゐりましたらば、これ〳〵でありまして、始めて日本在來の作法も體操も、其根底は少しも異つて居らぬと云ふことを悟りました」と云はれましたので、私は、貴方がさういふことを自覺されゝば結構です、と申したことがありました。

之も或る方のお話でしたが、其方が外國の貴賓を新橋にお迎へになつた時に、其外國から見えられた貴賓の方は、拍車の着いた靴を穿いて居られたにも關らず、

彼の大きな體を自由自在に左右に廻らして、出迎への方々に挨拶せられたさうですが、其動作が、少しも武張つて見えぬ而已か、誠に圓滑て立派であつたが、何うすれば彼樣甘く行くか知らぬと、大層感心して居られましたが、それは其筈です、外國人は始終體操とか舞踏とかによつて、身體がよく熟されて居るからであります。

體操だからと申して、決して今日世間の多くの人達の思つて居るやうに、單に體格を能くするばかりではありません、勿論體操の目的は、體格を完全にするにありますけれども、前云つたやうに、身體の發育が完全になれば、從て容姿も正しくなり、顏色も美しくなり、眼の活き方も晴れ〳〵しく、さえ〳〵して來まして、これ迄日本婦人の缺點とされて居る表情の如きも、自然とよく出來るやうになります。

其他、譬ば艦に乘つた時、浪の爲めに船が動搖するやうな塲合にも、平生體操て身體が鍛へてあれば、巧みに身體の中心を保つて、自由に船中を歩むことが出來るし、旅行して橋の無い山川などに行きつまつた時ても、大抵な塲所ならば、橋のある所を尋ねて迂廻せずとも、容易に飛び越ゆることも出來るし、衣裳を着けても、よく着こなすことが出來、狹いところなども、巧みは通られ、階段の上り下り、座敷の歩行等も、しとやかに運ばれるなど、一々擧げたならば際限はありますまい。

猶一歩進みましては、此體操によつて、平素柔弱なるものをも活潑に、優柔なるものをも果斷に、動作の遲鈍なるものをも敏捷にすると云ふやうなことも、確に出來得られることとでありまして、精神修養の上にも、偉大の効あるものと存じます。（文責在記者）

同好の趣味

窪田空穗

學校の教員の話によりますと、生徒の中には往々天才の雛だと思はれる者があつて、之れが此の勢ひで進んで行つたならば、後々は天晴れな者に成るだらうと生ひ先が頼まれるのであるが、多くは自分の天才を自覺しなかつたり、又は自覺しても、之れといふ程の妨げもないのに、修養を怠つて、つひ其の儘に埋もれてしまふとの事です。如何にも然ういふ事があるだらう

と思ひ、殘念に感じます。

一體自分の才能の有無は分りにくいもので、殊に藝術といふやうな、勉强だけを頼りに出來ないものにあつては、一層分りにくいのです。其れて自分には才能があると自覺の出來ないのも、何方かと言へば尤もな事で、之れは仕方がありません。併し學校には、作文、圖畫、唱歌といふやうな藝術的な科目があるのですから、自分は之れは好きであるとか、又他の者よりは多少優れてゐるといふ事も自然に分る筈です、即ち自分には才能が具つてゐるといふ事が自覺が出來る筈です斯う自覺しながら、其の才能を養つて行かうとはせず、次第に遠ざかつて棄てゝしまふのは、之れは其の人の勝手だと言ふよりも、寧ろ惡い事です。其れは一體才能といふものは、自分が得ようと思つたからとて得られる物ではなく、實に天賦のものです、之れを養つて、自分の爲にするばかりではなく人の爲にもしようと心懸けるのは、其の人の特別なる義務です。いはれなく棄てるのは即ち義務を怠る事に成ります。

古來の文學者の傳記を讀むと、後には盛名一代を壓するやうに成つた人も、幼い時から天分を自覺してゐたといふのではない、不圖した機會で筆を執つた所が、其の非凡な所も人が認め、自分でも其れと自覺して、修養を勵んで大成したといふやうな事が多いやうです。之れは文學者ばかりでない、畫家、音樂家、彫刻家などにも多いやうです。現今の文學者も、其の追懐談を聞く事が出來たならば、斯うした例は案外に多い事だらうと思ひます。手近くは親が畫家であつた爲に畫家に成り、音樂家であつた爲に音樂家に成つたといふやうな例は、我々の親しく見てゐる所です。

其れて多少なりとも才能のある者は、其れを養つて行くやうに心懸けるのは、啻に其の人の爲ばかりではなく、やがては藝術の進歩の爲です。固より藝術ばかりが仕事ではなく、又此ればかりが尊い譯でもないから、何を棄てゝもするやうにとは勸められませぬが、其れと共に如何なる人も娯樂は求めてよい、又其の爲に相應の時間は割いてゐるのですから、此の娯樂の時間を藝術の修養に向けるやうにとは勸められます。

其れて私は、苟くも藝術の愛のある人は、同じ趣味を持つてゐる少數の者と、同好會を拵へる事を御勸めします。會の仕事は、折々作品を持ち寄つて批評をし合ふのです。其れは作をするのは固より自分一人でも面白いのですが、見てくれたり評してくれたりする對

手があると其の面白さは二倍に成ります。面白さが二倍に成れば勉強する事も二倍に成り、又勉強すればする程面白く成つて行くのは言ふまでもありません。其れに對手があると競爭の氣味も起りますし、我知らず遠ざかつてしまふといふ事も出來なく成ります。これらの利益は會によつて始めて得られる事です。

會と言つても大勢は却つていけません、三人か五人、多くて七人位を限りとし、そして月に一度ぐらゐ日を決めて會合するのです。此れ位の人數だと調子も合ひますし、月に一度ぐらゐだと厭きて來ず、勵みにも成つて行きます。回覧雜誌をこしらへようといふ位には間もなく發達します。

友達同志、何といふ事もなく遊ぶ代りに、同好會を組織したならば遊びといふ上からも面白いでせう。兎に角臆劫に思はずに、試みに然ういふ會を組織して見る事を、切にお勸めします。

勿忘草

水野葉舟

二月の末頃、或る金曜日の歸り道に、駿河臺の友が、忘れな草を買つて來たから見に來ないかと云つた。

私は久しい前から、忘れな草と云ふ名だけ聞いて居たのだから、思ひがけない美しい物を見せられる樣に思つて、何日も友と別れる筈のお茶の水の橋を一所に渡つてしまつた。

友の室は二階で、きらびやかに整つて居る。其庭に入ると、やがて友は忘れな草の鉢を持つて來た。

私は初めて此名高い花を見るのである。友は、

「やつと、二つ花が咲いて居るのだよ」

といつて、有ふれた雜草の樣な葉を指で分けながら、其中に隱れて居る小さい花を見せた。私は其を覗き込んで、名高い瑠璃色の五瓣の花を見た。

私は永い間其名を聞いて居て、また、樣々に其懷かしい意を負はされて居る花の物語を聞いた。とりわけかう云ふ事があつた。二三年前、親しい友と二人で或る家に宿つて居た頃、日曜日の留守に、その友の所に尋ねて來た人が、美しい紙に包んで、その上にForget-me-not.と書いた、この花を殘して行つた。その尋ねて來た人は、友と永い間別れて逢はなかつた人で、遠い處からたまたま歸つて來た道に訪れたのださうであつ

た。その心を話す友の話を聞いて、私は友情の尊い愛に感じたが、それと同時に、その枯れて黒くなつて居る花を見て、何物かの心が生きて、それに宿つて居るものと思つた。

それから此花について、かう思つて居た。この多くの人に慕はれて居る花は、極めて尊いもので、艶やかな葉で裝はれ、小さいながら、きらびやかな花であらうと。だが今それを見ると、其葉は荒れた園に生へるほしいまゝな雜草の樣で、その花はまことに貧しい田舍少女の樣であつた。

私はかう思つて、思はず友の顏を見たが、友の顏はたゞ名高いものを得た誇りを見せて居るばかりであつた。

其日友に別れてから、私は此一日の思ひが尊い聖句の深い心の樣に胸に映つて居るのを覺えた。靜かな天地の誠の言葉とかう思つたのである。

けれど其等の思ひは、輕く私の心を刺した誠であつたらう、事々しく常に心に浮んでは來なかつたが、ただ其花の形は如何にしても忘れられずに私の目の奥に映つて居た。

それから一週間許りして後、朝學校に行かうとして、常に通る杉垣の間の道を行くと、或る家の門の側て思ひがけず其處にある草の花を見付けた。

春がまだ淺いので、草もいぢけて伸びては居ない。石の間、日當りのいゝ壁の處に弱々しい綠の芽が出て居て、暖い日光と、惠深い雨の潤ひとを待つて居る頃である。其まだ冬のわびしさが殘つて居る時に、私は思ひ掛けず、見覺えのある樣な草の花を見たので、其處にしやがんで、其一つを摘んだ。

私はほんとに、幼い者が思ひがけぬ土産を貰つた樣な嬉しさに胸が躍つた。其花はやはり五瓣の瑠璃色で、駿河臺の友が見せた忘れな草の花に其まゝであつた。

それを見て、私はその花が忘れな草であることを疑がはなかつた、花の大きさは溫室て手をつくして育てられたのに比べて小さいけれど、其は夜の寒さに晒されて、霜を蒙むるからてあらうと思つた。

それから、私は道を歩くにつれて、垣の下、屋根の上、草の生えて居る處に必ず心をとめてこの花を見付け樣とした。私は到る處に其花を見ない事はなかつた。垣の下にもあつた。古びた屋根の上にもあつた。嚴めしく築いてある壁の間にもあつた。頽れた城の礎のわき、花園のふち、野の草の中にもあつた。荒れた廢園

には殊に多く咲いて居た。或る時には、琴を巧みに彈くといふ噂の高い少女の家の門の側でも見付けた。窓から物を買ふ寡婦の軒の下でも見た。尊い姫宮の御住家の垣の下にもあつた。譽高い神に仕へる人の屋根の上にもあつた。唯物論者で名高い學者の庭にもはへて居た。長く病んで居る詩人の塚の側にも咲いて居た。私はかうやつて、見出した處を並べるのもわづらはしい程、到る處でこの草の花を見たのであつた。露と土と、日光とのある處にはこの草の種は風に吹かれて來て、其花の咲かない處はないのであらう。

私は新しくそれを見る每に新しく感じられるのだつた。この質朴な花が、地の限り咲いて居ることを思ふと、この地の上にForget-me-not！といふ聲が滿ちて居る樣で、樣々に心が亂れ疲れて居る時にも、その花を見ると靜かにされて、敬虔の情が湧く樣になつて來る。

たゞに日光が霜を和らげ解かす頃になると、到る處に新しい草の芽がもえて、春の力が溢れて來るのを感じられるだけではなく、この貧しく裝はれた花の瑠璃の色は、空の綠、海の綠を映して、限りなき天地の永遠の姿を讃美し、驚嘆し、崇拜して居る樣ではないか。人が其心の頑くなに、自からを矜つてほしいまゝに神を誇つては、自から滅びんとして居るのに引かへて、この花は聲なき聲の限りを盡して叫びながら、天地のその永遠の姿と共に喜んで、永へに滅びまいとして居るではないか。

私はこの花を見ると、私達の生涯は決して飄泊して行く旅ではなく、命じられて行く旅であると思はれる。多くの人が其心の慾の色に負けて、自から盲目になつて行く姿の、其一時こそは、飄泊の淋しく暗い道であらうと思はれるのだ。私が嘗て悲しんで思つた事は、私が自から惡酒の醉を買つて見た夢の淺ましい姿であつた。

私は靈廟を回つて唱つてゆく、敬虔のあつい順禮の樣な心が、嘆き悲しんで悶えて居る人の上にたやすく得られずして、この小さやかな、貧じげな花の上に宿つて居るのに驚かずには居られない。

私は吾等の耳に絕えず響くForget-me-not！といふ聲を否む事が出來ようか。そしてその Me とは誰れの心てあらう。

兎の三ッ口

文學士　枯林生

或る夕暮のこと、一匹の兎が路でふと大きな虎に遇ひました、虎は恰度夕食前でした故、その兎を捕へ一口に食べ樣とすると、兎がいふには、

『虎叔父さん、どうか助けて下さい、あなたが私を喰つたつてほんの一口ですから、身にもなりますまい、それよりか私が大きな獸をあなたに差上ますから一處に來ませんか』

虎も成程と思つたもの故、

『よからう、が若しその樣な獸がめつからなければ、お前を一口だぞ』

といひ乍ら、兎について行きますと、到々眞暗になりました、すると兎がモグ〳〵しきりに舌打をし始めましたので虎は不思議に思ひ、

『御前は何をそんなに甘味相にたべてゐるのか』

と問ひました。

『叔父さん私、右の目をたべてゐるのです、おいしいですよ、なにたべてもぢきにまた出來ますもの』

といふので、虎は聞いて驚きましたが、つひ飢じい故、そんなにうまいのならと、到々自分の右の目を一つゑぐり出して喰べてしまひました。

暫く行くと、また兎が甘味相に舌打をするので、何にを喰べてゐるのかと問ひますと、また左の目をたべてゐると云ひますので、それぢやおれもと虎は左の目もたべてしまひました。

扨てかやうなわけて、虎は到々盲目になつてしまひましたが、兎はやがて虎を深い谷の崖へ連れてゆき、

『虎さん寒くはありませんか、火でもたきませうか』

と聞きますと、虎は同意しましたので、兎は枯枝を見つけて、それに火をつけ、虎の處へ持つて行きますので、虎は暑いので後じさりし乍ら崖際のところに來、遂に谷へ眞逆樣に落ち込みました、が幸と中途の崖の枝を喰へ込み、やつとぶるさがつて居ますと、これを見た兎は、

『虎叔父さん大丈夫か』

と問ひました、虎は答へやうとしましたが、答へると、口に喰はへた命の綱から離れるので、

『ムムムム』

とうめくばかりです。兎は、

「叔父さん怪我はないかね、心配でしかたがない、どうしたらいゝだらう、叔父さん、アゝと云つて下さいそしたら、私も安心するから、」
虎は兎を安心させ樣と、
「ア」
と云ふや否や、深い谷底に落ち、岩にうたれて死んでしまひました。
翌朝、兎は馬の五六を率ゐてる百姓にあひました故、
「あなたはいゝ虎の皮が欲しくはありませんか。」
といひますと、百姓は、
「欲しいとも、が一たいそれはどこにある、」
ときゝますので、兎は昨日虎の落ちた谷を教へますと、百姓は悦び馬の監督を暫時兎にたのみ、いそ〱として谷へと出掛けました。
百姓の姿が見えなくなるや、梢の二羽の烏に向つて云ひますには、
「御覽、こゝに多くの馬が居る、幸ひ誰も番人が居ない故、その脊にある腫物をつゝつかないか、」
烏は得たり賢しとすぐ馬の脊にとび下り、腫物をつゝき始め馬は驚いてどん〱逃げてゆきました。
兎はなほ進むと、羊番の小兒にあひました。
「お早う太郎さん、あなたはあそこの烏の空巣に卵子が澤山あるぢやありませんか、」
小供は早速その樹の方へ走つてゆき、巣の卵子を取りに行かうとして、羊の番を兎に賴みました。
兎はすぐと山蔭の狼のところへ行き、
「お早う、狼さん、番人の居ない羊の群が居るよ、早く行つて荒しなさいな、」
狼は飛び上つて悦び、羊の群に躍り込み、縱橫無盡に羊を荒しました。
さて兎は小高き山の上にのぼり近邊を遙々と見下しますと、遙か向うの谷には虎が死んで、その皮を人が剝いて居、馬は畑をどん〱と馳せてゆく、みるとその脊には二羽の烏がかぢりついてゐる、また一方に小供が烏の空巣に登つて卵をつかんでしきりに懷に入れてゐると一方では狼に暴されて羊が四方に逃げ廻つてゐる。
この有樣をふりさけ見て、兎は小さい石によりかゝり、得意になつて世の物皆の馬鹿さ加減を嘲つて大笑ひをしましたところ、あまり笑つたので到々口が三つに裂けてしまひましたとさ。

十二月暦

すゐむ

(一)煤掃● は昔は十二月十三日に行はれたものだ、今でこそ清潔法と云つて、警察が干渉して度々行はせるけれど、昔は爾なとがなかつたから、大掃除は必らず暮の十二月に行ふ事にしてゐた。つまり昔の煤掃は今の大清潔法なのである。――かの蒲生君平が屋根の上へ逃げて往つて、月明を便りに本を讀んだのも、此の煤掃の夜であつた。

煤掃や隣りの庭へ植木鉢（破笛）
煤掃や掃きよせてある鼠の子（蚊眠）
師の坊は市に遊ぶや煤掃（枯葎）
煤掃いて嬉しき膳に向ひけり（天風）

など云ふ俳句は、紛然雜然たる間に趣味の溢れる煤掃を謳ひ得て妙て有る。此の行事の起原は隨分古く、何でも陽成院の時分から起つたらしいと、鴨長明の『四季物語』に書いて有る。

(二)年の市● は十三日から懸けて年末まで、東京市内に立てられる事に成つてゐる。年の市では注連飾、門松、庖厨雜器、三寶、破魔弓、手毬、羽子板などを商うて、市民に正月の準備をさせるのだ。『五元集』の所謂『年の市誰を呼ぶらん羽織もの』は即はち此れを謳つたものて有る。

(三)歳暮の廻禮● は今尚ほ行はれてゐる、これは知己、恩人、取引先などへ、平素の眷顧を謝し、將來の交誼を祈る爲めに、砂糖、堅魚節、鳥類、鹽魚などを贈るので、二十日頃から廿八九日頃まで行はれる。奥床しい行事では有るが、此の頃のやうに形式的に流れて、眞情が沒却されては面白くない。が、砂糖の紙袋や、鹽鮭やを下げて、市中を行き交ふ人を見ると、昔のとなど思ひ出されて、いと奥床しいものである。――此の頃流行の市井詩人、たとはゞ腰辨當の如き人に取つては絶好の詩題である、紙袋さげてうろつく姿は兎にも角にも、爾うする人々の心の底を推し察つて見ると、其處に一道人情美の光がさいてゐる。

過ぎし一年十二月、お世話になりしお禮には
鹽鮭一尾小さくて、恥かしけれど納めてと
源公の女房親方に、兩手を突いて辭儀するや
袖脇割れて雪白の、背がちらりと見えにけり

こんな拙い詩ては興が醒めるが、醉茗君か誰かゞ謳つたら面白いものが出來やう。短詩十行、三百頁のでも

▲小說に優るやうなものが見たい。

(四)冬至　は二十一日に當る、一年中で一番日の詰つた時で、家政を治める細君達は忙殺される。——此の日には、湯屋は柚湯といふのを立てる、柚の皮や袋がぷか〳〵と浮いたり沈んだり、酸ばい香が湯氣に交つて鼻を突いて、何となく床しいものだ。

(五)クリスマス　は大抵二十五日に行はれる、何處の敎會も常盤木など飾つて、盛んに祝典を行ひ、餘興として日曜學校生徒の聖句暗誦、唱歌、お伽芝居、ずッとハイカラな處では靑年男女の音樂會奏、オペラの眞似事なども有る。基督敎の信仰に入つた人は勿論、心から基督の降誕を祝すべく、でない人も最寄の敎會へ往つて、無邪氣な小兒の演藝を見がてら、高い尊い福音を傳へる說敎祈禱に耳を藉すのは可からう。

(六)冬季休業　は各學校とも大抵二十六日頃から始められる、小學校の生徒に取つては此上ない娛樂で、此の間に生命の洗濯をするやうに思ふ者が多からう。——況して最う六つ寐れば直ぐ芽出度いお正月、羽子や紙鳶の夢ばかり見てゐる子供も有らうと思ふと、大供までが何となく氣がそわ〳〵する。

(七)除夜　は一年の終に於いて、夜を更かして新年を迎ふる行事である。大抵の內では除夜の鐘——百八の鐘の鳴る頃まで起きてゐて、年を送るのを慣としてゐる。此の夜、靜かに机に靠れて、過去一年間に爲した跡を回顧ると、失敗、失策が多くて、物恥かしいやうな氣がする。『あら玉の年の終になる每に雪も吾が身もふりまさりつゝ』(在原元方)といふやうな歎息も出る。——『壯懷英氣盡く消磨し、自ら覺ゆ光陰の梭よりも疾きことを、昨日の春花今夕の月、一年又是れ等閑に過ぐ』といふやうな悲觀も出る。が、忙がしい商家などでは默想どころでなく、夜中までも取引や金錢の受渡で起きてゐる、町を步けば提灯の光り闇を燒いて、行く人來る人、忙がしさうにスタコラと道を急ぐ。年末の夜は全て火事場の如く、倉忙の中に溢るゝ許りの詩趣が發見せられる、これも市井詩人の好材料だ。

行く歳

▲歳のきまり

年々歳々同じやうな事を言つて暮れて了ひ、同じやうな事を言つて新年を迎へる、歳の行くも、歳の來るも只時間が流れてゆくと云ふだけの事である、歳其ものには古往今來何の變化もない、只人間の爲ることは年々に變つてゆく、年々ではない月々ではない刻々、寧ろ一呼吸毎に人間の爲ることは變つて行く、變つて行くと云ふのは進歩することで、其進歩のあとを折々顧みる爲に一年と云ふものが劃られてある、一年は進歩を顧みる時、仕事のきまりを見る時である。

▲刹那

して見れば人間は一刻毎に能く働き善く思ひ美しくして行くと、必ず一年の終に顧みて悔ゐがない、尊むべきは一刻の時間である、言ひ換ゆれば刹那である、刹那は無限より來り無限に續くもので、あらゆるものは皆此の刹那に活きて居る、刹那に働いて居る、刹那に善い思考も湧けば美しい感想にも觸れる、努めて此刹那を大切にすることが人間の向上である。

▲本年の問題

思想上の進歩、物質上の進歩、一年のきまり時に、我が日本の國民は何れだけ多く且善く働いたかを顧みるのは肝要の事である、政治、經濟、學術、實業、軍事其他あらゆる方面に活動しないのはない。

▲文學界

我等は單に文學界の事に詳しければ好い、此一年は何んな事があつたらう、其題目を擧げるだけでも隨分澤山である、而して最も問題になつたのは自然主義の議論と創作であつた小說家は必ずしも自然主義の議論に動かされて、自然派に囑したのではない、自然の思想の潮流が其方に向いて來たので、議論は其現象を見て後ち盛んになつて來た、之に伴ふて有力なる新作、又新進作家も出た、自然主義の聲は散文壇ばかりでなく詩歌にも影響して、今年の詩壇は活動もあり、又新彩ある作が少からず現れた。モデル問題の如きも此等自然派の態度に附隨した新論爭であつた、要するに文壇多事の歳、此現象は明年にまでつゞくであらう、演劇界にも新脚本の要求其他事が多い。

▲美術界

文學界に注意を拂ふものは美術界にも注意しなければならぬ、公設展覽會の出品が精撰されたる、日本畫會の內訌、霞の破壞事件、音樂では國樂保存の聲が高くなつた。

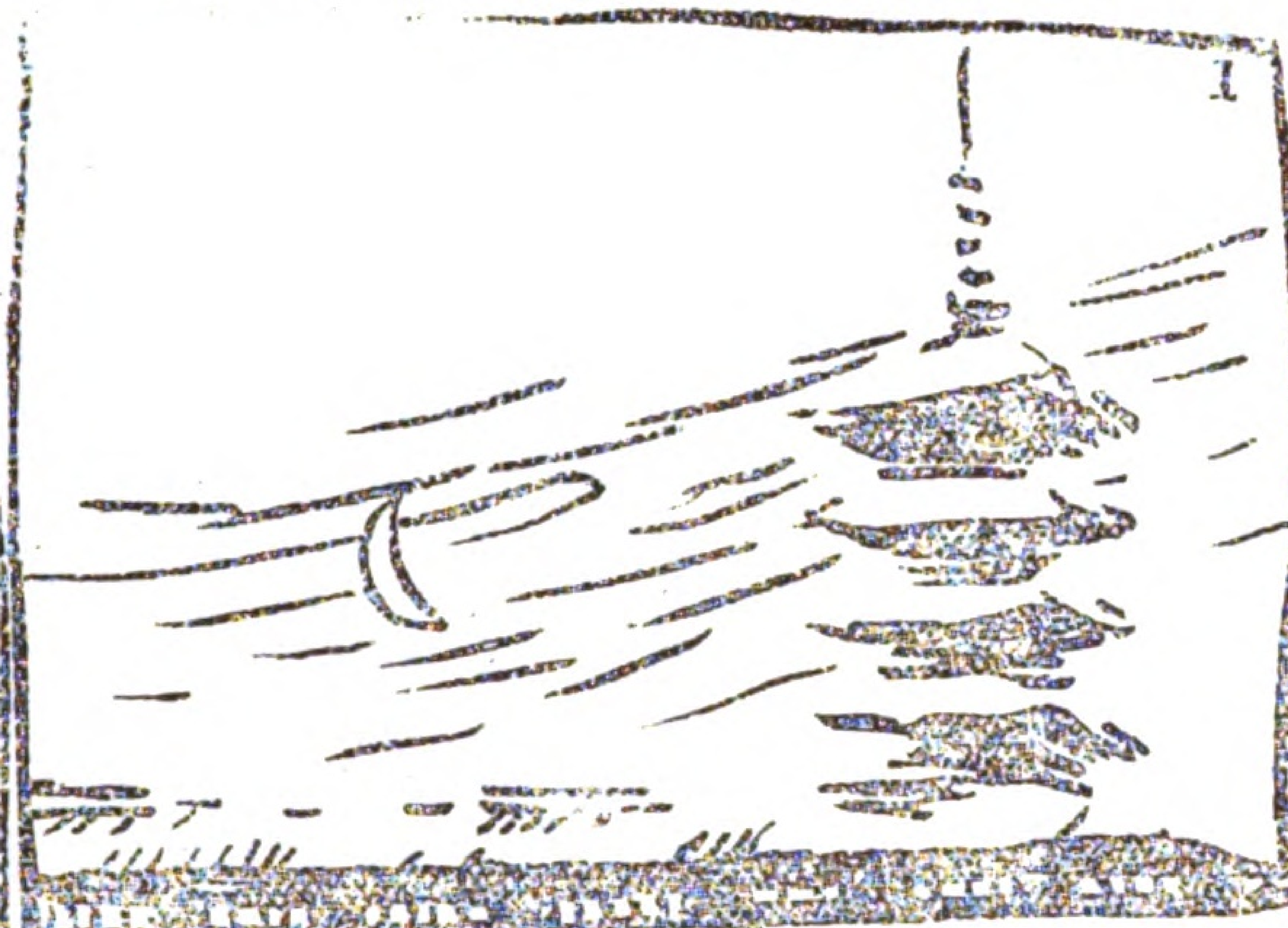
山中古洞先生選

懸賞當選圖畫（其十六）

(1) 寒月（一等）
大阪市東區松屋町筋石町西南角竹田堂內　今西こゆき

(2) 家の大將（三等）
府下日暮里村元金杉二一五　正木いね子

(3) まつ春（四等）
下谷區坂本町　岡野豐子











(4) お勝手（五等）
豊橋松葉町四仲藤城方城藤のぶへ

(5) 場末町（五等）
牛込區市ヶ谷宮久町六藤澤方
佐野貞子

叙事文

文學士沼波瓊音先生選評

三等

○日南ぼつこ

淺草區千束町二ノ四二三　登美子

お孃樣お溫かで好う御座んすね。といふ聲はお光らしい。讀みかけた華光月影に栞をして、そつと窓を開くと、姉樣被りをした赤い襷がけが、つと目の前を横切る。見ると、窓の下に繪莚を布いて、綾子とお隣りの花樣が、日南ぼつこをしながら千代紙を廣げて居る、アレ蝶が、と花樣がいふ、黑い蝶が綾子のリボンに止る。何所々々、といふうちに山茶花の方へ行く、淋しくなつた木立の傍を、白い花が二三輪咲いて居たが、蝶の羽風に開ききつたのか、ハラリと散る。奇麗な花ねえ、猫のお蒲團にして遣りませうや、と綾子が拾ひに行く。先刻から猫の繪を切り拔いて居たらしく、四邊は紙の切屑だらけで、小猫やら母猫やらが香箱の中から顏を見せて居る。可愛い手にはふさはぬ程の大きな鋏が切りかけの紙の上に置いてある。花樣はと見れば、色々の千代紙で折鶴を拵へては、赤い絹糸でぬいて居る。美しい、美しい、あゝ何に似て居るのだらう。自分はふと此樣な光景を思ひ浮べて見る。――何所ともなくさや／＼と水の音がする。自分は奇麗な草の花の滿ちた野をゆく。柔い日影は四邊を隈なく照らして、小羊に似た雲が一片、夢を誘ふやうに徐に流れて行く。蝶が一二羽自分の影を追うて來る。風が渡ると草の露がハラ／＼と翻れる。此の風もきつと紫や赤や黃や靑や白や種々に彩られて居るのだと思ふ。花におく露が七色に光る。草の葉を拾つて其の上に、澤山の澤山の花の莟を摘んでは並べて見る。美しい。――其れ／＼。今の折鶴が恰ど摘んだ花の莟のやうに思はれる。此の莟の中にはきつと小さい姉樣が居るのでせうよ。可愛い事をいふと思うて見ると、何時の間にか綾子は山茶花の散つたのと莟とを持つて來て、振り分けの首を傾けては花樣と語つて居る。一しきりの風に枯葉が降ると、前から落ちて居たのと交つてカサ／＼と音を立てる。何所かて名も知らぬ小鳥がチツチツと鳴く、太陽が沈みかけて、二人の髮の毛が眩しく光ると、のつそり入つて來たのは

玉ちやん（猫）。椽に干してある蒲團を占領して居たのを、追ひ立てられたと見えて、彼方では蒲團をバタバタと敲く音と同時に、埃がパッと四邊へ散る。そつと抱いて行つて窓から下すと、あら姉樣。と下の二人は一時に仰ぎ見て、莞爾と笑うた。

（評）縹渺なる詩趣「草枕」のやうなり。

四等　○隣の姉さん

鳥取市鍛冶町五七　上山千重子

着更へた初袷の袖の長さが嬉しさに、風にひるがへして、秋蜻蛉のかげを追ひつゝ、私はお隣の姉樣に見て貰ひに行く、昨夜の雨の名殘らし草の上の露は、紅緒の下駄を惜し氣もなく濡らして、築山下の穂薄ごしに輕さうな浮雲が見える、靜かな秋日和だ。いつものやうに枝折戸をくゞつて、はなれの窓の所から姉さんと呼ぶ、するといつでも姉樣の優しいお顔がすぐ現はれて、「富ちやんさあお上りなさい」と仰しやる、だがけふは何うしたのだらう、音も沙汰もない、留守かもしれぬと母屋の椽の方に廻ると、此所だ姉樣の聲がする。「だつて御母さん私にもいろ〳〵用事がありますもの」、「それでもお前いそがないぢや間に合はないよ、もう三日しかないのだよ」叔母樣の聲も聞える、何が三日だらう、可笑しなと思ひつゝ、折角來たものを歸るも惜しいやうで、そこらを歩みまはる、つい垣根の朝顔の末花が蕾のまゝ葉がくれに凋れて居るのを見出して、フーと暖い息をかけてやつたらすこし開いた。折柄障子が明く音を耳にしたので姉樣だらうと、はしつて行くと、「まあ富ちやん……」と私の手を取つて、私は其まゝはなれの六疊に伴はれた。其所に先程まで針取つて入らしつたと覺しく、燃えるやうな日の出色の友禪縮緬が座蒲團の傍にひろげられて、尾を引いた緋の糸卷がころがつて居る、なほ風呂敷包の上に、美しい帶が卷のまゝ、誰れのだらう、姉さんのにちがひないとおもふと、折角誇りに來た初袷の嬉しさも消えて……。

「これ姉さんの？」と問ふと「アヽ」と物思はしさうに眉の曇り、いきなり私を抱へて「姉さんはね近くに富ちやんにお別れしなけアならないの、いやで〳〵堪らないのだけど」と涙をこぼして「富ちやんは姉さんの事をいつまでも覺えて居て下さるでせう、私も富ちやんの事死んでも忘れないわ、富ちやんの兄樣の事も……」私は何となく只悲しくて、姉さんの膝に泣き伏した、姉さんは私の脊を撫でつゝ「富ちやん泣いて下さるの嬉しいわ、兄樣もきつと泣いて下さるでせうね」

私は姉さんが宅の兄樣をいゝ兄樣だつて賞めた事も、兄樣が姉さんを賞めた事もよく覺えて居る。

（評）戀を描くにはこの位の調子が可し結句餘韻あり。

秀逸

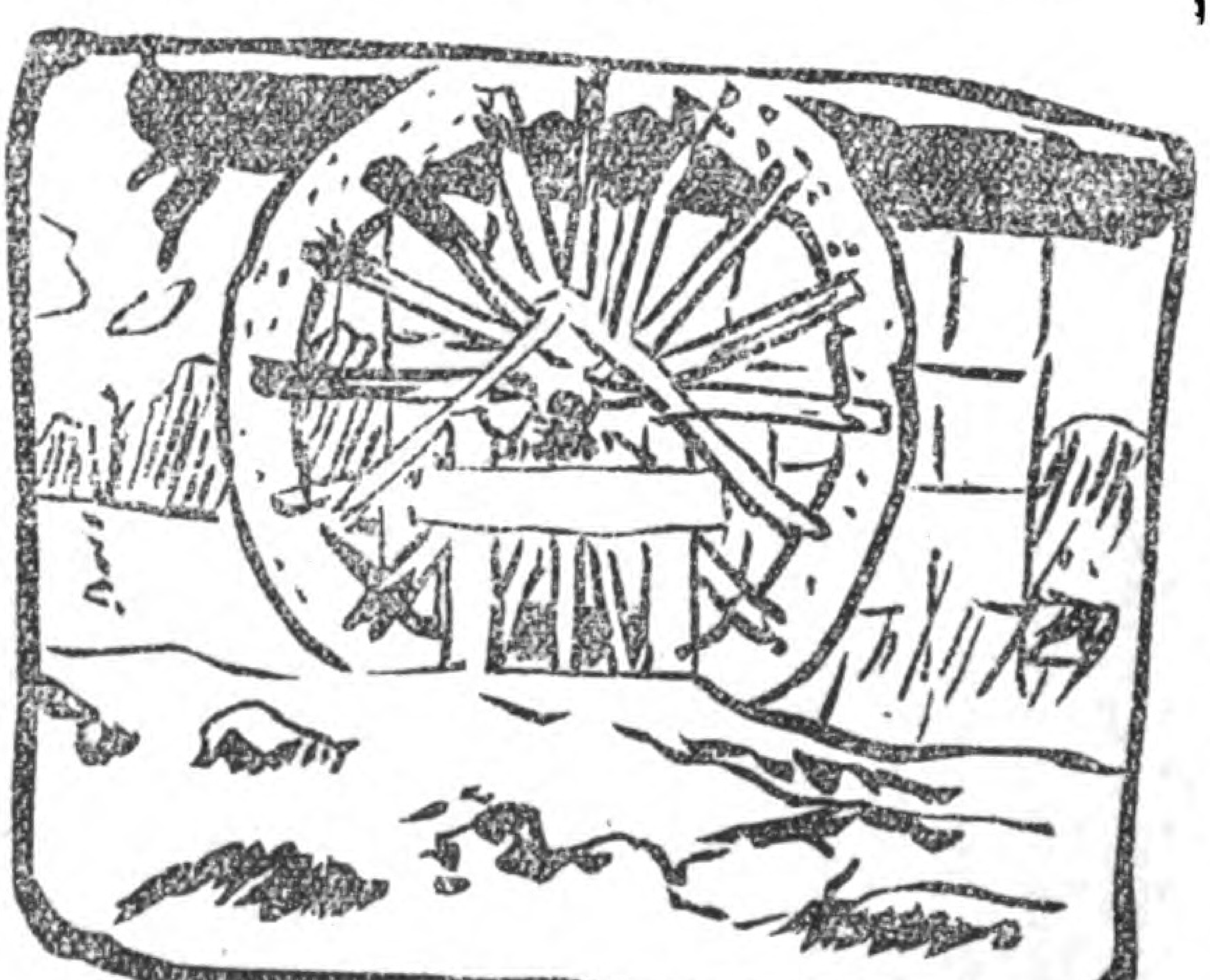
○風の夜

上總　ひさ子

妾は今灯火の影に卷きもあえぬ文殻を見まもりつゝ、またしても深い物思ひに沈むのでした。

それにしてもあの樣な快活であつた人が、なぜこんな悲しい事を言ふのだらう。病氣ほど人を悲觀に陷れるものはないのかしら……（亡骸冷き地の上に、神のやは胸床として、白き小さき影うすき、あゝ野の花の精となるべき）……あゝもう考へても胸がいつぱいになる。あの艶々しいお髮が、あの優しいお唇が、お肩が、お手が、まあどんなにお窶れなすつたらう。「お心強くいらつしやいよ」いつも然う言ては上げるのだけれど西と東三十里も隔てゝ手紙だけては嘸お賴りなくも思はれるだらう。秋風はさらでも冷いものを、若しや段々……否え、屹度直きにお癒りには相違ないけれど……。風がまたざわざわと軒におとづれた。うつすりと月に描かれた無花果の葉が一しきり窓に動亂する。幽かに遠山のどよみが瀧のやうに聞えるを思ふと、やがてまたその返しの如くざわ／＼と軒に吹いて來る。あゝ西三十里、枕になやむ人も同じ思ひに聞いて居られるだらうか、若しや悲しい思ひに聲はゞ冥府から呼ばふ惡魔の聲とは聞えまいか。あの表情に富んだ瞳、笑凹の出來る頰、あゝ何と言ふおいたはしさ——何處かとぎれとぎれの虫の音も今宵はわけてかなしいこと。野にはもう七草の色も褪せはてたらう。色もない香もない末枯の草が、このうす月の下に遠く吹き折られた態はどんなに哀れな樣子だらう。うす月夜、それは春には似ても同じくない、若き命と咲き誇つた千草の魂は、今宵凋落の風に吹かれて何處の空に消えるだらう。徐かに目を瞑ると、みじめな野の樣が歴々と幻に浮んで來

水車　神戸市　若松芳子



る。あゝ凋落の花と、病の人とそこに稍相似た趣があるまいか……妾はハッとして耳を澄ますと、氣のせいでせうか、遠い風の中に妾を呼ぶお聲がきこえるやう……。

堪らなくなつて障子をあけた。無花果の蔭は小椽の上にも揺らいで居る。何處から來たのか白い蝶が風に追はれて迷うて來た。瞳をおとすと、椽先きの秋海棠が薄暗にほろ〳〵と散るのに、あゝ若き命は矢張り脆いと呟いた時、妾はふと思つた（白き小さき影うすき野の花の精）――若しやあの蝶が――若しや友が危篤なのではあるまいか……「あら緣喜でもない」と直ぐ打消したものゝ、何となく胸のおびえを禁じ得ない。吁思ひやられる三十里の空。物悲しうも無花果の葉が一つパッサリと落ちた。

軒の亂れがまたざわ〳〵として、風は仄暗く愁ひとおびえとを乗せていつまでもと吹いて居る。月の色もいたく更けた。

（評）詩的の迷。

○秋汀記

大分縣　萩月女

――鮎は瀨に住む鳥や木にとまる
人はなさけの下に住む――

いかにもいゝ聲。芋を洗ひやめて川上見れば、小荷駄がかた〳〵板橋を渡つて行く。ちやぶんと鮎が跳ねる。妾しの直ぐ前まで燃え立つやうな錨草の花が流れてきたが、さら〳〵と水晶を碎くやうに湧きかへつてる水の中をぐるぐるぐる二三遍まはつてまた流れて行く。

川下は流れが縫う出つて半ば南は川原北は淵て崖の紅葉が青い水面を焦がして、岩頭の翁は太公望の繪にさも似て、馬さへ飛ばぬ平和の眺め。どこからか木犀がぷんと薫る。又鮎が眺ねた。おや、東の空には夜を待顔のお月樣がほんのり……。

（評）巧なり。

○惜しい夢

四谷　小山那香子

朱ぬりへ金蒔繪した、扇なりの香箱へ、友禪の小切が一ぱいにつまつたのや。市松の着物をきた京人形や。繪紙や千代紙やを、誰かゞ持つて來て、前へずらりと並べてくれた。私は嬉しくつてうれしくつて、ニコニコして居ると、私の傍へ來てすわつた人があるやうだ。すると、急にまぶたが重くなつて、どうしても目があかない。「さあ仲さん、もういゝかげんに目をさまさないと、日がくれるよ」兄さんに似た聲だ、私のからだが、ゆら〳〵揺れる。「あの兄さんこんなにおみやげを」「おゝこゝこの子はゆめを見てゐるんだよ」

こんどのはおつかさんのお聲。それがきこえて、この世をへだてた、外の世の中でおつしやるやう、幽かに

すかに…………。
私はうと〳〵しながら、そのお話しの順序を考へて、さあいゝと思つてむき直ると、まあ、目がパッチリとあいてしまつた！

（評）ほんに惜しい事可愛らしいお嬢さんのぼんやりしたお顔が目の前に見える樣。

○牛乳配達の一日

岩代　菅野和子

ふと目が覺めた、時計を見ると既に四時、毎朝何に起さるゝかいつも同じ時刻である。
牝牛が「モウ」と呻る、煉瓦塲の汽笛が「ピユー」と鳴る、枕を上げると戸外はまだ薄暗い、母は竈の前に踞んで沸々煮立つた釜の蓋を凝視してをる。
床を跳ね起きて牛小屋に行くと父は眠さうに煤けた瓦斯燈の下に、搾つた乳を罐にわけつゝ何か口吟んでをる、いつも大人が忙はしい時に言ふやうに！
阿父さんお早う!!
芳坊か、昨日より五分早かつたと東の空を仰いで返事する、けふから油屋のお隣へ一つ殖えたよといふ。
毎朝自分の町内の配達は私が出校前の役目に願つてをる。それは身躰を健かに保つためである。
今朝は角の犬の吠えぬのが不思議である。
戸を開ける音がだん〳〵繁しくなつた、欠伸の聲、薪折る音、鶏の聲が亂れる、鴉がなく、朝餉の烟りが棚曳く人力車が通る、もう夜はあけてをるのだ。
裡へ出た時雀の群が干した稻の竿に集る、鳴子は沈默、明方のすが〳〵しい冷氣に吹かれて、塵一つ立たぬ町といへば町田舍續きの田圃、用を兼ねての散歩、海水浴にまして効能はある、といつて肺病を患らつてゐるてはない、元來弱い身にはよい藥だ。
近頃自分には、不平だとか、不快だとか、煩悶だとか更にない、眞に圓滿な心状。なす事する事樂しからぬものはない、是は何の爲だらう、など考へつゝ朝露ふんでかへる時の心持よさ!!! 恰度今朝も泉水のある所で旭日が昇つた、どんな朝かな日和になるか、靜けき重々しい光りは天地萬有の面に洽く浴せかけた、例の如く玆で洗面した。
朝飯も美味にしたため了つた、學科の豫習後登校時間にはまだ早い、編みかけの手袋をつゞけてゐたら同級の佐和ちやんが來た、白い呼吸を吐き〳〵、手には奇麗な菊を持つてをる。
「お早うございます」菊を褒めてあべこべになつて互に笑つた。
此白菊は我敎室の花瓶に活けられて何時迄咲いてをるだらう？氣高さを我等の鑑とて!!。

（評）さら〳〵として淸らかなる文。

○秋の一夜　弘前　みやま撫子

お湯も使ひ夕餉もすんだので、妾は秋の錦織りなした裏の野に出た。美しく色づいた稻は、眞直に立つてゐられない程よく稔つて、田面を撫でる秋風に、ばさりばさり搖れる、それが沈みかけた夕日に照り添ふ樣は、丁度黄金の波を綴つたかのやう……鎭守の森も、岩木山も遠く靄に包まれて、其の下の田圃道を此方に近づいて來る澤山の草を脊に積んだ牛と、それを牽いてゐる里の童とが幽かに見えて、それらの景色を一つにすると、恰も、一幅の淡墨繪のやうである。日は全く山蔭にかくれて了つて、夜の氣はあたりを籠めた。すると十三夜頃の月は、桐の葉分に影を見せて、隈なく照りまさつてゐる。かの二千里の外も遠くないと古人が吟じた句が思ひ出される。今、頭の上をとんでた雁は、いつしか月を掠めて南の空に消えて了つた。叢の中では、松虫、鈴虫の、羽袖かろく打ちふるふ鈴の樣な床しい音がしてゐる、がちや／＼と喧しいのはくつは虫であらう、淸い聲で機織虫も鳴いてゐる。脊戸の小川には月が宿つて、小波が銀色に碎けてゐる、その兩岸から生ひ繁つた一むらの薄は、丁度草のトンネルのやうに、川を覆つてゐて、傍に萩やら、桔梗やら、女郎花などが、目もあやに咲き匂つてゐる。庭の木の間から螢火の樣に、ちら／＼と姉樣の御部屋の燈が見えて、彈いていらつしやる琴の音が漏れてくる。耳を傾けてよく聞くと、妾の大好な七草の曲なので、何となく嬉しいやうに思はれて、妾も一緒に琴に合せて小聲に口ずさみ乍ら、庭に入ると、月影の及ばない暗い所計りなので、漸くに辿つて姉樣の御書齋にきて、靜に聞いてゐた。後で妾も暫く調べなかつた殘月を彈いた、姉樣はよく彈けたと、賞めて下すつた。月は今中天に高くすみ渡つて、妾達の樂しいまどゐを笑ましげにうつしてゐる。そして木末がゆれる度毎に、涼しい涼しい秋風は秋を拂つてゐる。庭の千草におき結ぶ白露は、丁度御空の星の樣にきら／＼と……。

（評）讀むからに笑まし。

○人待つ夜　伊勢　森田實子

夜は更けた時計の針の進むにつれて喧噪な巷の叫び聲がなくなつて行く破れた垣根にこほろぎが鳴き初めたオ、寒むさうな聲だなぜ鳴くのだらう、是はきつと彼等も寒くなつて來たので冬の近いことを告げるのであらう、さうだそれにちがひない早く冬の用意でもして置きましよう、鈴虫は昨日父上の命日で放してやつたので今宵は泣かぬ、唯時々庭の芭蕉葉のすれる音が聞

えるばかりほんとに石でも生れさうな靜かな夜だ、あゝ足音がして來たお母さんが歸つていらしたのか知ら耳を峙てゝ聞いて居ると行き過ぎてしまう、あゝ晩い事、もう歸つて來られさうなものだと獨言をいつて火鉢の灰をかき回して居るとガチャリ、勝手に大變な物音、びつくりしてこわ〳〵飛んでいつて見ると、お隣りの黑猫が鼠取に頭を突つこんで椽の下へ飛びこんでいつた暫くそこらを見廻して居ると表に戸のあく音がしてお母樣が歸つて見えました、戸をあけると星は冴えて夜は靜かだ遠くに辻占賣の聲がひくうきこえる夜は大分更けたらしい觀音寺の鐘がなる、オヽもう十一時だ。

（評）氣の利いた所あり。



秋の夜　和歌山　歸谷宵雨女

〇濡衣

本郷　朝井松子

心せかるゝ儘下女の案內をも乞はで盛り過ぎたる眞萩白萩の庭を飛び石傳ひに澄子さんのお書齋へと。澄子さんと靜に呼んだがお返事が無いので稍々聲を高めて澄子さん入らしつて、するとハアと奧の方でお答が、間も無くすら〳〵と襖の開く音、床しき絹摩の音聽て南のお椽に美しいお顏が、マアよく入らして下さつたわねさどうぞ此方へ、御免遊ばせと丸窓の傍へ座をしめて、今朝程はお使ひて…早速伺ひ度かつたのですが客が有りましたのでつい、どうもお忙がしい處を恐れ入りました、いゝえどう致しまして……デ早速ですが私に急な御相談てどんな事、ハそれはと垂頭いて沈とお膝を見詰めて被入る、一體名譽を穢されたつてどう成さつたの……エ澄子さん早く伺はせて頂戴な、と我知らず膝行り寄つた、あの貴孃今月の〇〇雜誌御覽遊ばして、イエ未だ、ソーでは、とお机から雜誌を取つてばら〳〵と終の方から數枚繰つて、一寸此處を、と示めされたのは六號活字の剽窃文の注意、エ此の剽窃文の處をつと問ひ返へせば、ハア其の二番目を御覽下さい、と濕んだお聲で、何とは知らずハッと胸を轟かせ乍ら讀み下せば、扨も知らざりし斯る虛榮心の賊が今日迄我が神聖なる〇〇雜誌紙面を穢しつゝ有りしとは、そは第十一號奧

村澄子女史の叙事文天賞萩の宿は明治卅年大坂〇〇社發行の〇文壇に秋田山白合女史が白萩の窓と題して受賞せられたる文と僅かに數字の相違有るのみ。

餘りの事にばつたり雜誌を落して了つたが若やと再び取り上げてよく／＼見れ共確かに奧村澄子女史と、殊に萩の宿は去ぬる望月の夜心隔てぬ友どち數人打つどひて處も此のお部屋での思ひ／＼の語り草をいとも巧に物し給ひしなるを、扨も聞くだに忌まはしき剽窃文として披露せられしとは、山百合女史の白萩の窓とやらは果して其當時有りし物や否や知る由無けれど、兎にも角にも萩の宿は殊更澄子さんがみ心籠められし甲斐有つて筆取つて以來始めての傑作と悦び居給ひしものを、假令眞澄の鏡に照らせばとて露曇無き澄子の君を言葉も有らうに虚榮心の賊とはそも何事ぞや、吁此の耻辱を如何にしたら雪ぐ事が出來やうか、と思へば胸も張り裂けるやう、と見れば澄子さんは鬱に突伏しての歔欷き、嘸やとみ心の內思ひ遣られて我も共々ほろりと落つる一雫、澄子さん嘸お口惜しいでせうね、と微に慄の見へるお肩に手を掛けば、私此の濡衣をどうして解きませう、と又も泣き伏してお仕舞成さつたが扨慰めん詞を知らず、噫若や此の業は日頃澄子さんのお筆をいたくも嫉むで被入るあの意地惡の杉浦さんが、と虫が知らすかむら／＼と心に浮むだが口には出せず、ね松子さんどうぞ助けると思召てお智惠を借して頂戴な、しほ／＼として私の顏を見入つて被入るのがいぢらしくて、澄子さん貴孃に一點も疾しい處の無いのは彼の晩に會した方々が確かに知つて居り升よ……私どんな事仕ても必ず皆さんと御相談仕て此の濡衣は乾度解いて上げ升から御安心成さいまし、ときつぱり云ひ切ると、エそれては貴孃が、と私の手をぎゆつと握つた儘後は又もや涙と成つた、サ恁云ひは云つたものゝ此の先どうしたら此濡衣を解く事が出來やうか……嗚呼どの策(てだて)を以て此の濡衣を……。

○釋太愚師　　越後　水谷睦子

太愚師は一個の奇人なり、越州出雲崎の人幼にして穎異長ずるに及び遁世の念禁ぜず、孤錫瓢然諸國に歷遊し大に佛道に悟入し鄕に還り國上山下に小庵を結び名づけて五合庵と云ふ、盂鉢幾粒の握米吾が飢を凌ぐに足るの意に取れるなるべし身窮すと雖も貧人に施與するを好む、一日某村を托鉢し空腹禁ぜず或る民家に入り家人の不在なるにもかゝはらず十分に食事して立ち出てんとするを家人に見咎められ、先日盜をなせしも汝ならん啗乞食和尙と、之れを縛して土中に埋めんとするも敢て分疏の事なく默然たり折柄解良某太愚師なるを通りかゝりて發見し百方謝して釋さる、解良某曰く師なんぞ默して其罪を謝さゞると、太愚師曰く宿業の報ゆる所辨ずとも益なし其道を信ずること甚はだ厚きを知るに足る、性至つて兒童を愛し到る處嬉戯し物を打ち隱れん坊をなす等に他念なし、故に人の太愚師

の書を得んと欲する時は兒童を介すれば得たりと云ふ一日近村を托鉢し兒童と隱れん坊をなし一民家の籾小屋に匿る兒童發見する能はず三日を過ぐ、偶々人の見出すところとなり師は何故に斯樣な處に居給ふぞと太愚師語るに實を以てす、且つ曰く三日間の絕食空腹禁ぜず乞ふ一飯を與へよと某即ち厚饗して之れを庵室に送る、且つて一本の竹の子床下に生ず太愚師即ち床を徹し屋を毀りこれを愛護して竹をなさしむ、太愚師叉詩歌筆跡を能くし奧妙を極め殊に草書を善くす江戸の鴻儒北游の途次出雲崎の客舍に投じ、某の需めに依り雲浦一望樓の扁額を書するや太愚師のために其運筆の誤れるを指摘せらる、天保三年正月六日淹然として示寂す時に享年七十四。

◎鈴虫　あや子

鈴虫々々と賣聲高く呼ぶ聲に、今湯あみして小庭の涼風に暑さを忘れて居りました私は、表口に出ました、すると、チンチロリン〳〵と愛らしい聲をそろへて、鳴く鈴虫を籠に入れて、鈴虫賣りは西の方にせつせと行きます、秋草に虫の飛んで居る妙な行燈のほの暗いのが見えます、私は下女を呼びまして、虫賣を呼び止めました、やがて歸つて來ます虫賣を見ますと年は六十を過ぎたらしいお爺さんで、腰が弓なりに曲つたまま荷を擔いで居ります、どれがいゝだらうよく鳴くのを擇て下さい、と私も共に、これかあれかと、漸く一籠買ひました、お爺さんお前の内はどこだえと聞きますと、澤田村ですと答へながらお金を戴いて、ひよこひよこと町を指して行きました、私は此籠を軒の岐阜提灯と並べて吊しまして、團扇片手に椽の花莚の上に座つて、涼風をあびながら愛らしい聲を聞いて居りますと、ほんとうによく鳴きます、なんていゝ聲でせう、私は恍惚として居りました。

この鈴虫はどんな處に居つたのでせう、お爺さんは澤田村だと云つたから、里の小川の汀の草叢に生れたのでせうか、桔梗苅萱の繁つて居る秋の野原でせうかどちらにしても、秋深い閑靜な田舍そだちの浮世知らずでせうが、里と云へば田草取る、赤いたすきに手拭かぶつた少女が、戀の歌うたつて、往き來した其足元にひそんで居つたり、鍬を肩に夕餉の煙を指して、樂しい我家に妻子の待ちわび居らむと、そゞろ心に、急いで歸る人の足元にも鳴いたでせう。

夜靜まつて、塵に染まぬ田舍の野邊に澄み渡る、秋の月の淸い時、天地相和し互に秘密を通ずる時、其千草の中で思ふまゝに、秋の歌を唱つて、さうして濁りに染まぬ、此の聖らかな言語に譏せぬ、音聲の妙を得てそれで今其聲を私の耳に入れてくれるのでせう、なんていゝ音だらう、鈴虫つて、まア其自由な天地から探り出して町中を賣つてあるく慘酷な者もあるのだと思ふと、其音を聞いて居る自分も罪人の樣で、明日は籠から出して、叢中に放つてやりませうと、とりとめも

ない事を考へて居りますと、遠くに鈴虫々々と云ふ聲が幽かに聞えます、まだあのお爺さんは寶つてあるいて居るのでせう。

○晩秋の夕

三重　長井漣月子

夕焼のあかく染まつた空に、くつきりと墨繪の樣に聳えた大臺の山を、じつと見ながらゆふぐれの窓に、よつた。

夕日は今、小富士山のあなたに沈まうとして、眞紅の光りは野を照らし、山にかゝり、森を通し、丘を越へて、最後に音なし川の水底にかゞやいてゐる、ハタハタと白い鳩が三羽宮の森からとんで、夕燒に赤うそめられながら愉快さうに空に舞ふてゐたが、それもつかれたのか矢をゐるように向ふの茂みに下りた。

とう／＼日は山蔭に落ちて、山の際の浮雲は錦の御旗のように、かゞやいてゐる、花すゝきを動かす夕風は淋しく身にしんで、淡い／＼夢の樣な夕靄が鎭守の森をつゝみかけた、あたりは何となく靜かて、我魂は我身を放れたような、心細い、悲しい思ひがしてきた。仰いで西の方を見ると、もう夕燒は紫色にかはつてゐるので、じつと見つめてゐると、だん／＼黑みが多くなつて紫紺となり、終に黑が拔けて黑う、夜の幕と一緒になつて山の界目もつかなくなつて仕舞つた。森はすつかり白い霞に包まれて、其上て大きな星が一つちら／＼と輝やき出した、するとそれに誘れた樣にあちらに二つ、こちらに三つと、またゝき初める、もう村はすつかり夜の幕につゝまれて、平和の夢に入つてゐる、寒い風がスーと吹いてきて、萩の下葉をサラサラと鳴らした、向ふの丘に小提灯が一つ見へそめてだん／＼こちらの方へ近いてくる、俄かにそう／＼しくなつてきたので、空を見上げると雁の一群が口々に鳴きながら星をかすめてとんで行く。さつきの小提灯はとう／＼右の野道へ曲つて仕舞つた。月が出るのか餘程東の方が明るくなつてきた樣だ。

○從姉

仙臺　相澤張子

今日の日曜は天氣が好いので、人々は茸狩にゆくのでせう、三々五々打つれてたのしさうな樣は少しも淋しさがなく、まるて春のうらゝかな日のやうてす、それに此妾の家ては、二三日前より非常にいそがしくて茸狩どこのさわぎてないのてす、其は妾の從姉が夫は此度急に朝鮮に行くやうになつたので、其荷造りは從姉がする務なのに不幸にも從姉は去る五月より肋膜炎といふ人の嫌ふ病にかゝつた爲、何事も出來ないので母は毎日五六町ある從兄の家に通つてました、其中斯樣な事になつたので母の心從兄の心はどんなてせう、從兄とても成丈行きたくはないてせうけれど自分の務てすもの、それてすからあまり氣をもましても從姉の爲てないので三日前に從兄は、此處妾の家に參つたのです、其上て暇乞荷造り送別會を致しました。

いよ〳〵明朝出發する事になりましたのです、それて今日も妾が見舞にゆきますと、妾を見ると青白い頰にも莞爾として私に「私はほんとうに不幸てすよ私のやうな者は此世にあるてせうか、此度死んてもどうぞ此千代子を妹と思つて可愛がつて下さいね」と泣くのです妾は其返事が出ないで涙をとめる事が出來ませんてした。

其夜、妾は床についてから思ひました、あゝ明朝從兄が立つたら其後の病躰はどう變るだろう未だ廿四だのに、萬一の事があれば千代ちやんが……千代ちやんは今年二才、大きくなつてから母樣の御顏を思ひ出せるかしら、いやきつと知るまい、あゝ可愛想に今はほんとに罪のない父樣が御立ちでも母樣が御病氣でも少しも知らない、あゝ可愛想どうしたら從姉の靜さんの病氣が快くなるだろうか神ならぬ身の妾どうして知る事が出來ませう。

淡路　津市　越村ふみえ



花むしろ

青森　安田くに子

▲福壽草

新玉の年たちかへる朝、床飾の鉢の中、可愛らしう咲きたる福壽草の花、滿開の花一つ、半ば開けたるもの一つ、小さき蕾二つ、大なる蕾一つ、綠濃なる姫松と、實赤き南天の樹の下に、黃色うるはしく香ふ。

人誰かこの花を見て、その名のゆたかなるを慕はざるものやある。

▲梅の花

年こそあらたまれ、寒風膚をさく雪深き溪の滸、異香紛々、獨り春の色を洩せる梅花、いかに雅客をして詩情を發さしむるよ、一枝二枝手折り來て、瓶にさしばさみ、文讀み勞れし折、茶の湯啜りつゝ、打眺めんもまたをかし。

▲枝垂柳

花にあらねど、枝垂柳の芽出しも、そよ吹く風にゆら〳〵と打なびき、千條の糸みすの如きそがあたり、一羽、二羽の燕、行き來する、こも一入のながめぞかし。

▲さくら

わが住より程遠からぬ柳原の庭櫻、今盛なり　牡丹ざくら有り、御殿ざくら有り、一重のもあり、八重のもあり、花櫻もあり東風一陣颯として來れば、香雪片々滿廊白し。見ぬ芳野の山の櫻より、

この花こそ妾がための詩の友なれ。

▲桃の花

花のけ高きは梅、花の美しきは櫻、桃はこの二花にこそ及ばざれ、燃え立たんばかりに咲ける桃林に入りて一瓢傾けん客は、なかなかに興多からめ。

▲菜の花

高き山にのぼり、ふもとなる菜の畑ながむるは、げに心地よきものなり。千頃萬頃の田の面、黃金を布けるが如し、また所々に、紫雲英の棚引けるあり、綠麥の青波打つもあり、そがあたりの空に、塵と見るまで小く、影見えつかくれつ、聲滑に謳へる告天子の音、げに心浮き立つものぞかし。

▲山吹花

黃色の花も、かずかずあれど、山吹の花に勝れる花はあらじ。梅、さくらは早散りて、一庭やゝ綠がちなるその中に、黃金の箔打ち開きたるが如、あざやかに、咲けるは、いとゞ目さむる心地ぞする。

▲すみれ

いまの人は、花としいへば、すみれすみれといへど、菫はさまでうるはしき花にあらず。さあれ春の野邊に、あくがれ出て、草滑かなる芝生の上に座し、たんぽぽ蓮華草、躑躅などとりどりに咲ける中に、優しき綠の葉に、濃紫の小花を咲けるは、いと可愛らし。

▲藤の花

梅櫻桃李はいふも更なり、花てふ花は皆散りうせ、九十の春光も今やくれ果て滿庭みどり蒼々、ながめいとさびしき折から、千載の、綠濃やかなる松が枝高く、紫の波ゆらゆら動くは、み社の藤の花。もゝさくら盛りの時に出てなば、見ん人もなきに、あはれ造化の神は、この花をしてけふさかしむるはうれし。

◎汽車の旅　　三河　近田みつ子

「はあ、年齢だつてまださう急いで呉れねいでも善いし、それに、まだ家の仕事も忙しいのだ、蠶はあるし、それがすむと直ぐ稲刈りが始まるから、とても來月の初めになんかては仕度が出來ないからつて斷つたのだが、先方では仕度なんぞ無くても良い、體だけ來てもらや良いのだからつて、たつて呉れろつて云ふから、ては仕度は出來ないが此度の蠶がすんだら呉る事にきめたのだ」「それはまあ結構です、花でも人間でもてすがすべて物には時季と云ふものがありますからな、あの田柴のとこのように、誰れがもらひに行つても、やれ學問が無いの、やれ財産が無いのつて、呉れなかつたのだが、もう二十六才になるのだがまだどこへも行かないのだ。どうせ一生涯家に置くのではないから時に呉れるが一番よいです。それに與吉さんの所なら人は善し金はあるし、申分のないよい所です」三等室の片隅に今朝からゆられゆられた其つかれて、うつとりとして居た妾の耳にさきの聲が聞こえたのでふと眼を開くと、知らぬまに幾驛か過ぎたと見えて乘合

の客等は大方は縫つて居る。名古屋から乘つて自分の傍に腰を掛けた東京へ勉强しに行くと云つた品の良い二十四五の女だけは、やはり自分の傍に居る、乘つた初めはしばらく私と話し合つて居たがやがて鞄から横文字の書物を出して熱心に見て居たが、今は何か思ひに沈んで眼に涙さへ浮べて凝然と一方をみつめて『あゝ若き血汐の枯れぬ中、若き……』など小聲につぶやいて居らるゝから妾もそちらを見ると、十七八の色は黑いがおとなしさうな田舍娘が風呂敷包を抱いて恥羞さうに俯いて居る、其傍には四十五六の田舍風の縞の羽織をきた男が、同じ年格好の商人風の男に話して居る「それで今日は少しづゝとも思つて買物に行つて來たんだが、どうもなにかの値が上りましたなあ。そのかはり私等の賣る米も値よくなつたてもとつてだが」あゝこれが先きから話をして居る人等だなと思ふて居ると速力がゆるくなつて靜岡と云ふ驛夫の聲におどろいて妾は汽車を降りた。



茶摘女　名古屋　清子

○渡船

愛知縣　小島幸子

龜崎の渡船場から新川ゆきに乘つた時は、私の外に七八人、少時待てども乘客は來ないからもう出すだらうと思つても中々出さない、すると不平らしい聲で「おい船頭、待すのも好い加減にしろ、全體何時まで待たすんだい」と手にせる雜誌を下に置いて、年の頃は五十二三の肥肉の美髯を蓄へた老紳士が、古びた船の舳にぬつと立つて怒鳴つた。

ヒヤ〳〵御同感とでも言ひたげに舵端の書生體の若い男が、きつと結んだ口のあたりを撫でながら、片手に持つた新聞をそつと傍に置いた。五月蠅さうに髮のほつれを掻き上げた女學生風なのが、活々とした眼にきらりと置いた露ば、欠伸の名殘りでもあらう？其の隣には縞の風呂敷包を大事さうに膝に載た機織工女らしい田舍娘がコクリ〳〵と白河夜舟を漕て居る。

「へえ、今すぐ出します」と輕々しく言つてのけた船頭は、もう客は來ないと見込みをつけたか、濱邊の砂地を離れて船に立つや、えいと一突き。

日は正午時、家々の竈からは煙が頻にのぼつてゐる。

新體詩

河井醉茗先生選評

三等

○鐘聲

德島　穎晤比企尼

あゝ、あはれ鐘鳴りぬ。
悲しびの「鈍」の日を、
いま日脚なやましく、
ものうげにわれを射て——。

昨ならず悲しびは、
此夕身にしむを、
友もなき病床に、
何寺の鐘の音か、
しめりたるさびれ音は——。

あゝ胸の負傷いえず、
そは何時の日かいゆる。
ひちりきの悲し音に、
喪服着し人群れが、
葬ひの日も夕べ、
雨風に文字やせて、
たうれにし墓多き、

そが中をおもむろに、
うねりゆく日なりけり。
うちしめる念法に——。

今はあらぬ友ながら、
あはれ鳴る鐘の音に、
その昔の影もこそ、
「鈍」の日の今日見しか——。

身はやがて死ぬべきか、
かねの音は一しほの、
あはれをばまきそえて、
限とづればしばし世に、
恐るべき音聲の、
うづまきは冷やかにしむ—。

例の暗黑面を歌つた作、格別鋭い文字も見えませんが、力はあります、感興も表はれて居ます（醉茗）

四等

○峠路

三河碧海郡矢作町稿目　永田舞鶴子

朝またき、狹霧とざせる
はざま路、顧すれば樹間すく
夜守のまなこ鈍眼なる
有明月や—寂寞さぶ森の、、、

辿りゆく葛折さか路、
躓きつ、はた喘ぎつゝ行きゆけど
峰もえわかぬ深霧や、
谿間に咽ぶせゝらぎは巇欹の俯居

むら霧の絶間ゆほのに
燦めきしみ影もあはれ雲に入り
はては小雨の瀨吹きては、
なやまし、泥に踏みなづみ、岩に滑りつ

望みては、かしこ頂、
佇みてこゝにはか路わかぬ路に
迷ふとしてはたち返り——
疲れやみ樹蔭さへむなし汚れぬ

雨雲はちぎれて燦ら
青空に日に照りはえぬ—仰ぎ見て
「かしこ頂、あこがれの

海やのぞまむ――。』こをどりつ勇みいそぎぬ。
あはれ、そは頂ならて――岩根、樹根こゞしき坂路、胸つきて
高く聳えぬ。――かゞやきし、
日もかぎろひてむら時雨はげしく過ぎぬ。

筆の伸び工合は詩に珍しい位です（評者）

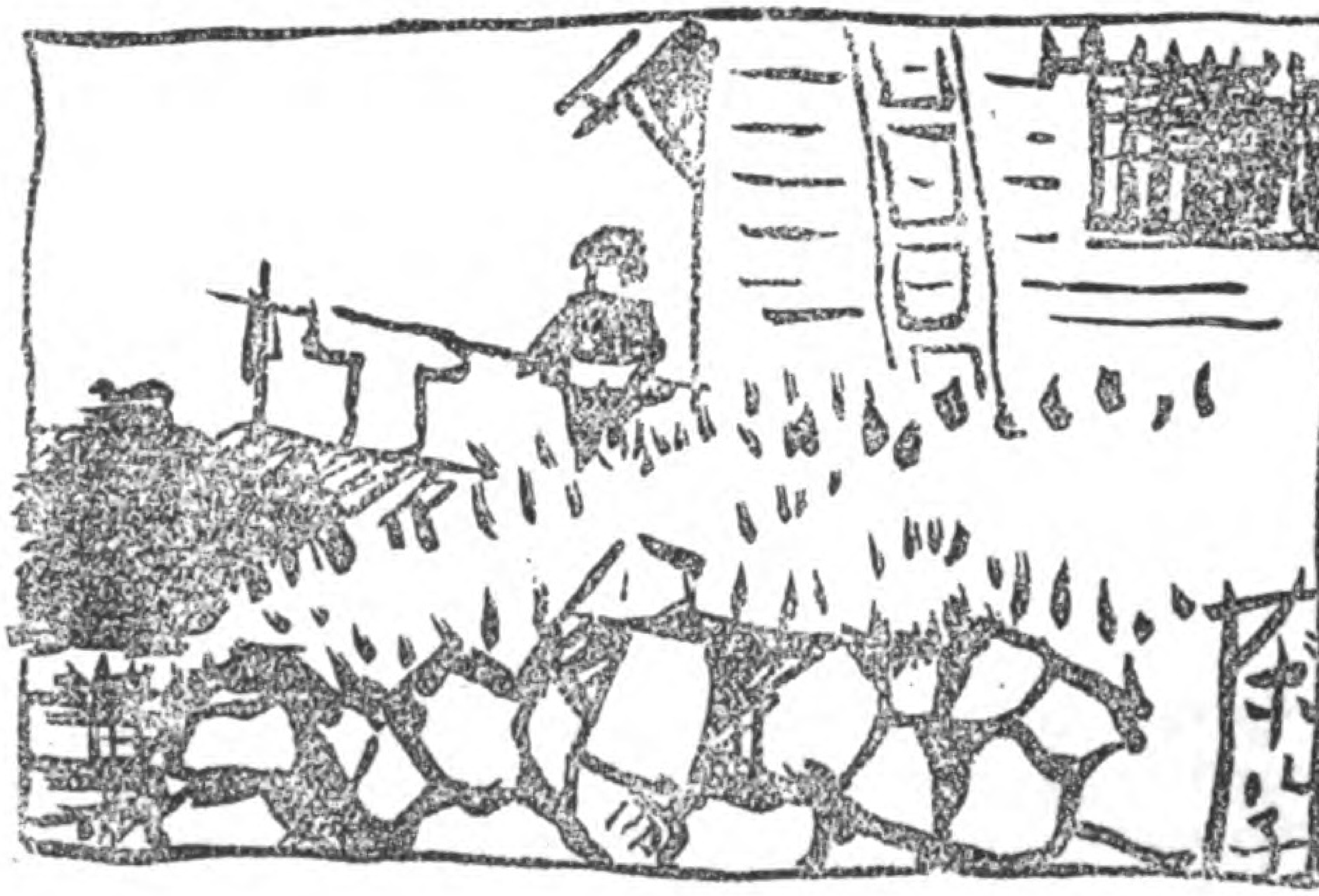
五等

○叫び

名古屋　内藤てつ子

さやかなる聲なりし、
そは天なる姫が浮歩み
薔薇の刺に裾とられ薄絹を、
引裂きしとも、妙し音に聞き恍くる。
あゝ鳥や何處に
あこがれに只寂しき森を深み
楡樹末、雲のとぎれを打ち仰ぎ、
はふり落つる冷たき雫胸に泌みぬ。
はた〳〵と羽搏しぬ、　聲の主こゝよ、と胸とゞろかせしも、
そは青鳩の叉、枝低に片眠、おびえ姿、そもあだなりき。
かくても我は慕ひぬ、　戀なりき、あゝ精の聲ならて
遂に其姿見る術もなかりき、さらばゆく月影の暗きを恨みじ。
あなせつなさの今宵や
こは、なげかひの我胸に巣くいたりし
黒鳥の行く秋を悲しとて
のがれいで若き惱みの叫びならじか

少しわざとらしくて、餘り深いインスピレーションも與へませんが、作は工夫したものです（評者）



のどか　小櫟鈴木のぼる子

秀逸

○夕の星

富山市　小林芳枝子

太陽のほこりうするゝ、
西の空天路の門に
夕の星またゝきあはく、
窓により美しき乙女の
片笑むこともおもはる。
影くらきかの森の端に、
燈火やゝに明るし、
滿足と平和の色に
微笑みて農夫は仰ぎ

夕の星を望みけり。

今日の事明日の幸をば　ねがふらしそのほゝゑみに
うなづきの應へにみゆる　星の色憐みふかき
力の人に似たるかな。

野はくれて農夫のかげは　燈火の下にやかへる
夕の星ひくゝなりて、　圓かなる月の面かげ
光も白くみゆるころ。

思のうたらしい情調を持つてゐます（醉茗）

○纓紅草　名古屋　骰　盆子

朝、狭霧の晴れゆけば　離のほとり玉藻凝る
振袖それは眞青若葉　捧ぐる寶珠そは何ぞ
女神やこもる楚々として　醉く風情の纓紅草。

愛てふ神が罪ふかき　戀の吐息の色みせて
冠に似たる龍に　若きやひそむ夕星の、
秋を奢りの嬌艶に　吹かずもあれな朝の風。

夜べ美しき夢こもる　眞紅の花瓣、雪の蕊、
艶麗なりや白露の　朝日にまろぶ花の上

魂を忍びの垂れぶりは　誰をか待てるけはひ哉。

纓紅草とは好いものを見附けましたが、お作は一向に振ひません（醉茗）

○さすらひ　徳島市　知枝子

われとわが魂。
「日」をあくがれて、
いまゆくは、葉もり日かげ、
葉びろ柏、
手ゆたげの、杜の下路。
オランダ苺は、
瑞木のかげの戀がたりに、
濃紅のまぶし笑みこぼれ、
色どりは、
うるみ眼にさしくゞむ。
そゞ杜の端の——寂寥——。
興湧いて分けたどれば、
物の怪の香は、たゞ迫りぞ來。
あはれむすぼれし魂。
あつれしを——、
掬みつべき冷水もなし——。

前半よし、言ひ足りぬ處があるやうです（醉茗）

○涙こぼる日　徳島　長曾我部菊子

清水を追ひて鶺鴒の　秋草越ゆる石原を
純白山菊犯されぬ　一重の色の薫りたる——。
朝露みてる花冠發　風にあふらる。片笑ひ
ふと瞳にいりて彳めば　薫りそめけり。夢殿の——
嗟若人の燃たちや　只管人の欣慕れて
眞白愛少女山菊の　此の容貌美しき人思ひし
白き太陽に泣く寂寥を　幻、君のうす櫻
花なる笑の面ざしに　忘るとしてき。なだめけれ
魂むつむ友として　暗き我世に涙おふ
ものはぐれせる悲哀を　慰めましと念ひしか。
雲は吹きくる秋風に　後おはれて逃れけり。
入染めする時雨あめ　楓がかげに雫して
はらゝぎおつるたまだれに　秋は隈なく去りにけり
（鋳つけたる胸の扉の　痛手、つと酔ひざまに
涙ぐむ——浮歩み。
山小菊亂れさく　草河原とつおいつ
花の香に「敗」を思ふ——。
涙あふる日なるかな。）

熱烈の氣は籠つてゐるらしいが、これでは殺はれてゐません（評者）

○醜　女　　信濃　あやぐも

寂しさは打ちつけに、　口に得云はでまれ〳〵の
人の面かげ見し時に、　たゞならぬ心の動搖
吾と並み居の優さ人が、　針の手運ばす默思の想
愛の「ちから」か宿るらん、　その面のかゞやけば
嬉しみ絶えじと吾は識りぬ。
「はなやか」さ醫えなば。
うづ高く籠に盛りし花の如く
かほる息もつ美き人の、　胸にやどりて永久に咲く〳〵
云ひ知れぬ寂び心、　吾れを封じて……
人の身の幸あるをのみ、心に泣きぬ。

女ごゝろの一面でせう（評者）

○湯　殿　　長野縣　依田花園守

自然の賜はる安息の　時をし告ぐる夕の鐘。
一日のわざにうみ勞れ　なへし心に憧がれの
さゞめきもるゝ湯殿哉。　足の運びも輕らかに
照り彩ゆ瓦斯にぱッと匂ふ名も花の湯の戸に佇てば
氣も暖かき夢心地。　おゝ夢心地、つと入れば
湯の花ゆるうみなぎりて　薔薇菫の香を高み
和ら溫みは身にせまり　白き狹霧の湯氣罩めて
朧ろに和ごむ室の內。　ふと見ぬ、處女影二つ
こは大理石の彫像か　其のふくよかの華乳房
露滴らん黑髮の　はらりこぼれしなて肩や
輝やく眸に、唇の　燃ゆる紅、おゝそれよ
二人と見しはひが目にて　そはきらびかの大鏡。

誠、太初の面影よ　裸形の女、羞も無く
罪も驕りもあらなくて　朝にひらく花の如
胸に宿るは美しき　衣着けぬ世の夢心地

名も花の渦の戸に立てばなど云ふ調子を成るべく早く蛻脫して新意ある技巧を試みてごらんなさい、あなたの作風には見込があります(酔茗)

○秋の日

茨城縣　小泉さかえ

木々の實沈む秋の水、　寂影美しう潜みては、
小森をめぐる水の音の、　久遠の靈譜奏でつゝ、
太古の夢をまもりかに、　紅影長く地に曳いて、
靜寂にかへる落葉かな。　よき音うれしみ木に倚れば
白鷺山雀の與語る、
冷をおぼえてうつゝなの、　神代の戀に醉ひもすれ。
胸の小琴の高ひゞき、　おさへもかねし繊手や、
もつるゝ秋の雲を見て、　羊追ひつゝ野に下る、
わが瘠せ頬に風吹いて、　白蝶一羽寒いかな。

寂しい氣に感じました(酔茗)

○闇の夜なりき

大阪　鷲谷ゆり子

闇の夜なりき――
忽つと明けて了みぬ、醜の魔迷ふ天地は、たゞ暗くして夜の風、陰府の扉破りあふれ出て、世の物絶えず呪ひしつ、渦をまいて吹きすさぶ。
あな恐ろしと戰きぬ、心は冷えて血の氣失せ、我肉、とはに朽つけはひ、打伏す願ひあな悲し、物怯じに足すくみ居ぬ、もがき悶えぬ小さき胸。
微かにひらめく幸の光り、つと眼上げ透かし見ぬ、眞白なる衣身にまとひ、黄金のつるぎしら銀の、星頂ける救ひ神、哀れなる子と手をふれし、血潮の溫みひらめきぬ、冷えたる胸に音ぞして。

睡遊らしく見えて、其實ごまかしのない作です(酔茗)

○古池

京都　吉田靈花

其昔天の魔神等が、　快樂の舟に酒置いて、
休息の歡樂味ふべく、　漕ぎにし事もありけむを、
千歳を森に木がくれて、　大檜垂枝に掩はれて、
汀は百合の香も奇しう、　眞晝靜寂の領なれば、
たゝりやあると罪の子は、　魔の古池と戰きて、
近寄る者もあらなくに、　水面は油のさまにして、
浪さへ立たぬ寂寥よ。
古りし快樂や偲ぶべく、　雲の八百重をひた走り、
大檜の梢こづたひて、　美酒手にしたる一群の、
巨眼輝く魔神等の、　天降るか森の古池に、
月、さゝ浪に清き夜は、　今も聞ゆる――神笑ひ。

おもしろい趣向です(酔茗)

○榊

和歌山縣　池田しげ子

神さびし森のおく、
苔むせるさゝ流れ
淸き音のしらべして、
永久にさゝやく。
そのほとり天さして
そゝりたつ大巖の
頂きに一本榊
色濃く榮ゆ。
東の高嶺より、
月白う萬物を
てらし出でぬ世は寂寞、
嗚呼、神秘の夜。
さびしらにごゐ鳴きて、
夜は更けぬ、蒼穹より
星の子を引き具して、
降る神白たへの
　御姿ぞ尊し。
榊御手に御空さして
かへります神姿
おろがみし諸人は
ひれ伏して、
あな崇高……。

好い作のやうで間が拔けてゐます、まだ手なれない處もあるのでせう(醉茗)



秋田　大坂倭文子

○闇の小川

下野　淺沼　女

更けゆく夜半に唯ひとり、
野邊の闇路を我くれば
おぼつかなくも烏羽玉の
小川の水のさら〳〵と、
流るゝ音の我が耳に
聞へたるこそうれしけれ
獨りあるきて獨り行く
あはれ小川よ闇の夜を
野路に山路をたどひとり
我に向つてやさしくも
汝もかたるか汝もまた
おぼつかなくも流れつゝ、

素朴、此んな詩もおもしろい(醉茗)

○寧樂の想

和歌山　彩子

あこがるゝ過ぎし代や、
天女の夢の寧樂の朝、
色彩なせるその都。
蝶の如、華を逐ひて年をおくり、
煩惱の夢を破る鐘の音と共に、
彼方佛の御國に逝きし
美し人々、その人々の情。
塔、彩畫の壁、聖の御像、その教へ今尚輝く御寺
軟風や、迦具土の香も消え去りし
古き跡訪ひくれば、想は千々に亂れつゝ。
上葉散り透く森の陰路、平和にあそべる鹿、汝れが
母の乳房がたりに、傳へ聞かずや
古へのあと――聞かまほし。

以下數節は取りました、詩は紀行文のやうに見たことを悉く羅列しないでも濟むのです（評者）

○折鶴

丹波　紅花女

纖手巧に童女の、　白紙折りて鶴の形、
息温にこめられて、　輕げに翅打ちはぶく、
戀の姫神息吹けば　緋桃白桃花咲くを
人の少女の手に疊む　紙にも魂のこもらずや。
七色雲のたなびける、　海のあなたの蓬萊の、
浪しづかなる島山に、　妾が夢載せて去ねよ折鶴。

あつたやうな趣向にも思ひますけれど、兎に角氣品ある作です（評者）

○十五夜

深川　川村紅薔薇

美ちやん早く來てごらん、あれあれお山の木の間から
圓いまるいまんまるな、きれいな淸いお月樣
ニコ〳〵笑つて私等を、見ながら昇つていらしつた
美ちやん早くいらつしやい、さあ〳〵お椽へ腰かけて
こゝにならんだ御馳走の、栗におだん子あまい柿
あの冴え渡つたのゝ樣に、皆んなでおすゝめ致しませう

「あの記者樣私は今年小學校を卒業したばかりでやつと十五なのそしてこう云ふもの作つたの初めてですこれからは勉強しますからよろしく」と書いてありました、夜雨さんよろしくねがひます（評者）

○新春頌

岩代　松山薔薇子

紅長く空に布き　潮の音遠き東雲や
百合の花びら射ぬきたる　征矢は十束か銀の鞍。
駒の歩行も壯嚴に　のぼらせ玉ふ曉の神
白き光は平和の　聖き天地を彩りぬ。
麻溪のほとり春若く　露に聲ありあさみどり
木々のちよろづ香を吹きて　萬象新らしき匂ひあり。
見よやこぞめの春霞　森にかなづる鳥の曲
こゝに色あり希望あり　こゝに道あり命あり。
あゝ、淸新の血はもえて　思ひは猛き春の子の
蒼空高く聲あげて　「光榮」を讃ぜん今日なれや
あゝ、淸新の血はもえて　思ひは猛き春の子の
色をかざりに鞭あげて　「光榮」をたゝへん今日なれ

格調高逸（評者）

○秋の海

越中　宮城つゆ子

さしもに廣き大海も、
淋しき秋の氣に沈みて、

遠ざかり行く碧空の、　落ちて映れる彩色に、
澄みてぞ見ゆる八千尋の、　瑠璃の宮居の底ふかく、
わづかに動く鱗族の、　潮を隠れ家の籠りゐや、
潮のうねりさら〳〵と、　蘆の枯葉にさゝやきて、
いま凄涼と幽愁の、　終焉の玉翠逝くがごと、
波浪に漂ふ欸乃の、　生活に咽ぶ哀調して、
やがては消えん暗黒の、　磯の香さむき秋の海。

○嵯峨野　　京都　田島　薫

洛の戊亥保津川の　流せゝらぐ嵯峨の里
くまなき月にあこがれて　獨寂しくさまよへば
そゞろ古郷のしのばれて　尾花の露に袖しめる。
影にやつれし女郎花　さきいでにける柴折門
なく虫の音に琴もやと　耳をすませどあらずして
小督の殿な思出に　御碑の前にぬかづきぬ。
保津の流は絶えざれど　行くは昨日の水ならず
小督の殿も横笛も　流にうかぶ笹の葉ぞ
激き流に弄ばれて　遠き昔に流れ去る。

○農家　　土浦　豐　月　子

林檎はみのる園の中、　生熟なりし秋の野茸、
夕陽の光豐かに、　しかも豐けきありさまの。
柴垣添ひに若駒の、　手綱かいぐり轡ふりて、
同じ鞍なる兄妹、　秋の野茸より歸り來ぬ。
夕陽影を顔に浴び、　兄のみ膝に身をもたせ、
園の林檎の熟れるを、　眺むる妹の眉幼し。

兄は妹に接吻して、　古きエデンの物語り、
指さす勿れ智恵の實を、　と戒む顔に光あり。

○わが命　　群馬縣　濱　千　鳥

我は生れし其日より　いと草深き上毛野の
片山里にかぞいろと　やすう送りぬ十九年
まだうら若き青春の　血しほは燃えぬ我身にも
去ぬる年の神無月　父が親しきある人の
み使なりと來給ひし　君こそ我身の命なれ、
まだ世の風に染まぬ身は　いとゞ君のみ戀しうて
月には思ひ花に戀ひ　心は常に迷ひゐぬ

○鹿の夢　　遠江　栗　松　絹　子

日はあざやかに大木紅葉　小春は風の温ろくして
青草に臥す牡鹿雄鹿　夢にぞ入りぬ餌に飽きて。
そは神々しき野原にて　久しき戀を語ること
樂し夕餉のまどらかに　疲れの湧きて共に夢に。
猛者そは罪の人さへも　厭るゝを懼る辛の身や
永劫に神の使　汝れも尊き命ならむ。
野草の上のあたゝかき　猛者も神鹿も數多過ぎぬ
神の護らむ汝れの夢　長き小春の幸多く。
互の戀は語りしか　女夫の夢の無事なれや
大木紅葉に夕日あてに　笛の音さへも遠くなりぬ。

○冷風來る　　沖繩縣　白　野　ち　よ　子

夏逝く夕西の空、　彩雲斷る秋の宮、

龍田の姫の頰笑みや、
長御空の雲追ひて、
つと翔れては高囀りつ、
凋落の調べ冷やかに、
綠よ！紅に燃え染めて、
花の樹蔭をいたづらに、
彩羽衣のいたいけに、

○夢

日比谷の園は、
吹き上げの泉のあたり、
いづこよりとも思はれず、
想夫戀にはあられども、
君と我れとは出逢ひけり、
妾の胸はをどりけり、
御手にすがる時もあれ、
いづことも無くきへてけり。

○紫　怨

春醴の饗樂に、
衣桁の蔭にかくれては、
舞衣かけし小鼓や、
狂ほし胸やときめきの、
薔薇の紅を口含み、
君にし鎭らば世に足ると、
放ちし初陣——秋の風。
縱橫ひける天絃に、
武器の征矢を地に向く。
星飛ぶ夕地まけば、
森羅萬象痺せぬ、色褪せぬ。
蜜の甘きに醉ひし蝶よ、
いぶせく秋の野に迷ふ哉。

赤坂　春蘭女史

咲き出てけりな秋の草、
ハモニカの音きこへきたる、
懷しう思ほゆる時、
君の頭はさげられぬ、
あゝ懷しき御君と、
あな不思議!! 御姿の、

播磨　宗野ゆき子

醉ひたる眉は若うして、
美しき君の名も呼びぬ。
君に侍らば興もあれ、
仇なる花と誰が捨てし。
逝りし戀の繪卷物、
獻げし玉も碎けたり。

灯花やぐ室町や、
歌姬何の淚ぞや、
宵の枕の冷たさに、
心亂れて氣もそゞろ、

○紅薔薇

たけにあまれる黑髮を、
心もかろきゆふぐれを、
亂れてかゝる髮の毛を、
かざしにせよと彼の君は、
うつろひやすき紅薔薇、
夕べの床にしほるとも、
髮にかざしゝばらの花、
見せよと人の强ひもせば、

○紫　苑

しをんはゆれぬ、
秋風さむしこの夕べ、
しばしをいこふ袖の下。
しをんは散りぬ、
六里の野路を行きくれて、
草に打伏すひざの上。
しをんは笑みぬ、
淚にくらす己れをば、
十七にして髮切ると、
人に情の袖やらぬ。
友禪の袖かたしきに、
果敢なき戀を歎くかな。

福島縣　三浦たか子

つげの小櫛に梳らせて、
野べよりかへる暇いち。
かきあげながら千めば、
薔薇の一枝贈られき。
よし花瓣はつやあせて、
我はかざゝむ長しへに。
色さへ香さへ悟らせじ、
靜に胸に秘めてまし。

小草子

御許の祝日はくれて
虫さへなかぬ草むらに
かよわき女の一人旅
宿かる家も泣きながら
世にも人にもすてられて
同じ運命をもつ人よ。

わが花かげに休み給へと。

○わがおもひ

麻布　福谷いち子

忘れんとしても忘れ得ぬ、
ゆめにうつゝにまぼろしに、
胸をはなせし夢ぞなき、
姿け高き白すみれ、
まことの愛の花すみれ
清くやさしき愛の花、
忘れ得ぬこそことわりよ。

したはしき君のみすがたよ
いかなる日とて片時も
愛の泉のすみれ草

○詩の魂

廣島縣　國信操

蝶々の羽に乘りて、
わが魂は浦安の
郷國を今去りて、
上るよ〳〵月の國さして。
美しき巨蝶の羽、
日に照りて麗はしや
月見えず星見えず、
願はくば日よ早う去れ。
我は今目まひして、
蝶の羽をすべり落ち
驚いて目あくれば、
手を胸にして血湧く音高し。

○うれひ

福岡縣　鈴木たけ

ほつれしの、
解けやらで、
なやみある、

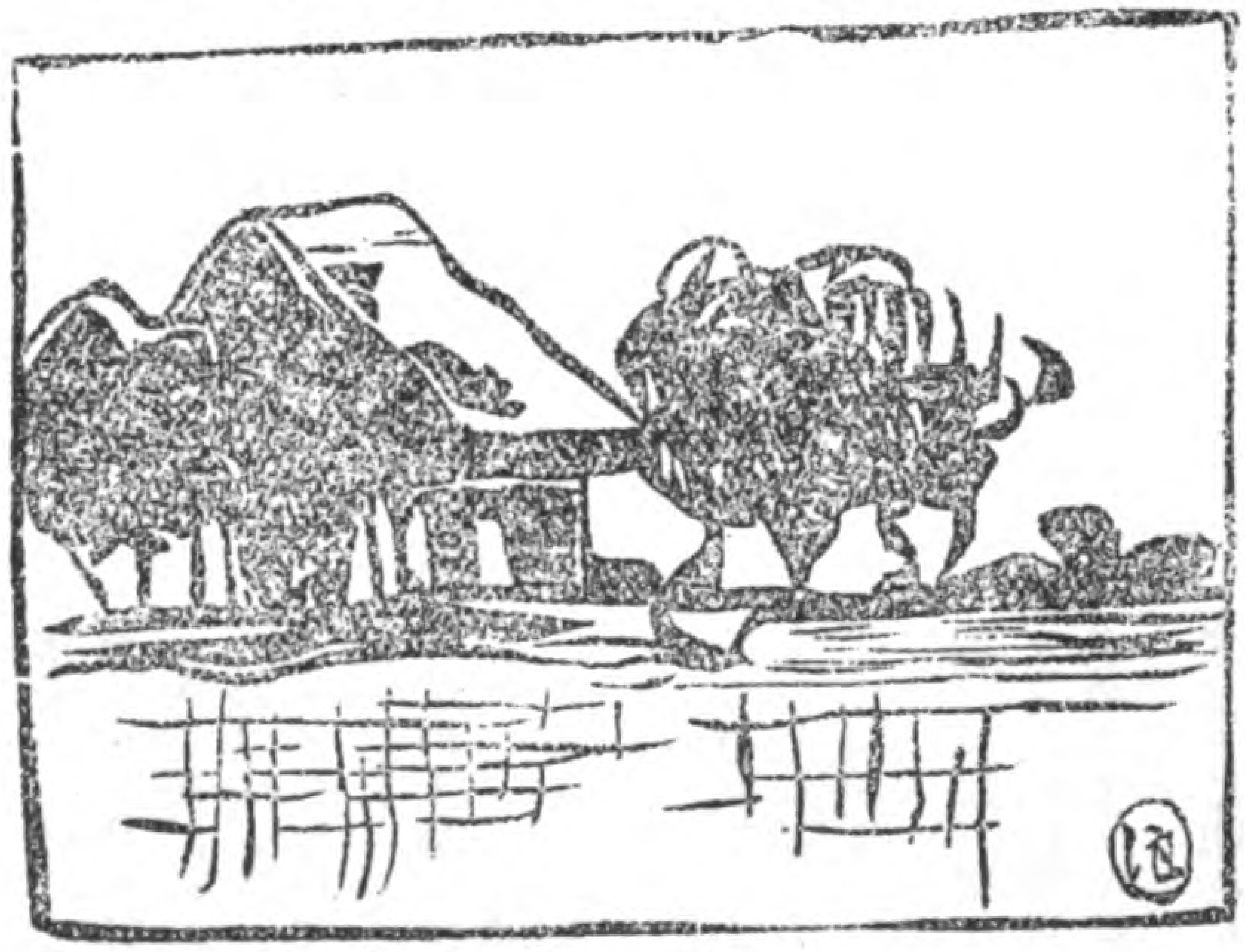
こゝろの糸の
短き袖に
頬を支へて

色あせし、
たゞ一人、
そゝくぐ、
若き葉を、
足元を、
身のうれひ、

海棠の根に
頬ひ倚れば
春の宵風
優しくしたひ
名殘なく去る
啼さんものと

忘想を
ふ意に破りて
星宿る
瑠璃の玉散り
沈みつる
頬にこぼれぬ。

月夜　松ヶ枝浪江



○白鷺城賦

姫路　柳田白百合

暫しときめく夕燒の
花恥かしき空の色
白雲ながる靑松の
鷺城に榮ゆるうるはしさ
自然の藝術偉大なる
雲そゝりたつ尊嚴の
白鷺の雄姿見上げては
崇高の念むれにみち
感慨うたゝ絶へがたき
血しほ湧きたつ全身の
肉も引きしむ心地して
思はず襟も正さるゝ

金風渡る大野原
夕やみやゝに野をこめつ
天地は寂し秋の聲
旅の衣をぬぎ捨てし

いま萩がすそに蟲なけば
病葉風に散り初めて
哀愁せまる仲秋を
今宵をせめて更さばや

十とせあまりを旅の空
なやみも深き聞ゆ子が
懷の香ひしめく湖や

○哀愁

丹後　落葉愁人

蟲啼く三更を寢覺して、
寒風に、
頬を吹かれては、
片破れの月顯れたる、
しんみりと。——
音をこそ立てれ、潑樹だち、
哀愁の胸抱きては、
洋館（母校）想ひ出づれど、
砕仰ぐには懺悔の涙餘りに深く。
餘儀なく永却の隱家を、
終とこそ、定めつれ。——
嫉妬の嵐、迫害の雨。

○唐桐

四備　きよし子

いき〳〵と秋の意殺す唐桐や、
腐葉のいくそ心臟がたなる。
墜すぐにつなぎあはすや、血こそかよへ、
頂にかざす花ぞくれなゐ、
血汐にや育まれつる、ひたすぐに
大天さして詔はむけはひ。
そもしばし、誕せつる花の散りゆける、
さあれ捨てがて葉ぞうけとめて、
心臟におき夢みるときのしづかなる。

○秋

薩摩　木場春子

龍山の姫は袖とりて、
心ばかりの酒宴あり、

うらぶれはてゝ影もなき
昔戀しき故郷の
舟中の客と身を任す

戸の隙間もる、
敗殘の身の痩せほけし、
あなほろゝ涙に溺るゝ小枕や。
櫺より照りぬ、
上葉下葉のすれ合ひて、
葉漏りの星は寂しくて、
嫋びやかなる、
信冷えて、
斯くてあゝ——、
わが親善の
あな逃び來ぬ、
我は沈默しぬうな垂れて。

留またれよ葉守り神
列し給へよあゝ暫時。

綠と紅の世は去りて、
破れ芭蕉葉のいと騷ぐ。

○十歩の花ぞの

門司市　彌吉雪子

秋の日を山に入りては
音づるゝもの心消むる
隋天のかげに
朝晴れの月の影
一人の與に我れからほこる
花植ゆると
なでしこや桔梗
露のしたゝり
さゝやき落ちぬ

○夢の旅

——息たえたる嬰子を抱きて母のうたへる——

神田　佐藤みつ子

冷たき光胸にかゞやき
するどき響き秋のきぬれば
その瞬間に吾子は逝きけり
靜かに眠る罪なき面を
そと眺むれば青ざめはてゝ
色のかず〳〵亂れうかびてゝ——。
すがるに馴れし母が乳房の
夜寒に泣きし闇の手枕
逝の葉面は夢寒むかるを——。
ひとりの旅は遊なかけれど
菩提樹の蔭——石の寢床に
夢はめぐりて野づかさに見む——。

はや世も秋の風吹きて
靜かなる風に月に
愛らしの小鳩の三羽
羽うごかれば
十歩の花園
妹の手づたひ
なよ〳〵と水きせし
花より花にほゝじして

あゝ黑髪の逝立つおもひ
枯草野路の虫、霧に鳴く
神にかくしておのゝきつゝも
夢にうつゝを重れしごとく
この晨より誰にもとめむ——。
あゝ今宵より誰に添ふらむ——。
靜かに眠れ光なき世の
寒かる霧の夜半のねざめな

短篇小説

廣津柳浪先生選評

二等　○軒の雲

土佐國吾川郡弘岡上の村　深瀬ます子

燃える樣な功名の念を抱いて、慣れた日本の地を去り戰後の旅順へ向つて來た時の友子は夢にも今日の樣な淋しい儚い日の有ふとは思ひ設けはしなかつた。女ながらも廿世紀の日本に生れたもの、お國の爲に出來る丈の力を盡して、倒れてさうしてやめる決心。もとより我といふものは無い、父も無い、母も無い、姉も無い、弟も無い、富も無い、戀も無い死も無い、生も無い、世の中にたゞ事業々々、犠牲獻身の事業のあるばかりであると、思ひ知て、人々の氣狂といふもかまはず、女壯士といふのもかまはず、雨と降りかくる縁談の口をのがれて、學校を卒業するや否や、心の合ふた友と二人、折から募集の有つた支那の小學教員を拜命して、見事一旗擧げるつもりで渡つて來たのであつたが、一人の友は半年の日が經つか經たぬに病氣で歸國した。

新しく開けた旅順の町は甚だ亂雜なもので、多くは下等社會の者の寄り集り。これ等の人は適理想と抱負を持て立ち向ふた友子をも、自分等と同じ樣に日本での餘り者が、流れて來たかの樣に見なし、友子が折角骨を折つて教た躾も、すつかり家庭で打毀してしまう父兄からして教師を輕蔑して居るから、どう手懐け樣としても、子供は逃げてしまう。その學校の校長といふのは巡査上り、一人の雇は、何所かの中學校の放逐生、てんから友子の話相手にはならぬ。もとより人を頼むといふ念は微塵無いに於ても、人情は薄紙よりも薄くて、何事も金が先に立つ。これが日本の人かと友子はつく／＼怪しんだ。其中で一人犠牲獻身の働をするのは實に／＼思ふたよりもむづかしい。友子の終生の事業として身を打込だ仕事も、二年目の今日つく／＼嫌に成てしまつた。

友子は三笠町はづれの學校を出て、今日の勤もこれきりと、小い包を抱へ、夕日の目映い

のを、蝙蝠傘に避けて、我が沓先の塵に汚れたのを、厭はしいと思ひながら、何となく、疲れた、目をふせてぽつ〳〵と宿の方へ歸る新しく建て並べられた粗造な店や暖簾を外す人水をまく人、荷車を曳く人、支那人朝鮮人、日本人まじり〳〵て街巾は狹く、ともすれば、自分につき衝つて行く人もある。この夕暮を、なほあやしい聲で賣物をして行く人は、我に金を與へよ、食を與へよと、呼んで行く聲の樣に聞えて、何故か今日程淋しく味氣無い思のする日は無い。何故自分はこの樣な見すぼらしい事をして居るのか。何時迄かうして働いて居なければならぬのか。自分ながら嫌になる。あゝ秋だ、秋だ、全く時候



の所爲だ、秋といふ物は淋しい物だと思つて見たが、我と我が身が憐でならない。あゝ、あれでも買つて見樣かなと思つて其所の店に出て居たバナヽを少しばかり買て、ハンケチに包んだ。歸つて之を食べて見樣と思つて、またぽつ〳〵歩き出したが、なか〳〵それでも慰まぬ。自分が此處へ渡つて來た時は、どういふ心で有つたらうと當時の意氣を呼び返して見る。けれどももう〳〵影も形もなくなつて、たゞ〳〵淋しい。何時の間にかくも悄沈してしまつたので有う。學校に居る頃、事業熱を吹き込まれてより、早くも自分は人を斷す樣になつて、卒先してこの樣な所へ飛て來たものが、あゝいひ甲斐が無い——

しかし自分共のクラスで在たあの連中は、あのまゝ元の學校に止つて居る。いくら其方がよかつたかも知れはしない。然すればやつぱり自然と學力が付くので在た。自分許はこの野蠻な所に居て、敎を受け樣にも人はなし、勉强爲樣にも時間はなし、といつて今更何の功績も無しに、元の學校へ歸られはせぬ。一躰自分は今何を樂にして居るのであらう。月給の戴かれるのが、樂か、敎育の功果の擧るのが樂か、どうしてどうして敎育の功果は一朝一夕に擧るものでは無い。そんなら何が樂かとよく考へて見ると僅の月給を割いて、國元へ送るのがまあ今の所何よりの樂である。嫁入するのなら、貧乏へ行く、奉職するのなら、貧民學校へ行くのが偉いものとして、富を土塊の樣に賤んて居た自分が、やつぱりいつか金に樂を持つ樣になつてしまつた。自分の從妹の好ちやんなどは、子供の時から學校が嫌で、書物といふものは手にも取らず、お白粉付けて、美しい袖を振つて、人中へ見せびらかしに行くのが樂で在た。自分は窃にそれを輕蔑してお友達とは思は無かつたが、早く豪農の妻となつて、今は少くも月々萬の金があの小い手を潛る樣に成た。自分は何所迄も乘りかゝつた船だから、岩に碎ける迄は、やり通すけれども、實の所、それが厭苦い、厭苦い、この上もなく厭苦い、何故にこんなに厭苦く成たのて有う。元の意氣は何處へ行つた。茲にあの意氣さへあれば、決して厭苦い事は無い。戀しいのは火花の散る樣なあの頃の意氣である。どうしてあの樣な美しい花々しい意氣が、この弱い自分の胸に燃えて居たのであらう。それは皆學校で受けた敎育の熱が燃え付たのて有た。其熱は實にすばらしい物て有たが、一朝校門を出て、一人ぽつねんとこの樣な所へ飛びはなれて來たが最後、次第に熱を失ふて、醒め盡した今日の詫しさ、淋しさ、何故こんなに淋しいので有う。抑々犧牲獻身といふものを、新しく見出して、神の福音と喜び躍つて騷いだあの時の心狀を今から冷かに思つて見ると、確に犧牲獻身を最上の名譽と思つて、あの樣に心が躍つたので有た。然て有たく、自分は犧牲を名譽と思ひ、名譽の爲に親を捨てたのみか、再び來ない靑春の時機を捨てゝ、こゝ支那三界へ迄來たので有た。それ迄思ひ至つた時友子はいふにいはれぬ苦痛を覺えた。そして何所をどう通つて來たか誰に合たか一切知らず、自分の宿の雜貨店へ這入て居た。友子は疲れた足を引て二階へ上り、机の上へ二つの包

を投げ出した。歸つたとて目を樂ましめる物もなく、心を樂ましめる物も無しに、ひし〳〵と淋しさが身一つを襲ふて來る。友子は其儘其所にうち倒れて軒端に動く雲を見詰めて居たが。其目にはいつか涙が一杯に成た。

近頃流行のモデルがあつて書いたのかも知れないけれど、此位描寫の力があれば、何を書いても相當に表現し得られやう、伸びず、縮まず、短篇に相當した書きぶりである。且此作の着眼點たる友子のやうな女は、今日實際にも必ずあらうと思ふ、際物と云ふより現代の女子の境遇を捉えるに、最も機敏であつたと云ふだけても、此作は成功して居る（選者評）

三等　○月の一夜

下谷區谷中清水町　渡邊方　妙子

秋の或る月の美しい夕、お葉は、一人狹い椽の柱に身を寄せて、清い光に恍然見入てる、「あゝ何ていゝお月樣なんだねエ」泌じみ斯云て、飽かず眺めてる。

お葉は花屋の一人娘、今年十七の娘盛り、色の白い眼の凜然した美しい娘であるが如何した事か、此秋の始頃から重い肋膜を病て、二三日前に漸く病床をはなれた許り、病後の顏も身體も青白くやせていたいたしい樣だ、お葉は今此の美しい月を眺めて戀しい思出に耽て居るのだ「あゝ傘屋の京さんにも一度逢ひたいわ、靜岡てゆやア餘程遠いんだろうかねエ何故又彼樣處へ行て終たのかしら……矢張這那いゝお月夜だつたね、遊びに來て歸りが遲くなつて祖母さんに叱られるつて云ふから私が送て行てやつたら門口でお葉さん、俺今夜の樣な晚何時迄も思てゝ忘れないよつてお月樣見てニツコリした、あゝあの時私心から京ちやんが可愛かつた」だから今夜の月を京さんは見て屹度偲出してるだろうよ、あゝ戀しいとお葉は只もう恍惚として強い光に吸込まれた樣、我を忘れて夢の樣な瞳を輝かしてる、さつと吹く秋の風が冷やりと衿元に泌みて、「オヽ寒ぶ」とお葉は半纏の衿をかき合せて首を縮めた、月は次第に高く、椽にあつたお葉の影は障子へとかゝつて銀杏返の髮の亂毛までが確然と影に戰いてる。

「噫私寧その事あのきれいな光の中へ消えて行きたい樣だ……けど一人じやつまらない京さんと二人て……」斯う思てお葉は青白い頰をさつと染めた。

「オヤ嫌だよ、お葉はまア何て、何處へ行たのかと思てたら這麽所に何して居たのさ」と突然大きな母親の聲、お葉は何にも云はず俯て靜として居る、「さあさあお內へ入てなきあいけないよ、未だ全に快くもないのに此樣寒い所に出て、又ぶり返たら如何するのさ」

お葉は痩せた手を兩の膝明へ突込で無言て月を仰でる、母は『お葉つたらどうしたのさ、氣狂見たよな娘だねすお入りよ、戶をしめつちまうから』と、戶袋へ手をかけて早しめ始める、お葉は其戶を押へて『まゝ一寸待てよ私も少しお月樣見ていたいんだからさ、お願ひだつてば』優しい目を潤ませて母の面を覗る、母は呆れて、

『まア馬鹿らしいね此娘は、お月樣などいつまで見てたつて同じ事ぢやないかね、其麽不養生して惡くなつても知らないからつ』と、プン〱して入て行く、お葉は淸い月光を身一杯浴びて椽に腰かけた、空は飽くまで蒼く月はあくまで淸い、其中に星が銀砂を撒いた樣、美しく輝いてる。

其れを身も世も忘れて凝とばかし見入てるお葉の黑い瞳にはいつからうるはしい露が光てた。

『あゝ斯うした美しい景色の晩に私しや、戀しい京次の傍で靜かに死ねたら甚那に嬉しいだらうね！……私いつまでも永久もこの夜が明けずに欲しい』

あゝお葉はいつまで這麽事を思つてるのか……月は瞬一瞬西へ急いて居る。

此作を讀んで感じたことは、作の垢抜がしてあること、田舍臭くないこと、人物の描寫も、人物の對話も、明治の江戸ッ兒式に出て居ること、てきぱきした小說で實に氣味がよい、聞く作者妙齡正に十六と、此熱情と此意氣と、幸に健に育ちゆけ（選者評）

四等

○十月空

長野、あつみの里　靜潮子

上

たとへば白被衣の葬儀女が並み立つてゐるやうな桑林が、秋の夕日に眞白く映つて、半ば落ちた葉が薄黃色した斑點のやうに地に布いてある。自分は其中に迷ひ入つた。暮がたの空の色、晴れても居らず、何となくうすいやうな雲が一面にかゝつて、日の光は冥府の白壁から洩れてくるかと思はれるうす白い色で。――淋しい風。桑の葉がはら〱と散つて、地は一層密な斑點が描かれる。自分ははつと思つて立ちどまつた。

丘の雜木林は、風に木の葉が黃色になつて、一枚づゝあきらかに、また朧ろげに、時としては煙のやうに、幽かに沼の方に飛んでゆくと、止つてゐたのであらう小鳥が數十羽慌たゞしく向ふの櫟林の方に逃げて行つてしまつた。木の葉のやうに――葉の亂れる際の、ふと眼についた時の有樣は、狂女が丘の上で髮をみだして走つてゆく姿に似てゐる。

秋の夕日はいたつて薄い。丘の雜木林、桑林——林といふ林は皆戀ひを失つた妖女のやうにうす日を浴びて立つてゐる。自分は恍惚として暫しは夢のやうてあつた。

永劫にうす澄んてゐる秋の空色、さびしい木立、薄日に消される樣な野原。この地はこんな景色で幾世の先までつゞくのてあらう。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

まあ何といふ哀れげな歌のしらべ、かの雜木林にそよいだ風てあらう、ひゞいてゐる。その音の一振動毎に木の葉が一まいづゝ散るかと思へば一段と悲しくなる——入日が沈みはじめた。林や木立や丘や沼が一分一秒毎に、殊にあの雜木林の丘が淋しい血色の夕日に頂きを照されてゐる。自分の心は特種の感情、むしろ神秘に觸れたかの樣に冷かな氣持がした。が、その考へもいつか消え去つて、今度は何心なくその丘を見つむるのてある。血の色が薄らいで雜木林は悲しい淋しい死滅の色と云ふ樣な夕日にぎら／＼と輝き出した。太い幹が五六本、灰色にひかつて、太古の人民の家の柱の如く、それもやがて經つとこの地を何處にか誘つてゆくと思はれる冷たい風が吹くのてある。

自分はどうしてこんな悲哀な景色を見るてあらう。その林の中の木の間にふと氣がついた妹の墓、あゝこんな淋しい野の丘に今日も寢てゐるのてあらうか。妹の墓よ妹の墓よ、自分は思はず驅け出して沼の邊りを何度すべつたかしれない。丘の麓まで來て見上げた。夕日は林の梢をかすめて眞紅の流れを大空に漂はしてゐる。自分は無中で雜木林の丘を驅けのぼつて、妹の墓を掻き抱いて泣くのてあつた。

下

人も通はぬ丘の上、哀れつぽい夕暮の風が吹くばかり時々蝙蝠の黑い影が葉の中に現はれると思ふと、飛び下つて沼の方に消えてしまふ。悲しい景色。なれど二人して沼の水面に桑林がうつる美しい色を見た限りなき樂しきこと。うす暗がりの夕にこんな所に建つてゐる墓石、いく年かたてば風に嵐にすれるてあらう——十月なれば沼の水もかれて次第に褪せゆく色を見るにつけ、孤獨の身のやせ沈むさま思はれていたましさ。櫟の並木の向うから湧いて出る薄靄の立ちのぼる烟の如く、さては後ろの遠野の草より夕暮の幕は益々深くこの地を蔽ふてゆく。——こんな淋しいたぐひはないのである。沼の面はだん／＼暮れて水鳥のやうなもの

が一羽湖心に浮んでゐる。浮いたり沈んだり、その波紋が何百何千てふ程である。その一紋毎に沼は幽妖の境に陷ちゆくやうで滅入る樣な氣がする。沼の精がこつて奇鳥と化したのではなからうか。

* * * * * *

いつてあつたかこの沼の景を、この丘の上で二人が見てゐた事がある。夕がた、沼は薄靄に遮られてはつきり見えない。沼の鳥が二羽湖心で浮んでゐるを見た。

「ねえあの鳥は何て云ふ鳥なんてせう。あれ見るといつても悲しくなつてあたしがあの鳥になるやうな氣がするの。」「此沼に落ちた人が化けたんてせう。」

「おゝ怖いこと、あたしもうこんな所へ來ないわ。」妹は默つて湖心をみつめて居たが、急に自分の後ろにかくれた。——何物にか恐れたのであらう。

* * * * * *

自分はかの鳥をしばらく見つめてゐた。然し何物かゞ自分を導引するやうな氣がしたが、矢つ張鳥は鳥であつた。妹はその何物をか見たのであらう。自分は見えなかつた。櫟林の上に現はれた夕星、妹のそれのやうなやさしい瞳でゆらいでゐる。自分はかの星の天苑に引かるゝやうな心持になつた。鳥が一羽、林をさして飛んで過ぎる。あゝ若し自分に羽があるならば、あの星に行つて接吻して來やうものを。

もう沼は見えなくなつた。野、林、いづれも神秘をこめてゐる如くに見える。慕はしい星も櫟林に這入つてしまふ。十月空は憂愁と寂寥とを帶びて、全く暮れてしまつた。

是れ或ひは小說と云ふより美文と云ふものであらう、併し小說と美文とは接近して來て殆んて區別がつかなくなりさうな昨今の文壇に、此作を小說として迎へても誰しも怪まぬてあらう然れば趣向や、筋に就いて言ふべき事はない、文章の水際立つて美しく詩を讀むやうな點を推す（選者評）



新夫婦　熊本縣　花里とり子

五等

○こほろぎ

渡島江差佐平治町　森野紫袖

夕月がほんのり、濃い藍色から花片の如うに浮んで、對ふの空地へはびこつてる瓜畑から、こほろぎのなく

音が聞える。
君子は默つて其調べを聞いた。何んとも言へない寂しい人戀しい思ひがしみ〴〵とする。
(あゝ一層、嫁からか知ら!。)
ホロ〳〵、ホロ〳〵、と虫の聲!うすら寒い夕風が浴衣を吹いて、後れ髮を亂した。君子は尚も思ひに耽つて居るのである。生かぢりの學問をした爲に、やれ理想の、希望の左の右のと、騷いてる間も時の力は迅速後かれ早かれ一度は秋を見る花の運命はおろか、自分の身にも开れと氣付いては既に人生の春、それも暮れかてのはや今年は二十三!
降る程有り餘つた縁談が、ぷつと無くなつては、そゞろ肌寒さを感じずには居られなかつた。熱心に、望んて與れた內山は、友達の增子と言ふのと結婚した。高橋といふのは眉子と言ふのと、辰見と言ふのは光子と言ふ女と、最も脈つた松尾といふのは、町で一番の美人!と言ふ自分と當の敵とあつた花枝さんと——然かし一番に、ある一種の高慢心を挑發したは、十九になる所と言ふ青年を、煩悶の極(狂)に至らしめた一事て、——之て、少なくも自分の美貌と言ふ者に對して大いなる自信を持つた。氣に入らぬ縁談は、一も二もなく、獨身主義で打ち碎いた。然雖生涯眞に獨身生活を遂げ樣と云ふ堅い決心のあつた譯でもない。たゞ、(生かぢりの學問、)それを今では非常に悔んでゐる。
ホロ、ホロ〳〵と虫の音!
今なり掛つた縁談と言ふのは、三十五になる或る實業家で、一躰が禪一貫から叩き上げた丈けに、頭は只だ(金)それは希望の良人と大分背馳した性格らしいのて……然れ共、最う开麼事を言ふてゐられない、一年ましに衰ふるは美しさ。あゝ孤獨!
(淋しいわ!)と、心からつぶやいた。
遙かに、招魂社の木立の邊から、笛のね、それも何だか自分の運命を弔ふ愁調の樣、嫁からかしら、なんだか开れも悲しい樣な、けども孤りも寂しいし……と思ひ迷つた。
そして世間には、矢張り私のやうな、煩悶をしてる人も、屹度あるに相違ない、とさう思うた。

少し理に落ちて、說明しすぎるけれど、二十三四の女が抱いて居る煩悶、能く其一面を描いた、虫の音は調和しない、わざとらしくあしらうてあるからいけない、書き足りなかつたのであらう(選者評)

秀逸

○運命

神戸市　平林たつ子

呻吟る如な汽笛が鳴つて、汽船が動搖き初める。戰く胸をおさへて、のびあがりながら陸の方を見れば叔母樣と、從姉のお小夜樣とが、眼にいつぱいの露を湛えて、見送つて入らつしやる。

噫、私は、懷かしい母樣や、戀しい故鄕の山河と別れて、聞いたばかりでまだ見たことのない、大阪とやらへ唯獨行くのだ、と思ふと眼がぼう〳〵として、霞でもかかつた如になる。頭の髮が一本々々引きしまつて、天井へでも釣り下げられるやうに思ふ。

お小夜樣が私を見て、御辭儀した如だから私もした。悲しさが込み上げて嗽入るのを、他人に見られてはと强ひて隱して、再び陸を見ると、まだ叔母樣とお小夜樣とが立つて入らつしやる。

お優しいお二人はきつと、汽船が彼島に隱れる迄、見送つて居て下さるだらう。

あゝ、とうつむくのを待ちかねたやうに、熱い〳〵涙が、止度も無う頰を傳はる。

鎭まらぬ胸を無理にしづめると、今度は種々の想が潮の如に寄せてくる。

家を出るとき、お母樣が細いお聲で「菊や、隨分身躰を大切にね、首尾宜う年季を務め上げて、一日も早く、無事な顔を見せておくれ。母樣は何時迄も、丈夫で待つて居ますから」とさも〳〵なつかしさうに仰やつた。丈夫て……噫母樣は眞實に然う思つていらつしやるのか。村の御醫者樣が、此病氣に罹つて助かるものはあるまいと云ふ、あの聞くも恐ろしい肺結核。……

汽船は最早餘程沖へ出たらしい。水をかく音までが、身の肉を一分々々切りきざまれる如に感じる。

お父樣がお死亡なされた晩、母樣が私を抱いて「菊や、父樣はね、あのお月樣のお傍へお出でなさつたんだよ」と仰つて、淋しい微笑をなされたが、私は其時八つの幼心に、何より大切なお雛樣の頭がこはれた時より、もつと〳〵悲しく覺えて、母樣と二人で散々泣いた。

學校の運動場の葉櫻の木陰で、秋田先生が杉山先生とお話の中に、運命と云ふ事を仰つたから、後で先生に聞いて見たら、「知らぬ中が幸福です」といくらお願ひしても、聞かして下さらないで、はては自然に分りますと仰るばかり、其れからもう三月にもなるが、未だに其解釋かてきない。

けれども、運命と云ふのは必ず、宜い事では無からうさうでなければ、秋田先生が、あんな事を仰る筈が無いもの。

昔は兎も角、今では日々の糊口にも差支えるので、病苦になやむ母樣に、せめてお嗜好な食物でもさし上げたさ、僅ばかりのお錢のために、大阪の或會社へ、製糸の工女に雇はれて行く私の身の上は、決して幸福だとは思へない。噫、是が秋田先生の仰つた、運命ではあるまいか。

私は今運命の神の捕虜になつてゐるのだ。私には、親と云つては只つた一人の母樣は、もしや父樣がお死亡の時仰つた如に、お月樣のおそばへ入らつしやるのではなからうか。

いや〳〵其樣な事はない。斷じて無い。母樣は五年の春秋を經て私の歸るのを、指折つて待つてゐて下さるだらうし、私も一日でも早く歸つて、母樣の御無事でお悦びなさるお顔が見たくてならない。

私の大切なは母樣一人。母樣も亦私を措いて、外に何の樂みがあらう。

然うだ〳〵と勢よく起つて、來し方遥に眺むれば、四邊は最早暮色に包まれて、雲と水との區別が別らぬ程なので、伯母樣もお小夜樣も、漁家も何も見えやしないが、時々白い綿の如に、寄せて行く波の向ふに薄く小さく見える彼の松林、噫あの陰の草葺小屋には、貧苦にやつれ、病苦にやせた母樣が、凄い程蒼白いお顔に、くぼんだ眼のまぶたを腫らして、此方を見て泣いて入らつしやるだらう。

またいつかのやうに咯血でもなさらねば宜いが、……神樣よ。私が無事に歸鄕りますまで、世にも憐れな母樣の身を、私に代つてお守り下さいませ。

運命とは斯う云ふ事であらうかと幼な氣に人生の別離を悲む情緒は好い捉え處であつた、文章の中にも奇抜な比喩が使はれて、自我を發揮するに努めて居る、全體に氣の利かないやうな書きぶりしてゐる代りに、風がある（選者評）

○一筋道

下谷　久子

「静さんや、さう〳〵母樣に世話を焼かせるものではありませんヨ、色々と苦勞を忍んで五年間も東京の學校へやつたんだから、卒業して歸へッて呉れたら此の上は前々思つて居た通り修さんの處へ嫁つて老先短かい私に安心させておくれナ」

お静は母親にこう云つては毎日のやうにせまられるが都の色に移ろつた彼はいつも生返事、ぐつたり机にほほづえついては、

落葉拾ひ

奥市　井上さわ子

あゝ母様には濟まないが私はどうしても東京が好きだ一處に學校を出た友達は、どなたも〳〵學士だの實業家だのへ嫁らつした、さうして皆美しい立派な奥様におなりなされて、定紋付のごむ輪のお手車で髪美くしい旦那様とも〳〵其處此處と交際社會へ立交はつていらつしやるといふ。それだのに私ばかり一人ぼつち、大百姓だとはいへ田舎の百姓の家へ嫁つて一生せまい村にくすぶつて暮すのは思へば思へばいやだ。田舎、百姓、そんな無意味な、樂みも面白味もない生活でくち果てるなんてどうしても私は我慢が出來ない。あゝ都、歡樂、驕奢。

お靜はうつゝにあこがれた。

日毎もだへて秋風の夕べ、あまりに我心の淋しく、やる瀬なさに絶え兼ねて、久しぶりに背戸へ迷ひ出た。どつしり下向いた稻穂分け〳〵畔道を行くとバッパと蝗がはね出す御敕使川の流れが面白さうに舞踏しながら小歌をうたつて居る。なみ〳〵澄んだ水の色や空に續いた千町田にお靜は曾て覺へぬ心地よさに氣も延び〳〵する。其の川が細い枝川に流れ込む處に、幼友達のお光が、赤いてがらの丸髷初々して、手織着物の裾端折り、襷さりゝと米をといてゐる。秋風がスーつと横顔をかすつて毛がはら〳〵。



「お光ちやんお精が出ます事ネ」

不意に聲をかけられて周章てゝ振返へつて見上げて莞爾。

「まあお靜さん、びつくりしてヨお散歩？」

前かけで手を拭く。

「あらお流しなさいヨ、私そこでお話するわ」

野菊や赤飯のみだれて居る川邊に膝をついた。

さく〳〵と磨いては水に流すとパッと眞白く、すぐまた澄返へつて川上からは靜かに夜の色が流れ寄るやう。

お靜はうつとりと言葉もなくお光のする樣を眺める。

「お靜さん、今年は好い鹽梅に豊作だつたから、豊年祭があるのヨ鎭守様て、この十日に」

「まあさう、私久しぶりて見に行きたい事、」
「エ、いらつしやいヨ、ぜひ一處に行きませうチ、ほんとに幾年ぶりかでチー、うれしいわ」
やさしく笑む。心から友を嬉ぶその顏、眞心の滿ちた平和のあふれたそのなりふりをお靜はつく〴〵と見入つてほつと息をついた。
「光や、もう行くてチーカ」
不意に土手を曲がつた川下で聲が起てつたのにびつくりして立上がつて見ると、お光の亭主の孝太郎が、澄み返へる水にさら〳〵と足を洗らつたり鍬や鎌を洗ひ上がつた處。
「ハイ〳〵もうすみましたから參りませう」
水の手をぐつとしごいてスラリと立上がる。
「お靜さん、寄つていらつしやいナ、お芋でも燒きませう」
「有がと、又ゆつくり上がつてよ、お父さんにもよろしく」
「エ、じやあまたどうぞチ」
足早に孝太郎に追ひ付いて並んで歸へつて行く。
お靜は石の樣に突立て見送くつた。
「オー、湯沸いたーぞー早くかへれー、孝も光も」
遙か下の土橋の邊て年よりの聲が聞える。
お靜は再び草の上に倒れるやうに座はつてしまつた。
折柄遠く新田の方から、馬の鈴音がコロン〳〵として極靜かな、秋の聲かとも思はれるやうな馬子唄が聞える　お靜は魅せられたやうに聞きほれた。
やがて歌の主はすぐ前の小路にあらはれた。何の氣もなく眺めたお靜はハッと驚いて立上がつた。僕に追はせて馬の上に修さんが、折柄の秋風にはら〳〵亂れる水萩を肩にして乘つてる。
立すくんだお靜を目早くみつけて無邪氣な笑顏。
「お靜さん、そんな處に何して居るだチ、今日は吉田へ行つたて、これ」
と花を一搖。
「もらつたから、今歸りに持つて行かうと思つてす」
お靜は生れ更はつた樣な、はれ〴〵しい顏を爲、心の底から、嬉しさうな笑を見せて、馬から下りた修三と三日月さやかな細道を何事か樂しさうに語りながら稻穗に消えた。

處女時代に起るむらごゝろ、東京へ行きたい病も平和な村の自然と人間に化せられて、それも忘れて了ふ、書いてある事はそれだけだが何となく主人公の女に同情させる、花やかなやうな沈んだやうな一種の調子を持つた小說である(選者評)

○動かぬ星

宮城縣　小百合

今宵の空は美くしい星夜てある。星の色は、きら〱と光る。庭の隅のいてふの樹、其梢の方に、大きく光る星が見える。紫かと思へば赤とも見られ、赤かと見れば、紫とも思はるゝ、其色あの星を、白い、細い、指先に一寸觸れたなら、さつと燃えて燃えた中から、純白の衣裳召した、女神が現はれて奏て出づる作曲に和して空中に舞ひ、御空の星は一時に金砂粉まいたやうに散るてあらう？

私は第三室の、窓に寄りかゝりながら、星月夜の崇高な美にうたれてうつとり勝手な想ひにふけつて居る。こう眺めた寮舍の夜景は、至つて淋しいものである。花時には、さすが行く人の歩をとゞめる姥櫻六七本表門の塀に沿ふて、逝く秋の淋しさを落る其葉に示して居る。夏の夕べの食後には、よく動かしたブランコが片方のつなが切たなゝ、榮えた往時を語つて居る。テニスコートも今は落葉の、奥津城處となつてしまつた自然を友のこの質素な庭に菊の花壇のみは秋しらず顔に咲て居る。大輪の白と黄は、星の光りを、あびて夜目にも鮮かに見える。

二階の靜寂さに反して、階下は到つて賑かてある。美妙な音のヴアイオリンや、金鈴に觸たやうな獨唱の聲が高く、低く弱く、強く、急調にまた緩かに夜の寂漠を破つて聞えてくる、それは皆、明日の夜の文藝大會に妙技をふるはん爲の練習てある。

（燦々たる小さき星よ）と小聲に詩中の眞珠を口吟みながら私は夜半の風の冷たきをもいとはて去りやらず星の美にあくがれて居る、つと第十室の窓ガラスが、スル〱と上にあがつて、室内から、半身現はした人がある。白い紙片らしきを、持た手を、窓にもたせてぢつと空を仰いだ。頭上の電氣燈は、袴紐緩かに結んだ、胸のあたりから、白襟匂ふ、襟元憂ひを含む眼元までほんのり照した。

あゝ光樣だな、お痛しいことよと私はほろりとした。月も星もまだ見解ぬ頃から、父樣母樣に逝れて、眞の親子の愛をしらなかつた、光樣はたつた一人の兄樣を己が終生のたのみとして居た。

月影落て、枯柳淋しき、秋の夜を、白の病衣にすがるたつた一人の妹を殘してあたら靑春の望み多き身を冷たき土の下に眠る身となつた……。

噫其の夜から、光樣はまたも、新佛の位牌の前に涙に

暮るゝ日を送る身となつた。當時の光様の胸の中は、察するのが却つて仇であらう？（亡くなりなされた其夜から寮舍の庭のいてふの木の上に、色紫の新星があらはれました、いつの夜見ても同じ處に、ちつとも動きません。私はあれが兄様の魂でせうと思ひます）。と隔てぬ仲の私に、光様はよく話される。

全校中に、文の天才と云はるゝ光様は明日の夜の會にえらばれて、唱ふ自作の詩は、幾夜を星の下に、富も愛も、誇も、凡て、捨て、神のやうなる、崇高なる眞情に作り上げたは、即ち……動かぬ星……それである。

人はみな、明日の夜をまつと共に光様のそれを千秋の思にまつて居る。けれど其の中に血の涙のこもつて居る事は誰も、知らぬであらう？

窓際に、星を仰いだ、光様は、今はもう泣かぬ。否涙の泉は盡てであろう？星の色は、いよ／＼さえて、夜はいよ／＼更けてゆく。

光様の手にもつた紙片は、其手をはなれて、ひら／＼地上に舞ひ落ちた。逝く秋の風は、何とも云へぬ、程心地よい、木犀の香りを送つた。

女學生生活の一部が美化されたもの、今はこれを讀んで何人も其ハイカラなるを咎めないまで進歩した、天才の詩「動かぬ星」、文藝大會、是等を綜合すれば自然に聯想はつく、筋よりも文致に於て人を魅する力がある（選者評）

○十三夜

本郷　朝井千とせ

「蛙が鳴いたから家へ歸ら……」今し方迄鬼事よ隠れん坊よと遊び戯れて居た子の一群が夫々家路にいそいだ後は又一頻ひつそりと成つた、藥師堂の裏手の杉並木から肩も摩れ合ふ計に寄り添つて、ひそ／＼と語り來る若き男女が有る、軈て男は荒れたる堂の椽にどつかと腰を卸した、女もそれと並んで。

「マー姉さん考へて御覧なさい……老先の長い身を意地惡い姑にいじめられ薄情な夫に虐待され剰へ主婦たる位地をも奪はれて下女同様にこき使はれて居る夫でも尚ほ忍ぶ事が出來るのですか……姉さん幾ら忍耐するにも大低程度が有り升よ……」と云つて沈と女の方を視詰めて居る青年は色の稍々淺黒いきつぱり墨で引いた如な一の字眉、凛として威の有る眼元には一角の分別が有るら敷、身には黒せるの學生服を着して居る、女は此の村の小役人瀧澤角造が妻のお島とて歳には似合はぬ細い二子縞の袷に細つこい帯を締めて、髪は無造作に束ねたぐる／＼卷、殊に鬢のほつれ毛が蒼

白い瘦せた頰に掛つて居るのが一入憐れつぽく見える「そりやモー私だつて是迄種々考へた事も有りましたが何を云ふにも獨立が出來る丈の藝能が有るでは無し今更此家を去つた處でどうにも身の振り方が付か無いのだから：：私はモー是丈の運命と諦めてどんな愁氣事も辛抱仕て居たなら如何な角造だつていつかは改心する時も有らうから：：：」と云ひ掛けてそつと淚を拭いて「嫌さんお前は今修業中の大切な體で私杯の事にかまつて居られる塲合では無いのだから：：何事も見ぬ先聞かぬ先の事と思つてどうぞ怠たらずに勉强仕て居て下さい、私はモウ夫を何よりの樂と仕し居るから」と袖で顏を掩つて噓唏く、沈と腕を拱いて聽いて居た嫌吉、頤に「姉さんつ」と强く呼んだが脣はわな〳〵と慄へて「姉さんは何故开麽に冷淡な事計り被仰るのです」務めて沈着いては居るが恰で絞り出した如な聲で有つた「僕が恁して遙々姉さんを訪ねに來た目的は何だとお思ひなさる：：どうかして姉さんを今の境遇から救ひ出し度い：：幸福に一生を

伸子張り　大坂　幸阪泰子



送らせ度いと是計なのです、夫をかまはんで勉强仕て居ろとは何たる無情お詞でせう：：畢竟姉さんの頭に繼姉弟と云ふ觀念が有るからして开麽水臭い事を被仰るのだ」はら〳〵と溢れ落つる熱淚を純白のハンケチに拭つて「イヤそれて無けりやあ悅んで相談仕て下さる筈だ：：假令母は異つて居ても吉岡家の血統は姉さんも僕も同じに分けて居るのですよ、だから姉さんどうぞ僕を賴みに思つて下さい」未だ嘗て人の溫さ情を知ぬお島には嫌吉が眞心籠めての詞を如何嬉しく感じたで有ろう、其の嬉しさが込み上げては又淚と成つた、「嫌さん开麽に迄私を思つて下さるの：：本當にう：：嬉しうムい升」「當然です姉弟ですもの」と後は咳に紛らせて「て姉さんは藝が無いから獨立は出來んと被抑るが未だ僅かに半生を越へた計では有りませんか、姉さんの心掛次第で立派に獨立自營の道は有り升、然しそれには東京へ出て三四年位は勉强仕なければ成りません」「そりやお前の云ふ通り東京へ行つて修業仕たなら又獨立する事も出來やうけれど：

今私を誰が修業させて呉れませう……まさか繼母さんに頼めもせずと云つて私に一文の蓄が有るては無し」「イヤ其の事なら僕にちやんと考へが有るのです、て本當に姉さんがそのお積りなら僕は下宿屋住居を止めて姉さんと一緒に自炊仕ませう夫にモー學校も後一年半で卒業仕升から夫迄夜學校の教師にても出れば何も國から補助を受けんでも確かに姉さんが修業成される位には計畫仕て有り升よ、て姉さんに御異存さへ無ければ早速其の運びに取り掛り升が、然し一應は母とも相談仕なければ成りませんから一寸僕國へ行つて來ようかと思ひ升が……」「私若开麽事に成れゝばどんなにマア嬉敷いでせう……だが母さんや敏さん（妹婿）がどうでせうかね」「いや开麽事決して御心配には及びません、必ず僕がお引受仕升」斷乎として云ひ切つた、お島は恰も甦つた如な氣持に成つてさも頼もし氣に沈と健吉の顔を視上げた、その眼の内には希望の光と感謝の意とが籠つて居た。

時しも灰色した雲の一塊が南の方に流ると十三夜の月が瑞々い常綠木の梢を洩て姉弟の姿を清く照した。

戀てなく、愛てなく、一片の俠氣、理性の力で姉を逆境より救はうと云ふ弟の意氣は先づ相當に表現されてある、鳥渡變つた趣向でもあるのでおもしろく讀まれた（選者評）

小說家雜聞

▲内幕を知らない地方の諸君などは、新聞に出る名家の小說は、必ず書き上て終まで出來てあるものだと思ふだらうが實は一日一日後を逐はれて書いて居るものが多い、初めから終まてちやんと出來てある作に餘り傑作はない、一日一日書いてゆくやうなものが却つて評判の傑作となるらしい▲小說の原稿を書く紙でも皆それ／＼好みがある、原稿紙にきちんと書く人と、普通の半紙に書く人と、筆で書く人と、ペンで書く人といろ／＼ある、藤村氏はペンで書く、柳浪氏は半紙に書く、原稿紙は最も多い▲小說家は大抵雅號で通つて居る、二葉亭四迷と云へば分るが長谷川辰次郎では通らない、加藤磯夫では分らないが小栗風葉なら知らぬものはない、近く脚本で賣り出した佐野天聲も本名てはない、實は角田喜三郎と云つて角田浩々氏の弟である▲大塚楠緒子女史、次に岡田八千代女史の作を續けて居る「萬朝報」の閨秀小說は其あとが國木田はる子で次には與謝野晶子が書くだらうとの噂である▲近頃更に最新進作家の中にも女流が現れて來さうだ、今の處未だ優劣は容易に判斷出來ぬ。

和歌

佐々木信綱先生選評

三等

砂川や落日赤うむらすゝき亂るゝ中を人默しゆく　山城國宇治田原拗翠園　並木孝子

四等

美しき夢よりさめて灯の方に枕かへしぬ春の夜の人　信濃　靜潮子

五等

夕雲の薄れ漂ふ紀の海や汐ざゐ遠に白鳥めぐる　磐城國双葉郡久之濱町字東　遠藤いさを子

秀逸

○馬子唄の遠くきえ行く芒はら穂波ゆらゆら雲ちぎれ飛ぶ　栃木縣　喜智子女史

○京の山御寺の山門は白銀のしづくするなり雪どけの朝　大坂　眞田芳子

○夕月夜誰がすさぶらん五年の昔さゝにし笛に似し曲　本郷　朝井千とせ

○宵月夜さゝら波見ゆる川添ひの小家の灯淡く繪に似たる哉　下總　三橋千代子

○銀盤に黄金の珠をのせし如清く咲き出ぬ水仙の花　京都　山口愛華

○秋風は愁の人の胸吹いてちひさき花を咀ひて過ぎぬ　牛込　五味白露子

○故郷の母の情を織りこめし衣とゞきけり秋の夕暮　上毛　磯貝末子

○秋雨の降る夕暮の町はづれ柩を送る一群の人　下野　栗原くに子

○何となく別れがたなの夕かな鐘の響きの身にしみじみと　横濱　大槻すゑ子

○ころころと小石流るゝ谿川に草刈り少女鎌研げる見ゆ　越後　水谷睦子

○故郷へ流るゝ雲を仰ぐわれに泣けよとひゞく夕暮の鐘　豊後　姫島女

○僧一人座禪に耽る南院の眞靈靜かに牡丹崩るゝ　磐城　村岡布貴子

○冬の夜は怨靈あまた枕邊を襲ふが如し木がらしの吹く　佐賀　田中よを

○秋雨は母みまかりし通夜の日をすゝり泣く音に似て降りしきる　大坂　今西こゆき

○小春日や妹のつくりし紫の籠眼白なくなり山茶花のちる　宮城　菊地葉子

○長野縣　加藤秀子
妹が糸ひく庭になれよりてくゝと友呼ぶ白き鶏哉

○函館　宗さつ子
うたゝれの夢路は野こえ河こえて君ます島の浦わさまよふ

○羽後　三浦紅蓮
かりなくや姉のみ膝に枕して故郷に佗びにし秋の夜思ふ

○石川縣　木原遊舟
野社はさ霧にくれて遥かなる並木の上に月すみのぼる

○京都　吉田より子
冬の日のうすき光を惱みなゝと振り仰ぎ見ぬ都落人は

○愛知縣　野田清子
夕日落ち彩雲流るゝみ空より神使の如き鳥一つ飛ぶ

○愛知縣　岩川文子
片年も昨日の夢と打ち過ぎて吹く秋風ぞ身にはしむなり

○三河　今井はつ子
萩ぞ捧げてながむる明月や猶に惜しき山住ひかな

○長野縣　すみれ子
霜枯の萩の中より咲き出でゝ黄金見まがふ菊の花哉

○紀伊　西山ひさゑ
胸のあたり花模様衣あてびとの車とゞむる夕映花野

○兵庫縣　福原しのぶ
野分のみ通ふさみしき山里に今宵の月を君と眺めて

○渡島　白露
夕照や欄干による若き人扇かざしぬ日をばみむとて

○和歌山市　凌子
見渡せば和歌の浦はの夕なぎに西指し歸る雁二つ三つ

○伊豆　上原雪子
ほのかにも見えがくれせし船ひとつひとつ〳〵に波に消えゆく

○札幌　安彦ちよ子
さ夜ふけてなれたる道も迷ふかとしるべがほにもとぶほたるかな

○小石川　北野まさ子
朝ぼらけこぼるゝ萩の白露は夢さゝやきし風のしづくか

○三河　鈴木一子
たよりたえし故郷の母を忍びつゝとほそによれば萩の花ちる

○越後　日下きよの子
有明の月をたどりて雲乞ふや谷間に響くさを鹿の聲

○濱田　三明千鳥子
斬風や鯨潮吹く大海の靜に舟の漕ぎいづるみゆ

○石見　秋草
秋風にきり晴れわたる大空の月かげさむし雁なきわたる

○青森　絹子
秋風のいとゞ身にしむ夕暮れにさてもうたはん白菊の歌

○下野　須藤翠子
銀砂子の空より照す月光に霜輝きぬ犬寒く吠ゆ

○尾張　石黒まん子
かへりみつかへり見られつ人のみちたどりはてやはよしとほくとも

○上毛　新井とみゑ
朝早に小ざるをさげて少女子が行く先きうれし栗の木かげに

○下総　伊藤津代子
翁媼酒賣る野路の掛茶屋に黄菊白菊咲き揃ひたる

○奈良縣　森本あさ子
さわ〳〵と稲の葉ずれの音寒くまばら小村に夕雲ざまる

○仙臺　齋藤尾花
咲きそめぬ宮城の原の女郎花をどる稚兒等に虫の音を止む

○愛知縣　小島幸子
庭内の花壇のすみに植ゑおきし白菊ことしいかに咲くらむ

○埼玉　美智子
露りにをつる涙もありといへば人のまことは何にしらまし

○本郷　古瀧枝
くさむらに給ふて泌らす少女子の白き御頬に紅葉一ひら

○仙臺　鈴木幾子
秋の月さびしき夜半を照しける露の白萩影清らかに

○秋さればもの丶あはれなますかゞみ曇りがちなる夜半の色かな　　静岡縣　加藤せい

○木がらしやかべに殘りし小き指のあとのみ黑う秋たゞ淋し　　愛知縣　竹下季子

○はぎ尾花眞葛が原に來て見れば錦織るかと思ひこそすれ　　横濱　本郷磯子

○砂白う松原黑き荒濱に沖より寄するしろがれの波　　和歌山　池田しげ子

○影見えて月に棹差し舟人は波路に梶を進み行らん　　鍵函村　林靜香女

○ゆくりなき君が便りにふれしより心の駒は狂ひそめけり　　神奈川　りの子

○虫の音の細りて哀れ更けし夜の月を掠めて雁金の泣く　　下總　平山きさ子

○うらぶれて賤となる日のおもひでに賤機ふみぬ山の秋風　　但馬　矢緒子

○秋の月我が故郷に垂乳根は砧打つらんそなうつしてよ　　淺草　山岸直子

○落栗を拾ひつ丶行く樂しさに何時か越たる秋の山道　　上總　紅葉女

○朝毎におく白露の染めなして木々の梢は色そひにけり　　大分町　姫ゆり

○思はじと思へど絶へぬ秋の雨にゐます父母おもひやれとや　　芝　銀波女



○亡き君が瞳とも見ゆ新星の光りにもゆるわがおもひかな　　下總　響子

○秋月夜胸に手あて丶つく〴〵と心靜かに思ひ見よ君　　神戸　輝山たに

○夕風に槲の落葉さとまひてこほろぎしきり苔のおくつき　　武藏　殘香

朝　八王子　乙婿もん子

○妻琴の止みし嵯峨野の萩の戸や蹄のあたり虫の聲聞く　　京都　宮原みどり

○冬薔薇の花の灯影に醉ひて頰をうす紅す衞師がふる戀　　三重縣　岡本しげ

○ほの月夜機かたるおばしまに水汲む少女美き姿して　　大阪　鷲谷ゆり子

○うつし繪を眺めて又も思ひ出す秋と頷みし君はいまさず　　宮城縣　千葉よし子

○木枯に庭のもみぢ葉散り亂れ池のおもてに漂ひにけり　　仙臺　伊皿子

○なつかしき君が音信なく雁の消えゆく跡ぞ戀しかりける　　近江　太田靜花

○君戀ふる情に今宵を明さばや月さえにける萩のしたかげ　　奈良縣　下隨白萩

○おく露もえたへぬまでのやさしさを伏猪の床とたがくちならしけむ　　備前　郷内香園

○うらぶれてやせし我身に秋の風あまりに寒し野べの夕暮　　岡山　櫃原美喜子

○　豐北　四山松子

望月のかげに心のあくがれて千里の外も偲ぶ夜半かな
○　麻布　ひさし

虫の音も夜毎々々にほそり來て庭の淺茅生うらがれにけり
○　大阪　露子

稲の葉を渡る夕風身にしみてそゞろ歎むる初秋の空
○　羽前　湯村靜枝

はかなごと思ひつゞけてれがへればかけひの水の音のさびしき
○　北見　氏橋鵜江女

打病みて暇の火淋しき旅の戸や夜寒うして雨そぼふりぬ
○　下谷　權花子

今朝見れば露の跡もなかり晃友はいづこの旅か濟ぐらん
○　深津　田口數寄

水くむと井戸を覗けば我が影の清く見ゆなり百尺の底
○　なゝし草

菊の花一輪に秋雨は神宣らすよとさゝやくが如
○　山城　神林操子

片われの月かたむきぬ霧こむる夜泊の船の寒さながらに
○　北見　堀川さい子

雁なくや無人の境皆れ一人行く思ひして秋の夜ふけぬ
○　安房　ゆき子

吹く風に先きを爭ふ木々の葉の音聞くだにも秋はかなしき
○　神戸　親山いし

うちよするなみもしづかに松風もきよき音ぞする舞子うつくし
○　芝　江上みよ子

窓おして故郷のかたを眺れば天にかゞやく秋の夜の月
○　陸奥　中川爽風子

岩うちてくだくる波のさまなれやちゞに亂れてさける白菊
○　神戸　加藤不笑子

假名文字に君の御名かきはゝ笑てそと刎けぬ虫鳴く夜を
○　京都　淺野つれ子

黄昏て寂しさ優る鐘の音のさはるやうなり桐の一二葉
○　紀伊　北西さわ子

薄紺の霧立ちこめてさゝがにの糸に珠貫く露白うして
○　熊本　あざみ

おほ空にきらめく星の高きにもまさりてかけむ人の望を
○　千葉縣　柳月女史

わがせこは一人小窓によりそひて酒くみかはすさみだれぞふる
○　鳥取縣　伊藤政子

おぼろ夜に君を思ひて只一人たゞずむ空にかりがねの聲
○　高知縣　山川信子

雲起す青葉の森は夕榮えて白堊きらめく長谷の寺かな
○　本所　磯野禮子

萩茂る小川の清き流面に芒は長う月の宿りぬ
○　大阪　眞田芳子

京の山智恩の沙彌の墨染の袖にちるなり落椿花
○　土浦町　豐月子

かなづれば冷き琴の絃きれぬ如何に今宵を都の君は
○　下毛　小林鐵月

もしほやくけむりもきへてつきかげのくまなく澄る須磨の浦濱
○　門司　霞子

山を戀ひ野をこひかくて母をこひれられてありぬ秋雨する宵は
○　下野　菊池あさ子

岩清水清き心も流れては同じこの世の水となるらん
○　大阪　公文四葉

世の中も空吹く風のまゝならば心にかゝる憂き雲もなし
○　靜岡縣　岩堀卓子

思はじとおもひし人を思ふかな秋雨そゝぐ夕ぐれのまど
○　淺草　大谷哈々子

さゝがにの糸にぬはれし白萩の露の玉の朝風にちりけり
○　土浦町　紹葉靜子

ふる琴に愁を訴ふ戀さめてあはれ聞きけり芭蕉葉の雨

○　徳島縣　松島智佐子

咲まじる花のあだ名も立ぬべし何みだるらん垣のかるかや

○　高岡市　梶川露子

小霧して萬丈落つる大瀧の上に月ありいとほの白く

○　大和　花嵩濤

あらゝぎの上のおばしま踏り見ぬ紅葉色こき京の四方山

○　羽後　佐藤なつ子

ふみつきや柳に船をとゞむれば吹く風涼しき最上川岸

○　遠江　平野すみれ

雁の群れ飛び行く力を眺むれば故郷の母ぞ思ひ出さるゝ

○　栃木　いつよ子

おしと思ふかひなく秋の風吹きて匂ひ散るらむ萩の下露

○　本郷　朝井松子

みたらしに銀杏の朽葉こぼれ落ちて山鳩高くほろゝと啼きぬ

○　筑前　古賀みどり

今しばし秋の初風心せよ草木を友のみやまずまひに

○　磐城　佐藤榮子

夕ぐれは淋しかりけるひとり旅身に添ふかげも先へ歩みて

○　栃木縣　芳子

今宵我れ初菊薫るうす月に幼なき夢をよびてほゝ笑む

○　愛知縣　翠山女史

賤が家の背戸の畑に蕎咲きて朝風寒し鶏の聲

○　備前　近藤文子

世を逃れ高野の山に寐せ共思はず知らず劔を磨く

○　秋田縣　大野こう子

尼寺の垣根をつゝむ秋海棠二ひら三ひら心なうちる

○　大阪　雲文子

小苗より育てし菊を朝な夕な籬かぞへつ盛りまつかな

○　備後　二子山

劔とりて人にかくれし舞の夜の夜やひやゝかにつゆのこぼるゝ

○　長崎　平山きよ

みたらしのあふるゝ水に影ゆれて岩根に咲ける白萩の花

○　福岡縣　小[illegible]

波よするきしの老松色深くれざしたがへな千歳ふるまで

○　豐橋　伊藤りき子

一もとの枯野の末の桃の木に怪鳥むれゐる霜の朝かな

○　陸前　佐々木美津子

置き逝きし姉が手植の秋海棠に涙催し黄昏の雨

○　沼津　山寺びと

ふた葉より心づくしを菊の花色にもみせてかをりこそすれ

○　牛込　武井芳[illegible]

うらぶれて人なつかしき欄に思ひは彼方彩雲のそら

○　磐城　鹽田露枝子

君と我がすむべき里にふるはしや紅萩白萩まどとざす家

○　神戸市　井嶋なほ子

人は皆いとたのしげに語りつゝ秋の日暮の野を踏り來る

○　大阪　武田芳子

あこがれし友へ返しの文の上に櫻花ちる春の窓哉

○　下野　牛塚好月

糸萩に白露ふくむ朝にしてまぼろしに見る桑つみの人

○　紀伊　室谷忠子

朝露にそぼちつ行けば右左白くも亂る稻の花かな

○　紀伊　英笑子

さら〳〵と水は清に流れけり岸邊に咲ける梅を映して

○　小草子

蓮葉の上吹く風に月すみてまたるゝ秋もわすれけるかな

○　兵庫　暉子

夏の夜や我戀ならず歌ならず思ひに惑ふ三ヶ月の影

○　岡山　芙蓉子

この秋はともにと云ひし月は出ぬちぎりし友はいかにしつらむ

○　茨城縣　まさご

いつしかも夏はきにけむきのふ今日霞まずなりぬ山の端の月

○　駿河　みどり

しだれさく萩もゆかしえぞ菊のまがきをもれて誰か待つらん
○　越後　白菊子

うたゝねの夢におふ影あはくして枕にさびし秋風のおと
○　熊本縣　池邊靜子

朝月夜露ふみしだき薔薇の園に笑みて佇む人美しき
○　神戸　ある人

わがごとくなくもかなしき寺山のしでのたをさの夕ぐれのこゑ
○　大阪　鎌田春枝

郷に來て窓により添ひ眺むれば田ごとの秋の淋しく暮るゝ
○　薩摩　木場君子

望の夜紘に銛とり諸ふなり鯨とるてふ海の若猛者
○　遠江　深松絹子

わが愛惜小翠にこめて激さやらむ雛鶏と親鶏よとく／＼寄り來
○　西多摩　森田なか子

思はじと思ふ心のあだなれや獨りつく／＼紅葉散る夜半
○　大阪　岩西ます子

海づらにうつる夕日の影消えて磯うつ波の音あらくなる
○　下野　茨黎子

綾瀬川夕暮の空肌寒うあはれを流す入相の鐘
○　廣島縣　松島智佐子

糸萩に結べる露の散る見えて哀をそふる野べのあさ風
○　飛彈　ゆき子

手をひたし水にうつらふ櫻桃ひつめたはかなの運命思ふ子
○　茨城縣　中山道江

片時も思ひ忘るゝひまぞなき戀しき君の今は如何にと
○　千葉縣　鈴木とし子

入月や雲の峯やく天頂の様して燃ゆる夜の遊野火よ
○　奈良縣　麻子

秋雨や暮れゆく庵の荒庭に虫の音絶えて語る人なき
○　羽後　佐藤夏子

そと見ればゆかしく匂ふ百合の花こき紅染めて君に送らん
○　廣島縣　佐伯楯月

鐘樓にくれゆく秋の惜まれて墨染衣に紅葉散りくる
○　臺北　咲よし子

秋風の身にしむ計りかなしきは病の床のねざめなりけり
○　横濱　坂本幸枝

暮れて行く秋の名殘りは惜まれど過ぎし月日のうらめしきかな
○　上總　くれなゐ女

日は落ちてもみぢの映るくれなゐの夕やけ空のちぎれ／＼に
○　青森　村林矢須子

月のみかもゝちの夢の悲しけれ露と消えにし人を思へば
○　本郷　保延七草子

友もありたらちねゐます古里の夢に夜毎のまぼろしにたつ
○　近江　兒島須賀枝

我友を送りて歸る道すがら悲しくも鳴く叢の虫
○　名古屋　水谷ひさ

ふるさとの空なつかしき此頃や忍ぶ涙にくもる月影
○　但馬　高橋伊勢子

こと問はん雲井を馳けて來る雁におのが越路の月のあはれを
○　茨城縣　黒田常子

給にせんは卑しさはれのたゆたひや君ます島に夕日は落ちぬ
○　千葉縣　深山千鳥子

山高みをぐらくしげる木のまよりたえ／＼みゆるたきのしらいと
○　遠江　鈴木三榮子

乳母車ちひさき主を乘せてゆく秋野は一里千草八千草
○　常陸　春世

月きよき山ぞひ小村奥ぞある思はぬ方に犬のこゑする
○　長野縣　町田さみ子

しづがやのまがきの下に暫立てゝ心細くも鈴虫のなく
○　京都　しがらみ

はたとせを名にあくがれつ都に泣きつ今古さとに秋の風聞く

○本所 波光女
來む冬をまつ人もなき秋の日になにいそぎてか時雨ふるらん

○門司 松永なか子
星落つる芭蕉の葉末霜重ふ落葉の桐に三日の月影

○赤坂 高木とめ子
君見ずば我れは死なましきみゆへに生き長らふる事のくるしさ

○諏訪 加藤芳枝
常にみし青葉しげれるうら山もはや紅葉ばとなりてさびしき

○石川縣 黒田藤枝
ふと入るは籬ごしなる箏の音今更思ふなつかしの人

○伊勢 西村元子
病む稚子を寢椅子に移す夕窓や秋 海棠の雨におもたき

○加賀 山本君子
大君の惠みあまねくたち渡り 賤が伏屋に菊の花咲く

○平戸 曉露子
今朝逝きし母の姿の偲ばれてたよるものなき月かげの露

○下谷 やす子
貴人が小琴かなづるおばしまにまつが枝ながらやどる月かな

○伊豆 時子
高う低うあまが鄙歌絶え／＼に淋しく暮るゝ秋のあら磯

○岩代 殿谷子
かりがねを今宵や聞くと佇めば氷流るゝ音のみにして

○上總 齋藤秀子
雲かとや思へば煙たなびきて富士の裾野も見えずなりけり

○山形縣 笑花賤女
誰故と問へど答へず少女子の泣きつゝ歸る黄昏の道



稻扱　岐阜 平田香苗

○靜岡縣 しらぎく
おもしろき音譜に夜はふけて月すむ庭に初霜ぞ見る

○本郷 本橋好子
避難塲の破寺てらす月の冴え川添ひ十むら水に沈みゆく

○巣鴨 關根律子
朝もやに包まれあらばなかばみゆ島をめぐりて鷗飛び交ふも

○德島縣 野菫子
さまよへばおどろきたつか白蝶の羽にこぼれ落つ萩の葉の露

○茨城縣 仲田ゆり子
たはやめがうつしうゑたるには の梅ほころびそめてにほひかんばし

○牛込 石田幸
冬のたつしるしなるかやさだめなく落葉まじりにしぐれふるなり

○札幌 若山すみれ
しよくこうの錦とまごふ圓山の紅葉戀しきこよひなる哉

○本所 露翠女史
吹雪く日に深山の奥のほこらにて添乳しつる兎可愛ゆき

○下總 山崎よし
去年までも共に酌みにし杯に月は宿りぬ友はなくして

○奈良 花の妹
花賣の少女の歌の聞え來と草にかくれて笛吹く人よ

○仙臺 三好まさる
さが野なる小督が許に秋草を踏分て來ぬ夢を見しかな

○小石川 山崎房子
蜜柑つむ少女のほゝに夕陽さしていま暮れんとす海ぞひの村

○東京 とき子
月の夜や去年の秋のしのばれて袂にぬるゝ萩の白露

兒島香蘭

○今朝見ゆる千草における白露は夕わたりし雁の涙か　宇都宮　木島蕗子

○花園に秋の七草吹き染めて君が手植の桔梗美くし　筑前　北澤ちせ子

○池殿に映る月姫中にしてたは〳〵廻る白蘭の花　遠江　新井せき子

○朝秋の野にも山にも置きあまる草葉の露をふむは誰が子ぞ　讃岐　香川政子

○呉竹の世になき友のしのばれて染にし筆の今ぞこひしき　姫路　敏子

○蟲きくと頰杖つきて筆おきて秋の夜長を默佗ぶる人　常陸　宮川磐子

○いつしかも花のさかりは過ぎ行きて虫の音淋し秋の夕ぐれ　紀伊　岩田純子

○妾住む見るかげもなき破れ家にも秋は來にけり虫の聲きく　岡山縣　中村とみ子

○いつにても面のかはらぬ友やこれ常磐の色の樂しくあるかな　水戸　海栄子

○逝きましゝ君がかた身の玉章をそと取出す秋月夜かな　對馬　啞女

○月見んとかざすたもとにふりいでゝなく音ゆかしき鈴むしの聲　靜岡縣　加藤だい

○鶯のひなたまゐろと御室より文使きたりはるの日の雨　久留米　奥村敏代

○すみわたる月をかすめて雁が音のあし茂りたる川におり行く　筑前　落葉女

○鈴虫はなけり宮居の月姫がふるう白銀のみ鈴のやう　かへて子

○てる月は昔ながらにすみぬれど面かげもなしむさし野の原　若狭　塚本ふさ子

○詩にやせてそゞろ歩きの貧僧が法衣の袖に梅の花散る　下總　篠原うめ子

○夕月夜さすや岡べの草むらにふりすてがたき虫の聲する　德島　花びし

○美し子が行く末思ふ窓の下白菊さきて日はなゝめなり　京都　小島てつ子

○白き帆の水に映えたる夕日影うすれて消えし川添の村　下野　佐藤翠薫

○すみ渡る山下水に紅葉はの散る風淋し秋の夕暮　紀伊　西よれ子

○たそがれや沈む夕日は雲の間に紅葉の山に影を宿して　栃木縣　千葉夏子

○雲いでゝ月はかくれぬかりがれの聲迷ふらん武藏野の原　福島縣　武川たけ子

○悶えの子悶え〳〵て血を吐きぬ神はしづかに終焉を告ぐる　伊豆　上原清子

○眠られぬ雨寒き夜にふと消えし君の御姿のいとゞ戀しき　赤阪　後藤よし子

○只一たび京にのぼりしものがたり今もかたるよ沖のしまもり　大和　花菖蒲

○山陰の友に紅葉を送らばや君があたりの色はいかにと　和泉　天絅はな

○村長のいとし娘の嫁入の乘物續くはる風のみち　遠江　平野すみれ

○月も見ず母なつかしく訪れて昔かたるや九月拾五夜　大分　志平ふて子

○時はかる針のめぐりも今日のみはおそしと思ふ母まつ身には　丹波　齋藤笑子

○君逝きしあとに小島のなきにける秋の夕暮れそゞろさびしき　土佐　岡村春栄

○巡禮の背笈二つ山越しに百合花さけるさまして越しぬ

下　草

○

月かげもやゝ更けにける秋の夜にまつばら遠く鹿ぞ鳴くなる　相模　今井白屈子

○

笛ふけば譜はやわらかふ蹄へり來て秋呼ぶらしきそが氣はひかな　大阪　辻　廣子

○

湯あがりを鏡に笑める人若し紅梅かをる春のゆふぐれ　小田原　周　子

○

襟ふかき巷をさけて靜なる今宵の月を一人見るかな　沼津　渡邊とよを

○

鶯の初音に君を偲びつゝ櫻わけ入るみよし野の山　濱名郡　岸　つぎ子

○

やれ御堂そこに守りゐる人はあらてかたへの銀杏かげのさびしき　和歌山　池田しげ子

○

夕顔の神秘の夜守る執着ににたりし我が身君おもふかな　八王子　板野もみぢ

○

昨日今日花なき京の寒かりき鐘に暮れゆく我里思ふ　千葉縣　新井春枝子

○

立並ぶ梢はぐれてこゝかしこ夕日を殘す峯のもみぢば　波島　森野紫袖

○

胸しぼる血潮はきけるおん君をいだきて泣けばたそがれの鐘　麴町　若杉とり子

○

松がなかにみどりの露をうけんとや一りん咲ける紅ゆりの花　北多摩　無　名　子

○

ふりかへり又ふりかへりながむれば昔忍ばる君がみ姿　姫路　操　子

○

百舌の鳴く足柄四里の峠道百千草木の早や紅に　沼津　飛奈久枝

○

鳴くせみの聲しづまりし松かげにまちわびにける夏の夜の月　神戸　國多すい子

○

秋の野に千草八千草ふみわけて辿る夕ぞたのもしきかな　羽後　さき子

○

秋風にみだれしかみをかきなでつ野邊を行けば鈴虫のなく　小　草　子

○

琴きけば百合の花咲くあづまやにまたれし去年の日の浮びきぬ　尾張　すみれ女

○

たらちねを戀しく思ふをりをりはひたすらはげめおのがつとめを　上野　小幕たつ子

○

何となく隣れる家の機を織る音を淋しと聞きぬ今宵は　群馬縣　五十貝すゑ

○

家每に屋根ふきかへて垣結ひて冬がまへしぬ山かげの村　千葉縣　石井まつ子

○

戀も知らて樂しや秋の里住居乳母が自慢のきび餅うまさ

越後　尾島壓子

○

逆鉾の霧島山の朝詣て大古をつゞく杉木立かな　若松　芳　舟　女

○

花すゝき手折らんとしてふみ入れば袖にこぼるゝ白玉の露　若狹　長谷川英尾

○

父も逝き母もねむりてみなしごの我は花うる身となりにけり　下野　野中とみ子

○

夕風に萩の白露はらはらとこぼるゝ影に鈴虫のなく　福島縣　三浦　操

○

あさぼらけ大河波のきり晴れて旭に映る山の紅葉ば　土佐　門田菊意

○

さからはてみさをや立つる姫百合の花のすがたは風のまにまに　若狹　森田汐汀

○

古り行かば是も悲しき思出の淸き形見や詩の一卷　橫濱　安藤廣子

○

七草を野べにたづねて日はくれぬ紅葉かざして月にかへなん　芝　鈴木しゆん

○

なき人の賞でし小菊の一枝を髪にかざして君しのぶかな　京都　波多野かつら

○

山の腹芒茂れる細道を入相近く旅僧の行く

○　南豊　瑠璃子
ほの白き尾花の彼方日は落ちて馬子のひな歌いとかすかなり

○　大阪府　中道萩子
雫の音はしばしとだえて蚊やり火の烟たちのぼる夕がほの宿

○　岩代　菅野美佐子
岩角に大鷲それてかゞなきて茫なる平原物聲もなし

○　三河　大久保美代志
砧打つ音の響の間こへてや荒波遠くかりがねの來る

○　飛彈　船坂通子
淺茅原草刈をへてかへる馬子の小唄すゞしき秋の夕暮

○　宮城縣　佐藤しげよ
風の音も悲しさまさる旅の空窓に物思ふ人もありけり

○　磐城　鈴木玉子
靜かなり旅路人はたちはてゝ鷄あそぶ野はづれの宿

○　周防　谷美津子
ふきかへて今朝は涼しき秋風もやがて身をふく初めなるらん

○　本所　森下白蘭女
稻荷山朱欄繞めたる古鳥居蔦紅葉してまた色かへる

○　佐賀　あやめ
花色にそめし衣をぬぎかふる白き單衣も珍らしきかな

○　薩摩　貴島百合子
いたつきの床をはなれて髪けづる君がおもはに夕日淋しき

○　新潟縣　藤村三枝
ひろき野は千草の花やきそふらんいろなわすれぞ日本撫子

○　大阪　平瀬孝女
蛙なく窓かしましゝ山ぶきのくちなしいろぞゆかしなつかし

○　上總　渡邊汀子
女郎花故園のまゝの野の小家留の君に似し人住ひける

○　下野　桃源百子
紅毛葦毛白駒なめて狩衣の若人行くや萩の花野を

○　福岡縣　青霙女
宵の君や願ふ理想の君なればいかに嬉しき事ならざらん

○　熊本縣　花里とり子
紅芙蓉朝露重き一ひらはよき歌ありやとこぼれて翔に

○　姫路　柳田白百合
うき秋を脊子に別れてさびしらの身にたへぬ夜をさほしかのなく

○　丹後　鹽見千代子
夕霧に浮かびて眠る衆の山々照らす十六夜の月

○　栃木縣　小林さい子
はれわたる夜はおしなべて月影の至らぬさともあらじとぞ思ふ

○　大阪府　得能みえの
うすくこくいろさま〳〵にさきいでゝにしきおりしく秋の野べ哉

○　水戸　松島由和子
梢吹く風だに秋はさびしきを枕に近きさを鹿の聲

○　深瀬ます子
なよびかに棹さしめぐる船もあり燃ゆるばかりの紅葉の池を

○　上總　松ヶ枝女
我宿のまがきに咲ける朝顔のなごり惜しげに花二ッ三ッ

○　鹿兒島　小牧岩江
亡き母のみ墓の前に暫立てゝなき入る姉をいかにさとさん

○　神戸　船戸美津穗
山茶花や縁にさす日の照り盛り猫の雛ひく戯むれに居ぬ

○　本所　松本晴子
高塔や古りし欄夕日さして若き白鳩さゝやきて居ぬ

○　千葉縣　宇貝子
ふるさとの松の林ぞなつかしきふるこの雨に茸や生ふらん

○　筑前　鶴子
妻を慕ふしかの音かすかに夜は更けて紅葉散り行き月はこぼれぬ

○　下野　瀧口しん子
寂しきは小金の稻穗吹く風に水田のあたり鴫の鳴く夜中

○　下總　小倉すみ女
病む夫の枕邊近かくぬかよせてもの思ふかな秋の夜更けぬ

○　徳島縣　西野国子
三年ぶり後姿の友を見て呼んとすれば夢さめにけり

○　千葉縣　秋山花馨子
物皆にさびしき秋のかげ見えて袖にも露の宿る頃かな

○　河内　倉稠子
秋風にたなびく柳の淺みどりぬれて色ます今朝の雨かな

○　石狩　愛花操子
とくおきてれやの小窓を明け見れば今朝さき初めし朝顔の花

○　千葉縣　内藤秀子
なき母の膝のあたりに抱かれて嬰なてられし夢を見し哉

小峇　日京都　濱部愛子

○　石見　松浦信子
夜もすがら思ひに沈む折栖にあはれに聞ゆ鈴虫の聲

○　富山　小林芳枝子
こや夢かはたまぼろしか夜か畫か我か人かの遠つ世に似て

○　呉市　澤田きし子
朝まだきよもの景色を眺むれば只なつかしき故郷の空

○　神奈川　美園一枝子
秋七草あとなく枯れし花庭の名殘とゞむる白菊の花

○　下野　菊池わさ子
明けぬると園の戸叩く愛兒かな今朝も拾ひきし殴山の栗

○　米澤　夏月
たらちれの眠りまします墳墓の邊はよけよ秋のはつ風

○　愛知縣　野田清子
七彩の雲につゝまれ詩の神の降りますかと仰ぎて見しか

○　岡山縣　廣江壽子
城山のありし昔を偲べとやさやかに照らす弓はりの月



○　美澤子
書なうつす燈火くらき山の庵竹椽さむう露ぞみだるゝ

○　鹿兒島　谷村とく子
美しき夕日の光り背に浴びて畑を打ちつゝ歌思ふかな

○　京都　西田花蓋
夕つぐ日入坂の塔の影ひいて眞葛ヶ原に日は落ちんとす

○　牛込　五味花子
蟲啣つ淺茅ヶ原の暗や夢にやう似し人ふたり行く

○　肥前　濱千鳥
物思ふ我心まて淋しけれ嵯峨野の奥の秋の夕暮

○　秋田縣　二葉子
ゆふ月夜きしの枯葦かげしろうゆらぐと見れば恋の白鷺

○　福島縣　三浦たか子
母君の蚊を追ひながら都路の話にふけぬ歸省の夕べ

○　下總　兼坂末子
磯山の松のこかげに駒とめてしばし茸狩る少女子なれば

○　山城　箕浦梅子
嵯峨の野に月さえ渡る秋の夜はありし昔の忍ばるゝかな

○　千葉縣　加藤しげ子
梅植ゑて家居しすれば烏羽玉のやみにも人の香にぞ寄りける

○　大和　武村よし子
憎みつゝ猶その人をわすられぬ我がこの心悲しと泣きぬ

○　千葉縣　高濱はる子
野あかく冬ちかき日の照りわたる上に淺間は山鳴りするも

○　羽前　松葉女
小夜更けてかゞり火消えて淋しきに行衛の知らむ黒き人影

○　石川縣　かしく
温泉の宿の思出多き夕月夜月にぞかたる深き思ひを

○　武藏　小川さだ子
魚釣りて里川堤かへり行く翁を送る秋の夕月

○　備中　篠原しげ子
靈前に向ひて鐘をそとうてば供へし榕淋しげに落つ

○　日本橋　三森ゆき子
雨の日を母が御墓に女子一人菊を手向けて小傘かざしぬ

○　信濃　世良田ゆう子
友どちのそしりに耐えて夕暮れを涙に笑みて讃美歌ひぬ

○　小樽　野菊子
此雨に紅葉そめなん此風にそゞろ戀しむ栗はぬる郷

○　上毛　青木守子
まばらなる雲より落つる村雨のかくして今日も暮むとすらむ

○　牛込　石田幸
をしなべて野は冬枯になりにけり嘶く駒の見え分るまで

○　盛岡　白桃
秋姫が綾のみけしを旅ながら召して舞ひます峠紅野

○　秩父　近藤登久子
霧おきぬ白萩散りぬ新墓をとむらふ人の袖しぼるまで

○　栃木縣　磯みい子
風あらぶ枯野淋しく日は落ちて尾花にかなる白菊の花

○　北海道　川村孝子
朝起きて西をはるかにながむれば増毛の山にふれる初雪

○　神奈川　青木米子
わが降雲が降と偶然あひてむすびてとけぬ靜かなる日や

○　栃木縣　紅葉子
あゝせめて翅の生えて此朝げかけても行かむ母住むみ空に

○　下總　百合子
山里は鹿啼く聲に夜は更けて莚戸寒し枯葉散る音

○　尾張　菅沼秋香子
秋雨のしづくに笠の緒をぬらし立つ子よ若き煩悩にして

○　鹿兒島　犬飼たき子
さながらに銀河やうつる此闇に浪華の街の燈のかげ

○　磐城　天野紫水
雀すら御世の恵みを忘れずに朝夕千代と歌ひことほぐ

○　神戸　山本いさ子
蟬と砧うつ音は入り亂れ母を想ひぬ丘の一つ家

○　天鹽　菅井女
思ひ出て仰げば曇る故郷の空なつかしく袖ぞ露けき

○　信濃　母袋小菊
見わたせば峯も麓もうるはしき雲をも染むるくれなゐの色

○　愛知縣　十村女
菊咲きぬ古き繪に見る天平の奈良の少女が白き頰に似て

○　丹波　紅花女
秋の日のくれ行く庭におりたちてはえ無き歌を花にさゝやく

○　山田市　常磐木花子
小雨降る社頭の燈火しめやかに秋のかげしてものゝさびしき

○　天鹽　小林清乃
島山の松に夕日の影落ちて磯にくるゝ浪の色かな

○　越後　校並しげる
手向けまつる法の燈光ゆり搖れて百日今宵を父に泣くかな

○　高知　高島田富子
秋の夜や淋しき空に月出てゝやさしく歌ふ鈴虫の聲

○　羽前　杉葉女
月澄みて木の影寫る沼の岸に羽ばたき爽し山鴨の連れ

○　山口縣　酒向敏子
遠ち方に雁のなく音のきこゆなりたが玉章のつかひなるらん

○　高知縣　鋭野月子
閣窓の灯影はゆらぐ高館に數年祝ふ百人の響

○　越後　村山君恵
山をちこち淡紫に瑠璃色にもやして明けぬ京の花野や

○　伊豆　尾崎そひや

たる枝に咲きものこらぬ白萩の奥床しきや箏の音きこゆ

○　千葉縣　入木美佐保

萩の生みし水晶の玉に筆染めて故郷に送る秋の夕暮

○　岡山　楠原露子

黒はじと幾度われとちかひけりかくても秋は思ひ亂るゝ

○　石川縣　崎藤みどり

打ち寄する波もなごみぬ珠洲の海佐渡の島山今くるゝらし

○　芝　巨子

寒空に小窓開きて眺むればはるか彼方に鹿の聲きく

○　神戸　秋葉姫英子

山のはた仄かに見ゆる賤が家少女衣縫ふ燈火の影

○　常陸　青水柳子

窓あけて里流れ行く里見れば風なきに散る白萩の花

○　北豐島　戸田さいこ

飛ぶ雁のゆくへ眺めてやなぎ蔭たゝずみをればひと葉ちりきぬ

○　豐後　加納とよ子

太古めく野の孤家に白髮の翁柴たく初冬の朝

○　大和　我澤秀水

五歳の昔の夏よ彼の君と須磨に遊びし日を思ふかな

○　大阪　のぶ子

桐の葉に縦琴の如時雨して其白銀に秋の譜をきく

○　周防　熊野縫子

日は落ちぬ彩羽かへして白蝶の身をさゝへけり紫陽花の葉に

○　備前　荻山萩女

久方のあまつ御國は知られども月みる毎にしたはるゝかな

○　池田町　寺部君子

やみませる母のみとりに夜は更けぬ外には秋の雨や降るらし

○　美濃　白井安子

世にうとき汝振り捨てゝ遠く行く吾れをけものと思ひな妹よ

○　上野　羽衣

こゝかしこ松虫の聲いとたかしわが故郷のたそがれの山

○　讃岐　小邦藤枝子

小鹿なく片山里の夕まぐれ時雨そぼふりふくろふの鳴く

○　北見氏　橋鶴子

唯ひとり亡き母戀て泣く夕べ秋雨寒き山寺の鐘

○　日向　卯の花

來て見れは蓬が原となりぬれど昔かはらぬ今日の月かな

○　奈良縣　喜多尾白衣

住む人もなくてあれにし山寺ににほひこぼるゝ白菊の花

○　伊勢　佐々木らく子

さりげなく軒端の菊をたゝへつゝたづれ入りたり君ゐます家

○　丹波　秋子

うつくしき清水したゝるいはかげに一本匂ふ白百合の花

○　小川たつ子

家路をも忘るゝ斗り夏の夜は流れ涼しき旗尾の川風

○　伊勢　越村ふみ枝

ちはやぶる神の社の松かげに聲ふり立てゝ鈴虫の鳴く

○　福岡　秋月

澄み渡る月影清し秋の夜や如何にすごさん此の景色をば

○　三重縣　服部小枝子

御送りに來し山寺の銀杏かれ御室の棟に鳥啼くなり

○　京橋　田村波津子

降る雨に庭の千草も色あせて虫の音弱る夕べ淋しき

○　栃木縣　加藤淡泉子

はかなげに母逝きますと綴りたるいはけなき日記見るにえたへぬ

○　下總　水仙花

人知らぬ道の小草を取り捨てゝひとり嬉しく世を過さばや

○　越中　秋山つた子

われさきと朝起き競ふ子供等の栗の實拾ふ様のをかしさ

○　豐後　田原秀子

よるべなき人宿もなし小山田にかがし三つ四つ秋ぞ淋しき

○ 長崎　子錦

初霜に圃生の黄菊首垂れて朝日の恵み待つらしきかな

○ 大阪　田島加代子

山むらを雲につゝまれかへる夕ひとりは惜しき笠置野の月

○ 豊後　濱　子

小枕に夢はた寒き小夜時雨絃なき琴に鼠走るよ

○ 飛驒　秀　子

君がこと思ふにはよき音が居間よ君在す空に月は浮びて

○ 能登　勝田せい子

秋雨の降る日淋しき墓のかれ母に送りし今日の玉章

○ 下總　市原春子

秋のくれ桐の一葉のちりそめてあはれ身にしむ入相のかれ

○ 高知縣　山の女

稚子ふたりかはゆき様にさし向ひ硯を洗ふ春の夜の川

○ 成東町　靜江女史

大赤城北上つ毛の中空に聳やぐ肩を秋の風吹く

○ 京都　原與志惠

鐘の音のそらにひゞきておつるなり月すみ渡る志賀の大はだ

○ 備中　林ふみ子

たらちれの母のみ腕にいだかれて笑しと見し今の夢かな

○ 新潟縣　水谷鈴子

綿と菫摘みにし野は枯れて草葉の奥に虫細うなく

○ 羽前　今　文子

我が庭の池の水にも二た葉三葉紅葉浮びて秋暮れにけり

○ 大坂　島雄朝子

山めぐる時雨のあめにそめにけむ峰の紅葉ばからくれなゐに

○ 北多摩　原なを子

わけ入らば仙郷あらむ白はぎの亂れ伏したる山麓道

○ 神戸　ひさ子

友垣の淋しき草屋訪ぬれば垣根に萩のほろ／＼と散る

○ 愛知縣　内山節奏子

木枯に散る紅葉葉を背に受けて鶺七羽餌をあさるなり

○ 京都　田島かをる

駒とめてまたふりかへる故里の峠樹陰や野菊一本

○ 神戸　高橋紫峰子

王者ぶり誰が館ぞ灯あかき今宵樓に宵月の影

○ 秋田縣　佐々木園子

碑は露に埋れて母上のおくつき所虫の音繁き

○ 神戸　高橋紫峰

曉の月影やどす若葉森青葉の奥の御寺の朝明け

○ 深川　村山みどり

朝水に夢の名殘かまざ／＼と君幻の御顏かな

○ 越後　松山けん子

いつしかに稻場はなれぬなんとなく心苦しきうつむきにして

○ 前橋　二葉

月こよひ思はおなじ空にありふるさと彼方うき雲のゆく

○ 日向　とら子

やれ垣のつくろふ術もなかりしを夕顏の花咲き初めにけり

○ 越後　河島少女

行く秋の冷き鏡拭ひ見れば痩せし姿に思ひ出多き

○ 秋田縣　佐々木貞子

父母の許せし人を夢に戀ひ現に戀ひてあふせまつかな

○ 西宮町　森井せい子

ゆくりなくふみ讀む窓に散りこみし紅葉なつかし故郷おもふ

○ 紀伊　池田しげ子

古りし木の洞に猿のうま酒を造る頃ほひ栗えみ出てぬ

○ 茨城縣　高　興子

かざゝんと籬がもとに立寄れど手折るは惜しき白菊の花

○ 岡山縣　登　鶴子

きりこめておぼろに見ゆる野山道草刈る童の牛追の歌

○ 上總　加藤靜子

むなき人も哀れと思ふらん身にしみわたる秋の山風

〇　静岡縣　しげ子
七草の花さかりも早や過ぎてわらひそめにし庭の白ぎく
〇　美作　昌子
稲葉渡る風風りんを訪れてみ寺さびしや初秋のくれ
〇　岐阜縣　大野清枝
八束穂の稲はたわゝに黄ばみぬ畔行く五作足遲くして
〇　横手　よし子
虫の音もいよよしづかになりはてゝ殘る音さえ淋しかりけり
〇　常陸　細金うしほ
聖堂の鐘の音低う消ゆる野の野菊にくしき詩の光あり
〇　静岡縣　清子
薄暗き燈火のもとにたゞひとり縫ふは都の母の身の上
〇　尾張　津金糸子
露ふかき秋の野面によもすがらたれを松虫なきあかすらむ
〇　日本橋　ゆかり子
そこはかとたどる旅路の秋の夜にしるべ嬉しくもれるともしび
〇　群馬縣　浪竹女史
豊かさや見渡すかぎり稲出來て黄金の浪に浮ぶ一里
〇　京都　俊子
背の君はまだ來まされど夜をふかみみやまの奥に鹿のこゑする
〇　周防　しをれ花
歌をうむ村とし思ふ枯木立淋しき森に烏鳴くなる
〇　牛込　石田幸
世の人も疑らぬ色にならへとやみどりかはらぬ松はいふらむ
〇　四谷　長谷しん子


骨董好き　下谷　松尾定子

母刈て姉は町へといでにけり我家淋しき燈火の影
〇　茨城縣　小泉さかえ
秋の花理想の色のむらさきに我みめぐりぬ秋野の夕べ
〇　和歌山　逸見すみか子
世に合はぬ悲しき人等集ひ來て泣くらん思ひ秋の雨きく
〇　岩手縣　稗貫みつ子
ふご下げて山路おりくる少女子が影おぼろなり秋のたそがれ
〇　徳島　森春子
萩の花こぼるゝ野邊にたゆたへば小河に白し夕月の影
〇　福島縣　田村せい子
夜はさえて見渡す限りひろ〲とみにしみ渡る秋の月哉
〇　群馬縣　星香子
晝と夜の別れを惜む草風に虫の聲々月をうみぬる
〇　大阪府　有瀬もと子
うらぶれてちまたに立てる人のことほゝけて高き秋の草かな
〇　豊後　なてしこ
やまの井はうす霧すなり少女子の白百合たをる二すじ小路
〇　熊本縣　宮野かず夫
午鐘に來るならひの春ながら今朝しも更に珍しき哉
〇　羽前　杉坂信子
我が庭の垣根に咲けり菊の花心して置け朝の白ら露
〇　京都府　伊藤とめ
きくにだにたえぬ泪の湧もすれ入るに家なき人のこゝろよ
〇　磐城　片倉しな子
山門はかたくとざして尼まさぬ夕しづけし白萩の寺

○大阪　さつき女
鶏は鳴き朝風いたく身に沁みてかされまほしく覺えつるかな

○鳥取　上山千重子
人問はゞ燃ゆる一枝さゝげまし鹿來ぬ朝の庭のもみぢば

○河内　大宮多殷子
ほとゝぎすなくよもふけしなか空にふるさとおもふ夜半の月かな

○鹿能郡　寺部君子
をるもをし折らぬも惜し物皆の枯れて淋しく咲ける野ぎくを

○靜岡縣　濱崎てる子
春は花秋は虫の音とりどりに皆おもしろきおもむきぞ有る

○釧路　北川悦子
亡き母の手植せられし月見草今を盛りと花咲きにけり

○石見　撫子
さ夜ふけて眺もあかく澄む月の影はすゝきのうへに宿りて

○伊豆　杉山野菊
月冴えてかりがねかなし亡き人をおくりてかへる山かげの道

○秋田縣　佐々木千代子
親と子が秋の實を語らひて笑みつゝ歸る田中細道

○石川縣　松田翠子
ばら〳〵と落つる木の葉をふみわけてなく鹿の聲ぞ秋は悲しき

○備中　嬌笑子
朝夕にゆく道ながら知ぬ間に白萩さきて秋の風吹く

○本郷　つる子
入日する荒磯十里浪白し只秋風の吹くにまかせて

○相模　鍋田靜子
寂寞や木を伐る音のこだまして杉の雫の我が袖に散る

○四多摩　森田喜代子
轟轟れる工場の窓に月を見て逝きにし父母を偲ぶ宵かな

○備後　中山八千代
色やあると千菊の花におく露を白き給絹にうけて見しかな

○熊本縣　日影野靈子
君がみ名ふと口ばしる春の夢裏に急ぐ雲の影見て

○滋賀縣　渡邊こゆき
ばゝこ草嫁菜もともに摘みためて籠には春野色あふれつゝ

○岐阜縣　安藤はずへ
住捨てしやどの名殘のふる池のみぎはに淋し菊の一本

○本郷　淺沼ふじえ
目覺めては道の暗さを世に泣かず乞はんものかは人の燈火

○京都　山田よし子
亡き友の逝きにし夕べを想ふ時讀經の聲の塀より洩るゝ

○石狩　松本勝子
淋しさに母待つ少女戸を開き見るも悲しきまだ歸りこず

○越中　宮城つゆ子
ものゝふの妻にしあれば時雨ふる秋をも笑みて獨り籠もる

○熊本縣　宮野美惠子
夜は深し殘燈の影の暗くして淋しく聞ゆ松虫の聲

○神戸市　非佐野
里の子のかへる畔道たそがれて夕月淡くこほろぎのなく

○大分縣　阿南しのぶ
けふもまたくれぬとつぐるお初せの雲よりおろすいりあひの鐘

○豐後　甲斐ふい子
小雨ふる悶えの夜半を誰ぞやきて胸強かれの一言あれな

○神戸　若松芳子
夕月夜柿の枯葉を打ちて行く空吹きまよう秋の涼風

○飛驒　青子
唯一人落葉踏み行くあこがれや戀の秘詩胸に誦しつゝ

○伊勢　ゆかり子
君とともに胡蝶とらへし古への丘の花かげたゞなつかしき

○土佐　弘光よし
給絹のべ寫さんとすればそが上にそと舞ひ入りぬ窓のもみぢば

○愛知縣　金澤つた
そよ〳〵と秋風吹きて田の面に黄金色なす波のゆたけき

文藝遊戯

女子文壇愛讀會（課題）

一等　進歩

青森市米町　村林矢須子

本誌がてた時は、私はまだ、小學校に居りました、今迄は假名付きの雜誌ばかり見て居たのに、本誌の文章は、なか／＼むづかしい字や意味の分らぬ文字も澤山あるけれど、先生などに伺ひ伺ひして讀みました御かげて、今てはそんなに苦しまなくともいろ／＼の本も讀める樣になりました、これと云ふのも皆本誌の、たまものなんてす。

僅に月に一册の雜誌も、勉めて注意深く讀んて居れば、二三年の間には驚くべき進歩があるてせう、獨り貴嬢の幸ひのみてはありません

二等　愛讀會

鹿兒島　犬飼たき子

第廿回女子文壇愛讀會を催しましたら一人の缺席者なく集まるもの六名て今年尋常三年の妹は此れ等の會員にからかはれて居る皆さんうちの姉さんはその本が今日は來てゐますと學校から歸つた儘袴もはいたなりて羽織も肩にかけたまゝ夕飯時迄讀みなさいますとお母さんに叱られてやうやう止めなさいましたよ、因に妾の村は月刊雜誌は女子文壇が來るのみて一村六人の少女の新智識に多大の効驗を致します此の新智識交換會には村の學校の先生も來て貰ひますそして先生の少女訓がすむとすぐ茶話會に移ります若し都に近い村落ならば記者樣もお招き申して教訓を受けませうに國の端の悲しさ其の儀も叶ひません。

好い會合てす

三等　想像

靜岡縣駿東郡大岡村下石田　青木靜子

想像するに女子文壇社はハイカラ的の家、編輯室は圓いテーブルがズツト並んて居ります、そこて記者樣は盛んに事務をして居られ升甲「ヤー、ケチナ字だナ、ア丶此れは中々書ける」乙「分らずやじやナ前號に、ことはつてあるものを……」丙「アハ、、、ハア此の新歌謠はおかしいヨ實に」、等と評していらつしやるてせう一寸のぞきたいものてす。

マア此んなものてせう

四等　諸嬢の得意

飛騨船津町　荒垣千代子

今年の投書家諸嬢の重なる方々をあげて見ましよう、先づ論文ては山田沖子樣、抒情文ては山田くに子樣、叙事文の若菜女樣、書簡文の上山千

一子樣、小說は服部水仙子樣、新體詩が山田くに子樣で短文が根本松江樣和歌の鈴木雪子樣に、俳句の越後藤原の君、それから新歌謠は中富よしみ樣で、圖畫が岩谷綠子樣、間違ひましたら御免遊ばせ、豐橋房江樣や服部水仙樣は此ごろ一向御出しなさいませんが如何か遊ばしたのじや御座いませんか。

來ん年には誰がいつも優勝旗を得るでせう

五等　置きどころ　姫路市　操子

妾の無二の親友、女子文壇の第一卷と、第二卷は、部屋の押入に、第三卷は卓の傍にある本箱に置いてあるのです。來春からのは何所に置かうかしらん、本箱にある三卷を押入に入れて、其の跡へ置かうと思ひますのよ。

兎角にもせず、能く保存なさいます、雜誌でも書籍の一部、古雜誌を紙屑扱ひする人は心がけの善くないことです

○もう一冊　神奈川縣　木村　はる

學校の裁縫の先生に女子文壇と云ふ名を承りまして始めて本誌を愛讀致しました取り始めは何が何やらわかりませんでしたがもう一册取つて見やうもう一册とわかり安い所だけ讀んで居りました此頃では中の字も解し得る樣に成り投書も致し其上に交際まで求めたものですから其面白さ樂しさ丈で困つて居る病氣が全治するかと思ふ樣です。

○姉妹　神戶市　弓　月

私の家は三人家內で御座いまして親子水いらずでよい樣で御座いますが姉妹のない私淋しい事は御座いません何時も淋しい〳〵と思つて居りましたが女子文壇を取る樣になりましてから淋しさを忘れて仕舞ひました私はひとへに女子文壇の發達を祈つて居ります。

○すき〳〵　四　秀

私達五人して、每土曜日の晚開會する愛讀會は實に面白ふ御座います。終りは女子文壇の評てすが、活潑な初子樣は「新體詩と小說とはなくてもいゝわ」つて云ふと詩人的な夏枝樣「それでは女子文壇に花瓣が落ちたも同樣です」つていつも爭はれます「交際家は誌友俱樂部に名ばかり載せて貰つて論文敍事文を最少し多く載せて下すつたら」とは交際嫌いな滑子樣。光子樣と妾は「私短文が第一すき。」

○全家　廣島縣　國信　操

妾は最寄の書店から女子文壇を購讀して居るのですが投書はこれが初めてゞす、それで當選したなら非常に嬉しい事だらうと思ひます、又投書されるのは一寸も失望致しませぬ、投書された時の嬉しさは存じませぬ、が、もしも當選しれるのはそれほど自分が出來ないのですからいよ〳〵勵まねばならぬと思ひます、それから妾の家にはお母さんをはじめとし妾、下女に至るまで本誌を非常に歡迎して居ますから益御發展を願ひます。

○愛讀者　兵庫縣　森井せい子

私は家事のひま〳〵に女子文壇を見るのが何より樂みてす、そして讀み初めると面白くて〳〵いつまで見ても飽きません、時には自分も作つて見たくなつて投書しますけどまづは駄目てしよう、それでもまるつきり無駄にはなりませんだん〳〵書き損ないが少なくなつて、自惚れかは知りませんが手も少し上つたようてす、まア多くは望みますまい、たゞ忠實な愛讀者としてながく誌友に加へて戴けばそれて十分て御座います。

○想像　福岡縣　村　雨

私が九州の北端から我が社の編輯局を想像して見ましよ、日當りのよそふな二階の一室で、中央に七八脚のテーブルが列べられ、それに銘の濃き瀨谷先生や、眼鏡をお掛になつた沼波先生、ハイカラな河井先生や、小說的な廣津先生、さうして如何にも奧深しい山中先生に佐々木先生樣方が兩側に列ばれて、熱心に私共の原稿を御調べになつて居られるてしよ。

○徽章　川越　佐久間白蓮女

私の望は誌友徽章襟止形で女文の二字を變化の內に當合せてほりうらに女子文壇誌友章と少さ

くほつた、郵錢の物代三十錢内外で誌友の希望者に本社から出す事にしていたゞきたいのです　さうすればどんな所に行ても友人が居るのか知れます故樂しみですなにもないとげんざいあつても誌友だかなんだか知れない樣なわけですから徽章をつくり下さい第一男の方が女にばけていたづら遊す事が出來なく成るから好都合です

○初めて　　札幌　若山すみれ

私は或日例の通り散歩のついでに書店に入り彼れ是れと見る内ふと目に入つたはこの女子文壇てした記事は有益て參考になり且又口繪にはすきな三宅さんの水彩畫と寫眞版價はと見ると女學世界の半分拾錢やすいと獨り合點て早速價を拂つて散歩も中止歸宅早々讀むこと讀むこと晝飯も忘れて‥‥。

○失望　　和泉　高橋輝子

私は初めて投書しましたのは過る七月てした、初めての事てあるし又淺學の者てあるから、無論沒書になると思うて居つたが、思う通り沒書てした、其後俳句を勉強して二度投書しました、是は必ず誌尾にても出るてあらうと、次ぎの誌上を一覽したがすこしも名が見えてありませんてしたから、大いに勢が落ちました。

○嗚呼夢　　茨城　登與子

いつも乍ら愛する女子文壇を讀み終り床につきますと間もなく現のまくまぼろしのまく私の眼の前に天津女神が現はれ美しき御顏にほゝ笑み給ひ「汝は女子文壇を愛讀するか我も大いに愛す後には女子文壇は雜誌界の大王となるてあらう末長く愛讀せよ」と申されました私は餘りのうれしさに「あれ神樣」と呼んだ聲に驚き目をさませば嗚呼夢てあつた。

○君！　　千住　齋藤美衣子

親愛なる女子文壇の君よ、君は天から御降り給ひた、神の御子なのよ、共に笑ひ、喜び、悲しむてくれる友は只だ君のみ、君は妾の永久の友なのて、漸時も身體をはなれず、妾を勉強に、導んが爲に妾の机上、或はカバンの中に‥‥お丶君よ君の一枚をさいて鼻を、かまれようや、許されよ、君の心を、妾の友に語り妾等と共に永久の友たらん事を祈る。


山家の夕　岐阜　青木芳子

○新智識　　岐阜市　篠田とみ子

私の家て本と云へば巡禮本の破れや道中記位て新智識を得るに道がありませんけれども下手の横好きとやら申しまして叱られても笑はれても止められません處て文壇開けば何でもありますから是で一人學問を致し沒書の苦も忘れてはお笑ひ種を蒔きますと其芽が日誌へ生へて出ます

○滿足　　豐後　姬島女客

讀者に親切な點に於て本誌の如きは甚だ稀てす内容體裁に就ても別段申分なく、基礎も磐石の上に置かれてあるやうて、要するに雜誌として先づ完璧に近いものと思ひます、萬望每時迄も現況を維持さるゝやう祈ます、終りに一寸した事てすが、丁度其發行日に到達するやう豫め時日を見計つて送らるゝ發送部の擔當のお方に感謝致します。

○月二回　　神田　松本薰

年の始に兄の秀才文壇にて本誌のある事を承り直に一册を求めました私は實に此時女子文壇の趣味や色々有益な事を感じまして只々よい本を目付けたと心中非常に嬉びました其夜父母にも有益な本だと申されました　さあさういたしますと次號が早う見たくて見たくてたまりません私は少く共月二回位の發行を望みます。

○文學に志す　　あさみ

或朝大阪なる友の許から雜誌を送て與れました其が此女子文壇て封を切て初から順々に讀み掛ました餘り面白いてしたから終日何もしないで見て終つたのです其内評論文の處て隨分宜い事が載て居ると思ました曉自分に少しても文才があるならば文學以外に有益な事を投書し度い樣な思が胸に迫てしみ〳〵自分の拙い事を歎らました而しそれが爲に之迄無頓着て有た文學に志して勵む樣に成りました。

○國のため　　山形縣　樋口かね子

私が御社のために何程新智識を得ましたかしれません毎回の文壇で新智識を得又誌友倶樂部の圖書換讀で不用の本と入用の本を換讀して之でも新智識を得ました、これが私ばかりで無く國中の愛讀者がいづれも此迎りかと思ひますそうして見ると御社の文壇が國のために發行せらるものと私は思ひます。

○うれしさ　愛知　舞鶴子

作り惡い叙事文もいつになう容易に出來たのですぐ樣原稿紙に淸書して、名を『遊ぐさ』と題して投稿しまするると、最う早い妾の心は、沒書ぢやないかしら、若しや一等にても當選致しはせまいかしらなぞと、自分の不才も顧ずして、いろいろと空想をめぐらしては、女子文壇の來ぬのを恨むこと二十餘日て、戀しい郵便配達夫の手に運ばれたので、開いて見まするると一等にも當選しなかつたけれど、秀逸に出たのでわれ知らず、禎子さん、京子さん、妾の文が出たのよなぞと自慢さうに見せ聞らかした風を他所から見たら、嘸をかしかつたらうけれど、妾は何んだか嬉しかつたわ。

○三つの齡より　西萠村　白百合子

忘れもせぬ明治三十八年の一月二日私は母よりお小使を頂いて、買初めにと出かけました。やがて止まりましたのは本屋の店先。あれかこれかと探してゐる内に、計らずも私の目を引きましたのは我文壇！しかも生れて三日と立たない眞の赤さんでした。それから爰に三星霜。私は當年の赤さん今の愛らしい此少女を、一日も机上から離した事はありません。

○一くだり　小樽　野菊子

私は色々雜誌を讀みますが是迄は見出を一覽して氣に入つた文題のと、珍らしい文題のと、それから選に入つた文とを讀みましたが文才の乏しい自分が誌上の片隅をお借り申すやうになりましてからは、一つの文章を作るにも貴重な時間と腦力とを費やして、作られたと思ひますと假令一下りでも殘されぬやうな氣が何時も離れません。

○沒書?　福島　かすみ

「又身體にさはると惡いからお寢みよ」と仰しやる、母樣の目を忍んで、一番鷄までに漸くかいた文を、幾度もよみ返して「今度こそは」と微笑みながらポストの中へ。かくて一ヶ月、うたゝ寢の夢に見るまで待ちこがれた文壇の、今郵便屋の置いて行つたのを、封切る手先あやしくふるへて、胸には大浪がたちさわぐ。かへす頁の一葉二葉、あゝ匿子の名は遂に見えぬ。

○愛讀來歷　石狩　檜澤　源子

妾は昨年の二月、東京の叔母さんから女子文壇を一册送つて頂いたのが緣となり、以來今日迄夜業で得た少しづゝのお錢を購求費に當てゝ農業の餘暇愛讀して居りました。又書簡文が大好きですから、少しづゝ投書致しました處、記者樣は毎月載せて下さいますから、段々面白くなつて毎月出しますと終ひには度々當選されました、其功か今では手紙等書くのが大變樂になりました、是も女子文壇のお陰と千代八千代迄愛讀しようと思ひます。

○あゝ三年　因幡　獨笑子

おゝ懷しき我が女子文壇よ、今は世に亡き我が妹の、過ぎし年の初春を他に俊く逝きにし彼が化身かとばかり、月を同うして生れ出てしは汝なりき。されば可憐しき我が妹とも。花の朝に月の夕を睦びつ慕ひつ早くも三年。妹の世にあらば、あどけなき片言のさこそ可愛からん此頃を、いと美しう生ひ立てる文壇を見る身の、せめては嬉しき學にこそ。

○悲喜交々　攝津　寺部　君子

始の程は何心無く見て居りましたが皆樣のお作や御交際を見て何日か私もお仲間入が仕度成り載せては戴けまいと臆想仕乍出したのが計らずも好い處に出て居た時の嬉さは何んなでしたと思召其に又此度こそはと思て投書仕た後は女子文壇の來るのを一日千秋の思ひて待ちやつと來たのを小口から自分の名を搜しても無い時の心は又何んなだと思召もう〳〵私等の力で忘れても投書など仕まいと思ふて居る下から又書き度く成て來ます。

○誌友面影　群馬縣　羽衣

私は誌友面影にて御目にかゝつた投書家諸嬢てまだ屑上げのある一見十六七多くて九と思ふやうな方々が堂々たる有髭男子も及ばぬやうな新體詩論文など然も入賞或は秀逸に時々拜しますが自分に作れぬ故ては有りませんがどうも腰がはれてなりません決して妬むのぢやないわ。

▲お断り▼『愛讀會』の原稿はまだ大分餘つて居りますし、〆切後に着いたものも澤山ありますから、それ等は皆一纏めにして此次の臨時號で發表することに致しました。

抒情文

文學士沼波瓊音先生選評

四等　○待つ宵

本所外手町六十一番地　田中久子

ランプを消して床へはいると今更に嬉しさがわく〳〵胸へ込み上げる。例は眞暗な天井を見詰め乍ら色々な事を代る〳〵に考へるのだが今夜はもうお葉さんの事許り外には何も浮ばない。さつき、火鉢に手をかざし乍ら皺だらけの額に包み切れない嬉しさを見せてお葉さんの話に餘念もなかつた小母さんのお顔もみえるし、四年前の春停車場で別れた時のお葉さんの姿も浮ぶ。あの時は桃われでお揃ひに竹長の細いのをかけてたつけ、今はもう十七に成たのだから彼の方だつてきつと風も變つてゐやうし心も幾らか變つてゐるかもしれない、夫に京都ではあるしどんなに言葉が變つてゐやうかいつしかお葉さんの家へ遊びに行つて今御母さんに成てる叔母さんといふ方に逢つて言葉が可笑しいつてお手玉もしないで散々二人で笑つたが矢張りあんなに成て了つたかしら。京都といふと直に舞子の事を思ひ出すけれどお葉さんは決してあんなによら〳〵した姿になんぞなりはすまい、決してそんな事はと思ふけれど昨日民江さんに逢つた時、あの方は元からお葉さん仲よしではなかつたけれど、お葉さんは京都へ貰はれてからも學校へも行かないんだなんて有仰つた、けれども夫は小母さんの有仰る方が本當できつと京都の女學校へ行てゐるに違ひあるまい、さうすると矢張り束髮かしら……。

明日の十時に停車場へ小母さんを迎ひに行つて始めて顔を見合はせたら……と思ふと堪らなく胸が躍り立つ。何事ももう明日、ときめて無理に眠らうと目をねむると急に邊りがシンとして、臺所のトタン屋根に雨の當る音がする、おや明日は雨かしら……。

（評）男子の摸し得ざる趣致あり。

五等　○香の煙

芝區琴平町三番地藤岡作次郎方　清水よし

何處と云ふ事も無く此の上も無く靜な月は澄て居る、自分は此の宵をフラリと縁先へと出た。すると向ふの家では四五人の者が集て御念佛を唱へて居る、太く寂びれた聲と、細く迫つた聲とが、一種の調子に、一際高く、益々熱誠が、加はつて來る、其の聲が、何時か又た、沈んだひつそりとした、月の中に遠く吸ひ込まれて、行く樣に聞える。
初め自分は、此の聲を、うるさく思つたが、何時か其の調子が、胸に傳つて來て、我れ知らず「南無阿彌陀佛……」と夢の樣な心地に成つて來て、頻りと唱へ始めた。
フト我れに歸れば、モーいつか其の鉦の音も、念佛の聲も、消え失せて、唯靜な中に、秋の夜の凞乎とした、大氣が澄で居る。
今迄居た四五人の念佛講は、はや前の家には居ない、唯香の煙が消えがてに立つて居る、其の立つた、煙は輕く消えて、後先も無く影も無い、誠に果敢ない事は、人の命の樣だ！。
（評）調子面白し、今一息。

秀逸

○秋の野に立ちて

[illegible]　藤原孝子

（秋が來た）と斯う感じて、云ひ知れぬ悲しさが、胸を刻むやうに覺えた。
葉月の初である。
やがて月の美しい影も、秋草の盛の色も、溫い小春日和の長閑な小鳥の聲も、澄み切つた郊外の山色も、野の里に暫時の榮をもたらして來るのだ。
秋の野は之からが華である。
吁！華、然し云ふに云はれぬ寂しい華だ。
浮世の戰に、精力を使ひ盡した人が、むくろを土に委して逝く、おそろしい夢を見ながら、猶榮華の影を追うて、永眠の床とも知らず、高樓麗屋を築いて、含笑むやうだ。
悲しいではないか秋の聲は、さながら古武士が華々しい最後の名乘のやうである、と私は思ふのである。
誰か永劫の不滅を希はぬ者ぞ、亡びの影を見て、猶暫時の榮を思ふのは、人情の眞である、自然の心である、之をしも風俗の惱み、淺ましい悶へと云ふ、僞善者があるならば、此秋野に伴うて、桔梗を見せてやり度い、女郎花を見せてやりたい。
春が經つて、夏が暮れて、斯くて秋は逝くのだ。
萬年億年、よし宇宙が永久の姿に存在するとも、今日の秋は終に歷史の外に出る事は出來ないではないか、歷史は遂に想ひ出に過ぎぬ、一切は空てある。

私は今、孤獨の身を秋野に立つて居るのだ。日に日に黄ばんで行く、柳楊の姿を眺めては、深い〳〵、遣る瀬ない悲みに掩はれ、種々な事を思ひ浮べて見る。浮世の嘲り、榮華の友の笑ひ、唯甘じて受けやう。敢て誇りがに、濁世を脱れて自然の懐に、憬れて來たとは云はぬ。

唯々世に住みわびて、寄る邊なさに、若やこゝはと迷うて來た綠の木蔭、そこにふと清い泉を見出したのだ。自然の兒には、黄金も名譽も、位置も僞善もない。

私は秋を泣く、秋を悲しむ。來らむ春を思うて、此悲みを消す事は出來ぬ、此愁を忘るゝことは出來ない。春が來たらば又浮れるであらう。斯くして自然の歴史はつくられて行くのだ。

（評）深さなきに非ず、稍散漫なるを憾とす。

○山の子

和歌山縣　池田繁子

妾の古里は四方みな山で、耳に入るものとては、たゞ呼子鳥の聲の凄いのと、そのあひ〳〵に裏の山で、伐木の音が丁々と聞ゆるのみて、静けさは一入ますやうに思はれます。こんな處で生ひたつた妾て御座いますから、あの夕映のさす御山の頂きがさながら燃ゆる血潮そのまゝの色を眺めますと、あの御山のかなたには如何に美はしいところがあるかと、常に思つて憧れの眼を輝かすので御座いましたが、それかと云つて、またこの向ふの尾の上に鹿の來てなくのを、妹と二人月の清い晩に身に浸む寒さをも忘れて、聞いた時の事などを考へますと、なんだか身を旅の空におくのが果敢ないやうな感じが起つて行きたくないやうな、また、あの山を越して、ひろい〳〵花野へいつても見たいやうな氣持ちがするのでした。しかし妾は彼の山を越して都の空へ旅立つたならば、お一人しかない母様は……、天にも地にも二人しかない姉妹の西と東に離れて居ては……、さぞや御心配あそばすてしやうさぞ妹は淋しく暮さねばならぬことてあらう、と思つて結局妾の心は、此の美はしい古里に留まる事に定まりました、されどともすると、あの榮ゆる夕映を眺めて、野心の焔をあふらすので御座いました、しかし、妾は一生を山の子でおくる

夜露　茨城縣　小泉さかへ



殘りて御座います。母樣とともに、妹とともに樂しく日が過されるならば、名譽もなにもいらぬので御座います。

（評）あはれなる御おもひ

○患者控室　熊本　森とよ子

患者控室と玄關兼用の六疊の間に入ると、急に、藥と陰氣と混合した、一種の臭氣が鼻をつく。室には中央に、陶器製の大きな火鉢に、消し炭が辛くも火といふもの丶餘生を保つてる程、ほんの少しばかりつがれてあつて、鐵の火箸のくねくねね蛇ののたくつたやうに曲つて居るのは、慥かに此の醫院の書生等の、品性を證明して居る。

その火鉢の左には、もう六十路に近い老人が、青く彩られた眞綿を喉にまいて、風邪の氣味であらう、時々ごほごほ咳をする。

妾は淋しいやうな悲しいやうな、言ふにいはれぬ感じがした。何故ならば、妾が此の室に來る何時でも、妾の體は健康で無いからである。それのみならず、妾が常に此の室の中で見る人々は、不活潑な陰氣な病人ばかりである。妾はその不健康な人々を見るのが非常に淋しく感じる。そして妾自身も他の人の眼にはそのやうな淋しさを感ぜしめるかと思ふと、それが又妾には非常な悲しみてある。

妾は何時でも思ふ。之が妾の醫者の玄關を訪ねる終りであればいゝと。妾は幼い時から此のやうに不健康な者ではなかつたのである。そして十二才の時始めて醫者の藥を飲まねばならなかつた時、妾は非常の屈辱を感じた。そして妾は妾の生涯に於て後にも先にも、只之が一度であれかしと祈つた。然し、その後妾は幾度となく醫者の門をくゞつた。今度も妾は之が終りであれと願つてる、それでも妾は尚此の後、果して健全に藥の味を忘れる事が出來るかしら。

（評）少しくどくどし。

○あゝ兄さん　牛込　石田幸

一度墮落の淵に沈んでは知らず識らず深底に陷つて遂には其濁を脱することが出來ないといふが兄さんは何うしてあのやうに零落したのであらうあれ位眞面目であつた兄さんが葛の葉を返す樣に變つてしまつたので一家の内も靄々たる春風の中に平和なライフを送ることが出來なくなつたのであるあゝ兄さんは何うしてあんなに墮落したのであらう！あゝ兄さんはお母さんが笑ひながら昔話をして秋の長夜を語り明した幼年時代を思ひ出さないのであらうか追想すれば唯でも懷しい幼年時代に村の祭や豐年祝に晴衣を飾つて得々とした頃から若氣盛りの今に至る迄お父さんやお母さんの苦心は如何ばかりであつたらう着る物も碌々着ず食ふ物

も子にと殘して子故の闇に迷ふ有樣は實に燒野の雉子夜の鶴と云ふ處ではない其海山も啻ならぬ高恩を忘れて斯る今の有樣は何うてあらう表面には怒を粧ふて居るが近頃お父さんの目の窪んだのは誰の爲てあらう皆兄さんのことを心配するからてあるお母さんも毎夜眠りもしないで此秋の長夜を兄さんの爲に泣き明すことも幾度てあるか知れない其でも猶兄さんの心にはしみないのてあらうか？兄弟姉妹の心情を盡す訓戒をも耳にせて其て何處に樂みが有らうか兄さんも忘れもしまいが去年の夏休暇て久々故郷へ歸つて來てよしや香味のものはなくとも自ら溫情の籠つて居る夕餉も濟してから夕顔棚の下に椽臺を出して夕涼をした時兄さんは何と云ふたてあらうもう一生此鄕土を離れないで老年の兩親に樂しく餘生を送らしたい又傍には一心に我家の隆盛を計らうと公言したてはないか其時兩親は如何に感謝したてあらう兩眼に浮べたあの貴い淚を忘れたてあらうか其嬉し淚も今は悲し淚と變つてしまつた私にしても此言を水泡と化し日夜墮落に耽ける兄さんの面影をどうしても想像することが出來ないあゝ兄さんは親兄妹の喜樂を奪つてまても自分の愉快を得んとするのてあらうか遊樂に耽らうとするのてあらうか。

○小笠原島にて　西備水の藻

三十路には未だ六つ七つ足らぬ身の、知る人もなき孤島に投じたのを、怪み問はれては只「肺を病みまして」と、心にもなき僞を云はねばならぬ、胸の苦しさをせめて浪に訴へての、心にもあらぬを夕暮の此處浪打際を、無上の快樂てもある樣に夜毎さまよふは、我と我心さへわかぬ半狂人の樣な我なればこそ。

己が罪に責められて此處小笠原島に、逃れた我は譽ある世も榮ある職も自ら捨てゝ、一孤島に淋しく泣きて過すを本懷とこそ思ひしを、夜毎日毎さまよひ出てゝは彼方に渡る、千鳥の行衞見送るは淺ましや、榮華の世に殘る心ならんか噫、我と我心の解せぬ哉。

さるにても情に弱き女性とはいへ、いかに亡き兄上に其儘なりしとはいへ、醒め易き戀に迷ひて退學せられし罪を包みて、女學校の敎壇に立ちて密かに笑を洩せし我淺ましさを、女の身なる我さへ夙に悟りて、語る友もなき孤島に朝夕懺悟の淚に送らば、犯せし罪のすこしだも滅びやせんと、此島に渡りしものを共に作りし罪に同じ運命に陷し君は、かの淡雅淸新なる面に深く罪穢の塊を包みて、今も尙師範學校に天禀の美音を誇り給ふと聞く、虛榮の心は女にこそと聞きしものを、汚れし心に人導く淺しさ知り給はぬにや、笑止の限にこそ、あやし!!!あやし!!!浪の彼方に、「あれあれ流るゝ花びらに若あゆ群れて……」と、兼て彼の君の好み給ひし一節、玉を轉す如き美音に抑揚自在なる、面白きがかすかに、いとかすかに……耳を聳つれば、滔々と岩に碎くる浪の音のみ、見渡せば白浪きはまりなく明月皎々と照すのみ、現か、あらず心の迷か噫、我も又譽ある世に、心の殘るならんか、怪しの我心哉。

○ある夜

南豐　瑠璃子

浄國寺の鐘はゴーンと世の無情をつげ餘韻は長く後の林に去り。夜はしーんとして二分じんランプはあたりをかすかに照して居る。こゝに獨座して空想に耽つて居るのは私なのです。浮世の風のかよふ此の世の中は實に味氣ないものである。上を見れば限りがない下を見ても限りがない。自分は此の世に出てこゝに十有何年、其間に犯した罪はどの位であらう。悲しかつた事やしん苦した事や嬉しかつた事や樂しかつた事もどのくらゐてあらふ。とやかくして漸く一人前の人とは成つた。あゝ人とは成つたが。名も成らず望みも遂せず。いたずらに前途を悲觀して居るといふは。何といふ薄幸な身てあらうか。思ふて見れば人生ほどはかないものはない無限なる宇宙に生をうけて。地球の一部に住居し浪々として。幻の樣な成功や失敗に喜憂して。泣いたり笑ふたり悅んだり怒つたりして。僅か五十年の榮を爭ふてをるのである。あゝ自分はかゝる果敢なき人生の小利害を爭はんより。慾もなく怒りも無き鄕に入り。永遠の成功が追ひたいと思ふをりしも。ピーと聞ゆる按摩の笛。ぬばたまの闇を破つていともかすかに。あゝ彼は盲目である。歩行もまゝならぬ不具者てある。人は皆寢靜まる此の深夜に。親の爲か又兄弟の爲か。根氣强くも働いてをる。實に感心な者てある。それに引かへ自分は此の健全な身てありながら。かゝるめゝしき思ひをして居るとは誠に恥しき至り。あゝ此の健全な身て。女子たるものゝ本分を盡し勉勵したならば。昔から奮發勉勵必得成功の譬へ。自分は假に空想の夢がさめたのである。

○死

土佐　深瀬ますこ

姉樣はお死になすつた。確に御死になすつた。自分は敢て姉樣といふ。姉樣と許思はれるのだもの。姉樣は何の爲に、此の世にお生れに成たのだらう、二十九の御生涯を省てみると、十七の年人の妻となり、二十六の年捨てられ物となつて、二十九てお死になすつた。

其一生は、鬼の樣な人の弄物と成る迄の事。神は強ち善を好み給ふ物てはない。誠に善を好み給ふとならば、姉樣などは、もつと〳〵幸な御生涯を送るべきてある。

世に善良な人は、哀な死樣をしても、道ならぬ人間は、立派に榮えて行く事がある。神は善惡に係るものては無い。吾々が道德といひ、罪といふも、畢竟吾等人間の作つた繩張て、神の振舞に何程の障ともなりはしない。つまり此の世の中は、潔白な人間や、姉樣の樣なお優しい人の住むには適しないのてある。

神は我手に先、精神的死にも優る苦を與へて置て、徐に肉體の死を以て救ふ。あゝ何たる惡戯ぞ。思へば天地のゆる〳〵として盡くるなき久しさに比べて、人の一生は短いもの、我等がかうして生きて居るのが夢か、長い眠に就く方が夢か、わからない。此の世て得る苦

い經驗や知識は次の世に必要があるのであらうか、此の世て行はれる樣な運命が、次の世にもあるのであらうか、――そはともかくも、この世て受た傷に堪へぬ、おいたはしい我が姉樣の魂に許は何時迄も〳〵變らぬ安けさのあらむ事を祈る。

○萩の小徑

和歌山縣　岡本なかの

殘月の淡き影山の端に消えなんとして夢の如、秋霧深く里野を包みて、世は靜かに眠れり。

露しげき萩の小徑をたどりつゝ、いつしか野原の草むらの中に佇めり、曉風かろく寢衣を拂ふて、そぞろにうら寒さを覺ゆ。

見渡す限り秋草の花、笑める桔梗よ乱るゝ萩、招く尾花や藤袴、風になびける女郎花、さてもゆかしきは野菊の花、露深く鳴きしきる虫の音も聲かれがれにいとあはれなり。

やがて東の空は橙色帶びて、紫の雲しづかに動けば、霧は次第にうすれゆき、遠近に鷄の聲して、明け行く空は目を醒ましぬ。

日はやうやう出でゝ、草葉に宿る露の夢さめて、きらきら輝く花の色、紫黄紅やうるはしき。里の茅屋よりたちのぼる炊煙、低う軒をめぐりて漂へり、雀の里にかへるかつれだちて、園の柿の木に百舌の聲一きは高し。

ひとりかへりゆくいさゝ川のほとりに、美しう咲けるゆかしき野桔梗の水に落ちて影小さう、そが花にもろ羽破れし小蝶の、なほも花の色に迷ふかひらひらと、舞へるもあはれいとしや。

引越　下谷　橋本波子



○樂しき夢

常陸　しづなみ

樂しみを分たんは、いと易き事なれど、苦しみを共にせんと云はれなば、誰しも、耳掩うて逃げ去るべし。これ人情の常なれば、あながち咎むべきことならずとはいへ、頼みなき事ならずや。

かゝる習はしの世にありて、たゞ頼もしきは兄弟にぞありける。苦しみ樂しみ物として分たぬはなく事として共にせぬはなし。かくばかり親しく、かくばかり嬉しきものは世にあらずなむ。己れ常に思ふやう遠く隔たりてさへいと忍ばるゝを、まして兄弟なき人よ、いかに心細からん。幸といふ幸は多しとも父母兄弟そろひ居るに、ましたるものは何かあらむ。己れ幸に其數にもれ

ずして、父母同胞そろひ居るは、こよなき身のさいはひになむ。されど兄君には早くより、もの學びの爲都にものし、先つ年定めの業終へ給ひしが、近き頃亞米利加に渡りぬ。さらでもこの曇りがちなる五月雨の空、いかに過ごし給ふらんなど、いと／＼戀しくて、夜な夜な一家集りては、ひたすらその歸りを待つのみ。今宵しも、いとゞ忍ばれて文机に向へど、好める女子の文壇を讀めど、只兄君の上のみ思はれて、讀む文の、心に入るべくもあらず。いかゞはせんと、思ふ折から、電報々々と叫ぶ聲す。走り出てゝ見れば、こはそもいかに。夢か、現か、兄君が今横濱に着き給へりといふしらせなりけり。驚きていひ出づべき語もなく、父君母君弟妹などの、とはるゝに、やう／＼かくと告ぐれば、家内はさながら、鶯の氷の床に、春風のおとなひしもかくやと思ふばかり喜びさはぎ、殊に母君は、三年の間恙なかりしも皆神の御惠ぞと、みきたむけ給ひなどす。いな、みきのみならず熱き涙をもろともにそゝぎ給ふ。弟共も明日は兄君の御歸りぞと聞き、喜び勇みて、兄君萬歲と唱ふるも嬉しきに末の妹の廻らぬ舌に、和したるも愛らし。折しも次の室より「何を獨りごち給ふぞ。いたくふけぬるに、いで休み給へ」といふ。驚き正氣に歸れば、是なむ机上の夢にて、皆人を喜ばしめし電報すらいづ地ゆきけん。殘るはさびしき燈火のみ。あはれ夢なりけり。嬉しき喜ばしき樂しき夢なりけり。あゝ夢よ夢、いかなれば兄君に逢はぬ間にさめ果しぞ。名殘り惜しき限りかな。今一度見えよかしと迫れど、無形の夢には聲なくて、空耳かと怪しまるゝばかり幽かに答ふる山時鳥。やがて墨すりながしてかき付くるは、この樂しき夢。あはれ此硯の主も兄君なりけるを。

◎秋の夜

牛込　むらさき

吹く風涼しく袖を拂ひて心地よさ限りなし、月は一點の塵もなく晴れ渡るみ空にすみ上りぬ、あたりの虫の聲はいよ／＼しげくなり行きてつゞれさせてふ機織虫の時つげ顔にすだけば誰をまつとか松虫の我おとらじと清き音をはり上ぐ、百草は今を盛りと咲き亂れて眞萩女郎花の風情いとしほらしう葉末に宿る白露のはら／＼散るも趣深しあゝ快なるかな、月は高く清くすみて自づから心の塵も拂はれすが／＼しうなりぬ、げに秋ほど物靜かに心地よき時はあらじされどいつくしみ深き父母の許にありて學の道をはげむ身の何につけても樂しき事のみなれど懷かしき故郷を幾重の雲にへだてられはる／＼都に遊學せらるゝ友らには何處も同じこの月影を眺めていかに父母の面影したはしからむ、招く尾花を見ては故郷の秋も忍ばれて自づから涙のさしぐまれていとゞ袂も露けかるべし、それに引かへての我身の幸よ、思ひ此處に至れば冴ゆる月は西の端山に落ちんとして星の影淡く虫の聲のみいや高し。

俳句

巖谷小波先生選評

二等

大木に猿の物喰ふ月夜かな　日本橋區濱町三ノ一ヘの一七平井方　三森ゆき

（評）新らしき見付け所を、大膽に云ふてのけたり、老手々々。

三等

添乳してつらく砧聞く夜哉　京都市本町七條上ル　吉田靜枝

（評）想必ずしも新しからねど、句作凡を拔くこと數段。

四等

川ありや薄のさきに白帆見ゆ　下谷區入谷町　蕉雨子

（評）あつさりと面白く云ひまはせり。

五等

孫連れて子連れて月に踊り鳧　米岡町藤渡戸　白羽節子

（評）句も氣も輕いことかな。

秀逸

山茶花や薄日のあたる椽の先　磐城　遠藤貴佐子

大寺や寂然として冬木立　岐阜　堀田あやを

草臥れたやうな風吹く日永かな　川風子

雪消えや竹跳ね起る丘の朝　羽前　琴和女

石階を九十數へてはぎの寺　下總　錦江女

秋の水緋縅の武者渡りけり　三重縣　玉井百合子

秋寒や白河院の夜明がた　佐賀　田中よを

行水の衣かけたり杉籬　越後　藤原かず

どこやらに臼搗く音や秋の月　廣島　柳田恒子

風止んで雨に落葉の窓寒し　金澤　木原蓮舟

鬼灯や口喧しき町娘　神田　鶴岡とく子

吹き送る白帆の風や芒原　國村不二子

老僧の句案に耽る夜長かな　和歌山　白菊女

狐鳴く奈須野が原や冬の月　伊勢　山川つい子

屋根に干す夜着にす柿の落葉哉　神戸　安達絹枝

玉藻集讀む耳に澄む虫の聲　埼玉縣　野口悦子

西行も袖ぬらしけり秋の暮　山梨縣　白鷗女

足もとに鹿聞く雨の綷哉　高知縣　鏡の月子

朝霧や船は隱れて人の聲　下總　君子

小娘の琴一曲や月の宴　越後　村山きみ子

不可解の華嚴の瀧や霧深し　山田市　常盤木花子

眠る兒にそとかけてやる蒲團かな　駿河　松永しげ子

浴湯の中て虫の聲きく古刹哉　宮城縣　菊地菜子

蝴遊ぶ源氏の君や春霞　天氣　菅井女史

夜嵐やむだに鳴子の鳴り通し　愛知縣　翠山女史

萩の戸や露にぬれたる藁草履　越後　永山克子

澤に臨む一寮明けて鹿の聲　越後　早津まさ子

棧橋に名殘惜むや霧の朝　京都　淺野つれ子

萩の門今朝出る人の美しき　神戸市　加藤不美子

秋の空大炊の煙仰ぐかな　長野　靜潮女史

月の露くみて歌かく嵯峨の宿　伊豆　加藤爲子

萩のみち馬上の人の微吟かな　三重縣　玉井百合子

初秋やさらりとしたる洗ひ髪　土浦町 豊月子
流の曠野に放ちやる月夜哉　仙臺 河原榮子
動經に鳥靜かなり秋の森　神奈川 土紅子
鈴虫の露ふりこぼす高音哉　下野 芳子女史
一山の落葉に朝の鐘響く　麻布 大縄白子
君逝きて蟋蟀狂ひぬ秋の森　本所 秋山飲子
萩枯れて寒き雨ふる秋の暮　福島 白萩女史
銀燭に菊の香高き廊下かな　美濃 白菊女史
竹椽に佛器洗ふや朝寒み　香川縣 八木繁子
旅に病て故郷なつかし秋の雨　豐後 福島靜子
絹張りの傘に彩なす紅葉かな　常陸 酒葉良子
猪さげて戻る水杜の戸口かな　北越 木村政子
百舌鳥啼いて夕暮寒し秋の空　大阪 さつき女
栗ゆでゝ隣を呼ばう長夜かな　福島縣 江花せん子
夕日して紅葉に染ゆる社哉　上毛 蘆花女
燗の火に迸の葉光る夜露かな　長崎市 葉閑女史
秋の山紅葉に染まる人の顔　南越 くれなゐ女
麗人や蛇の目の傘にちる紅葉　廣島縣 佐伯梢月
渓流や月は砕けて河鹿鳴く　高知市 高橋邀齋
牛鳴いて日は斜めなる花野哉　高岡市 葉山しづえ
椎の實や醍醐寺の秋閑にけり　越後 早津すゑ子
初秋のやぶにわけびの笑ひけり　秋田縣 大越ひで子
栗の實のはじく響や秋の山　京都 波多野かつら
月一つ野にぬれ殘る時雨かな　愛知縣 岩川香水子
眉若き僧の和讃や萩の寺　芝 清水よし
妹を京に見送る花野かな　本郷 古谷花子
山茶花や茶巾をしぼる窓の先　紀伊 尾上子
兼題の剖札に散る柳かな　奈良市 藤田百合女
淀川にうつる燈籠や九月盡　大阪 山田喜代子
楽しい鳥の來て居る清水かな　熊本縣 富野かずな
黄昏や病葉に群る秋の蠅　小千谷 瀧澤みつ子

小城下の秋を荷馬の通りけり　伊勢 波多野みつ
蜻蛉や雲一朶なき津輕富士　宮城縣 佐々木千歳
蘭菊に小狐來る森の秋　和泉 天羽華子
やせ馬を引き出す背戸や今朝の秋　常陸 こほり
里川や藻の花白しうす月夜　廣島縣 靜丸より
初霜やまだ人見えぬ大工小屋　長崎市 葉閑女史
秋風の港につきぬさんご舟　上毛 五十貝蓉薫子
萩の花散る泉水や鯉の群れ　和歌山縣 池田しげ子
神橋に日の傾くや赤蜻蛉　横濱 中村かず枝
明月に外國の謠うたひけり　濟國 草刈ゆり子
朝寒の自炊の土鍋洗ひけり　但馬 石原靜女
月祭り燒栗供ふ小百姓　陸前 白藤女史
汲みて來る水澄みにけり今朝の秋　磐城 片寄しな子
芒野や月まんまるに繪の如し　群馬縣 尾花女
蜻蛉とんで十月の湖平らなり　越後 松山けん子
名月や一聲盛る天津雁　阿波 淡子
雨となる雲を見て掃く落葉哉　大和 武村芳子
落鮎の川水白し星月夜　富山縣 梶川霞子
大宮に咫尺す菊の佳節かな　佐渡 入代初子
姉妹星數へつゝ涼みかな　岩代 白菫
朝寒や三井の衆徒の粥雜炊　大阪市 生田花朝女
水亭や微風にゆるゝ走馬燈　埼玉縣 野口悦子
夕あらし庭一ぱいの落葉かな　信濃 世良田ゆう子
炬燵して妹は毛糸の細工かな　靜岡縣 鈴木なみ
蓮の實の飛ぶや月澄む池の面　越後 峯村花子
鍬の柄や蜻蛉の眠る畑の晝　大阪府 稲西ゆう子
落鮎の石美しき早瀬かな　福島縣 三沼光子
枝柿を土産に買ふや村はづれ　沼津 渡邊とよな
松の陰月の御船の懸りけり　栃木縣 宇賀神きち子
炭俵門まで敷くや今朝の雪　上總 北田のぶ子
堅實りの畑に走る鼠かな　羽前 謁村靜枝子

書簡文

文學士沼波瓊音先生選評

四等　○他國にある弟に

熊本縣天草郡本渡町　池邊靜子

荻の上風そよ〳〵とさしもにかしましかりし蟬の音も途絶え世はいつしか秋凉しき初秋の候と相成候折柄其許樣には如何御起居遊ばされ候や當方にては母上はじめ健坊に至るまで非常な元氣にて暮らし居候間國許のことは決して御氣に懸けらるまじく候。

其許御出發なされしはまだ昨日今日の樣なる心地致され候處最早半年の餘とも相成今更月日の駒の速さには驚き申候。俄かに家族一人減りたるとて其當座は非常に寂しく健坊の如きは日每夜每兄さんは〳〵とて母上や妾を困らせ居候。

今更言新らしく申す迄もなきことに候らへ共吾が家、此の新井の家の再興沒落は偏に其の許の双肩にかゝる大任なれば其許とても最早今年十八の立派なる一人前の若者なればたらはぬ姉が申す迄もなく其の辨へは有之候ならんも其許時代の年頃には有がちの燃ゆるが如き青春の血にかられ徒らに及ばぬ官貴名譽にのみあこがれて兎角心の移り易きものに候らへば決して惡友をさけ只管志されし其の道に勵み落ちぶれたりと雖も新井の家名を穢す樣なとなされぬ樣呉々も祈上候。

先日ふと承れば御地を去る程遠からぬ何とか申す地に虎列拉患者發生せし由お心弱き母上には殊の外御心配遊ばされ勿躰なくも其許の御身に恙なかれと老いのおからだをも厭はせられず鎭守の社に朝夕御日參遊ばされ候。

別便の袷と羽織とは母上と二人して漸く昨夜出來上りしもの實は今年も裏の柿の實少々御送付申す筈なれど時候柄母上の御注意により見合せ候。

秋の夜寒に寢冷して風邪になど冒され給はぬ樣、まだ申したきことは澤山有之候らへ共先づ之にて筆を止め申候。

（評）溫情、紙面に溢る。

秀逸

書簡文

○京の友への返し

赤坂　青木勝子

御手紙嬉しく拜し候、仰せの如く落花の夕村の土橋に手を別ち參らせてより、早や幾月、君はしも西に妾は東、されども心は朝な夕な同じ故鄉に彼の邊り徨ふものをと、いとゞ御懷しさに堪へず候、時折は思ひ出してよとの御言葉、さりとは御怨みに存じ上候、籬に寄り添ふ朝顏の露の乾ぬ間も忘るゝ時とて御座なく候ものを、まして新しき友に吾を見代へなどの御仰せ、不束なる姿を斯く迄に思ひ給ひてかと飛び立つ許り嬉しくも亦、餘りに水臭きお思召しよといと情なうも覺え候ぞかし、未だ都馴れぬ勢か何事につけても空恐ろしき事許り、敵となり味方となるも、優しくされ痛くさるゝも、皆利を追ひ譽れを競ふ世の人が繰る機關と見うけ申候。目に見るものは黃金の光、耳に聞くものは榮華の樂、若き乙女の血湧かざらむとするも得べからざる有樣には、師の君が御口には道の敎へは絕えねど、又敎へ子が耳に德の訓しは聽きつれども、心に畫く富貴の浮べる幻は、日夜に絕えず彼等の靈と肉とを蕩盡して、目前の歡樂は醉へる彼等を益々深きに溺らしめ居申候、羨しきは御身の上にこそ、風流閑雅の地、幾世盛衰の歷史は生ける敎訓を與へて、訪はんに山淸く語らむに水澄む、松籟は靈を安め、溪韻は肉を慰め候など、更に友なきを憂ひ給はぬ御身の偲ばれて、いとゞ懷しさにすゞろ秋風の冷たさ身に泌みて覺え候、何卒返す〳〵も御身大切に御勉强被遊度、何處にあるも修業の身の上、妾も殊更身を縮めて學びの道をいそしみ申べき程に、せめては其れのみ待たるゝ、御許樣の御音信、時折は都の空に飛べよかしと祈入候、先は御返しまで

かしこ。

（評）情あり、愛あり。

夜　豊橋　伊藤りき子



○姉を待ち兼ねて（故郷より）

羽前　杉葉女史

お荷物のみ早やう送り越しなされ候て、何時御歸省遊ばさるゝ事にや、「今二三日中には屹度歸る心算にて候」と、申越され候てよりも、指折り算へ候へば、今日と云ふこの十五日にまで早や六日、丁度御約束の倍の日夜を過して候。

それも何彼れの御都合にて候べきものと、餘程心靜かに御待ち申居り候へども、御荷物に添へての御便りには「この荷の中には母様とあなた様とへの、珍らしき土産の品も澤山包み込め置き候……」との事故、只々嬉しう一時も早やく頂戴致したきものと、思ひ居り候へども今に姉様の御歸りなく候へば、それのみ待ち侘び候て、一日も倚千秋の永き心地致され候、されば姉様、何卒一分時も早う御歸り下され度、それのみ樂しみに待ち居候、かしこ。

（評）思ひかれての文字。

○囚の身となりし弟へ

千葉縣　田村とし子

今は秋の風情の日毎に加はり行く最中に候。

故郷の野は、山は、夕べ淋しく吹く秋風に包まれて、小萩の花や、女郎花の花、果ては道邊の數ならぬ小草に至るまで、皆、思ひ思ひに此の世の秋を飾り申候。

さるにても弟よ、夜寒のこの頃鐵窓の下に、如何なる夢を結び給ふぞ、姉は山寺の鐘の淋しく響くを聞につけ、夜毎草葉にすだく虫の聲を耳にするにつけ、御身の事、思はぬ日とては、たゞの一日もこれなく候よ、日頃病ひ勝なる御身故、もしや變りし侮に、食物に、病の出でもやせんと思はれて、今日此の頃の長き夜を微睡む暇もなきまでかよわき胸をいため候よ。

今さら思ひ返しても及ぶまじけれど、樂しかりし去年の今日此の頃は、はらから打ちつどひ、秋うらゝかに晴れ渡る日を、花野に、山に、面白く、將た溫く遊びさまよひたりしを、今日は醒めて儚なき越し方の夢となり了りぬ。

御身こそは御身のみは、前途蒼々たる海原も、見事渡航すべしと思ひし姉は御身を誤まてり。

あゝ心なき弟よ一婦の爲に、多年の宿望までも塵や、芥と地に捨て、加へて、遂に人の世の暗きに囚の身となる……あゝ何たる悲慘の極ぞ弟よ、此の姉は今さら泣くに涙なく候よ、其かみ、冬の夜の寒さも意とせず母上とも〳〵夜の目も寢ずに縫ひたりし衣は、學費は御身を鐵屋の人とせまほしくて送られしにあらず、不如意の中から何かと心を、くだきて、送りたりしを、さるを思ひ給はて、酒に女に、あの學費をなげ打ちて遂に囚の身となり了るとは、あゝ何たる事ぞや、如何に心の駒の狂ひたればとて、心の其處に至らざりしか、

奥市　井上さわ子

弟よ、あまりならずや、日頃姉が便りのつど酒色に心奪れな、と、便りの度に、面白からぬ筆のみ走らせしも、御身が身を思ひ廻せばこそなるを、あゝ思ひ至らざるばかりに、今日の失敗を招き醜を天下にさらし、けがれなき先祖代々の位牌にまで拭ふに術なき泥を塗り、併せて己が名も暗きに捨るの悲しき秋を見る、あゝ心なの弟よ、思ひ出せば、姉は此の身もきらるゝ様かなしく死するに勝るくるしみ致し候よ。あゝされど過去の事、幾度繰り返しても及ぶまじければ最早何事も申すまじ、たゞ此の上は弟よすべては人の世の奇しき運命と思あきらめて、必ず思うて甲斐なき煩悶はせぬものぞ、全智全能の涙ある神も此の世にましまし給へば必ず、よしなき事に思ひ煩ふ勿れさらば弟、さきくあれ。

（評）譏み責むる所餘りにくど〱し。



○商品の買捌を賴む

三重縣　菊花

御塲所柄ます〱御繁昌の御事とはるかに御祝ひ申上候さて東京の本店より新案流行の西洋小間物を三梱只今通運便に到着致し候東京よりの音信により候へば今年は紳士用として帽子と手袋に意匠をこらし物多く婦人むきにはショールとクロープとに新形が澤山出來候由兎も例の通り取りあはせて一梱だけ例の村山廻漕店より御送らせ申上候別に直段書は委細にしたゝめて梱の中に入れおき候まゝ何卒よろしく御吹聽を願上候今年は昨年にくらべて何れとも景氣よろしきやうに御座候に付自然と流行物の賣れ行きもおもしろからんと存ぜられ候それを見込に直段もずんと働きおき候何卒此上ながら萬事につけ一層の御引立を願ひ上げ候。

○運動會の實況を報ず

神田　吉田　辰子

愛子様先日は失禮致しました三十日に出した葉書ご覽なさつてせう？私今か〱と待ち申して居ましたがつひにお姿は見えませんでした何かご用がお有なさつたのですか？先生も「中村さんは見えませんネ」と仰っていらつしやいました私は一日の夜は特別永いやうな氣がして早く夜が明けるやうにと祈つ

て居りましたのけれど若しやお天氣が變りはしないかと其れも心配して居りましたても翌朝起きて雨戸明けた時の嬉しさ思はず萬歳！と叫びました其の聲が高かつたので眼がさめたのか矢張り嬉しくて寢られずに居たのが床の中で姉さんお天氣好くつて？―と妹が聲をかけましたから私は早く起きてご覽今太陽が昇るとこよ」といふと妹は寢卷の儘飛び出して來ました其の時丁度庭の樹を一ト洗ひして冷たい風が吹いて來たと同時にブル／＼と身振ひがしたので氣づいて見ると私も未だ寢まきの儘だつたのですそれから家を出る迄大騷ぎして漸く學校に行きましたマア私運動會の有樣をお知らせしやうと思つて自分の事計り云つて居りました許して下さいネ去年はあなたもいらしつたてせう彼の頃盛に建築して居た新校舍は實に立派になりました私等も一ケ月ても彼の奇麗な敎室で敎りたかつたと思ひましたの會場は新運動場で周圍は紅白の幔幕でかこはれ東側に來賓及び父兄席と校醫の出張所並びに休息所とが設けられて外總べては昨年と同じてす私が行つた時は既に競爭は始まつて居ましたが卒業生は皆て十數人てした先づ私が見たものゝ中て最も感じたのは高三四女の球竿體操で凡そ五六十名の生徒が一人も違ふ者はなく實に美事てした同じく競爭は看護婦競爭とか云ふので赤十字の印した生徒が前方十間計りの所にひかへて居る生徒に繃帶して共に走つて來るのですが或方は嫌らしい競爭と云ふていらしつたが私は女子のとしては優美てあるやうに思はれました是ては千代子樣のお妹が第二等てした。

此外にも種々面白いのがありました又尋一の生徒が鳩ポッポや雀鳥などするのを見て父兄席から異句同音に彼んな小さいのを世話するのだからと云ふやうな感歎の言がたま／＼聞えました私等も其の一人だつたのですネ而して在學生徒全部の競爭が終ると今度は卒業生てす徒競爭の筈てしたかスプンをしました增田さんが第一着らしかつたのですけれど決勝點に約十步計の所て鞠を落したので三番に來た中島さんが一等田中さんが二等て三等はありませんてした私などは半頃て宇田川さんとつき當つて二人とも落してしまつたのです。來賓はなさる方がなかつたので直ぐに先生の提灯競爭て女先生の方は途中で消てしまつて入等した方はありませんてしたが男先生の方は終りから三番てあつた塩川先生が第一着で外の方は矢張り消してしまつたのです中には是は蠟燭が惡いのだなど〻仰る方もあつて中中面白うございましたそれから高女全體の遊戯に尋三以上高四迄の男子の徒手體操があつて後各々賞品を授與され校長先生が閉會の辭を述べられて明治四十年の大運動會も芽出度終りを告げました是に時を同じうして砲聲數發連々として天地を動かしました私もお陰て日頃の憂を全くぬぐひ去つたやうな氣がしましたが唯遺憾だつたのはあなたがいらつしやらなかつた事て山田さんや久村さんも來ていらしつたのてすが餘り親しくない方々なので…あなたがいらしつたらどんなに愉快だつたでせう然し終日樂しく暮しました是てはまだ誠の大略なのてすが餘り永くなりましたから詳細は御面會の上にゆづゝて筆を止めますさよなら。

新歌謠

蝸館局 選評

二等 ○ お伽噺の小人の老爺がひよいと出そうな森の奥　徳島縣　花びし

三等 ○ 姉と妹の宵寢の姿どちが星やら菫やら　本所區番場町　磯野登子

四等 ○ 關東地方て綿採る頃は蝦夷じやちら／＼雪がふる　石狩　愛花操子

五等 ○ 百合の畑で燕がとべば雀まねして横にとぶ　播磨　孝壽愚女

秀逸

○ 書いてみたいよ綸絹をのべて秋の七草なゝいろに　四ノ宮　森井せい子

○ 燃ゆる夕陽に千鳥を分けて鯖の釣舟帆を下す　小樽　のぎく子

○ 戀し白萩なぜ散り失せた秋の蝴蝶を置き去りに　筑前　八千代女

○ 立ちて見たいよ數多烏鵲の橋を渡したまんなかに　周防　谷美津子

○ 紀州九鬼浦ちひさいけれど鰤の大漁に名が高い　紀伊　西山ひさゑ

○ 秋の景色を小袖に仕立すそは千草の露を置く　磐城　片寄しな子

○ 立田姫御の化粧の粉の殘り投げたか今朝の霜　日本橋　三ッ森ゆき

○ 日光けごんで學生死んだうちの筧て鮒しんだ　小草子

○ 今宵滿月虫鳴く庭でテニス仕樣か歌よもか　秩父　近藤登久子

○ 虹の七色繪の具に溶かし師の姿を描きたい　京都市　吉田しづ枝

○ 今年生れた新大豆さへも炙れば踊りて帶〆る　秋田縣　大越ひて子

○ 灯影チラ／＼岩屋に見えて千鳥通ふよ淡路島　神戸市　加藤不美子

○ 思ひなしにか夕空見れば泣いてわかるゝ雁もある　安房　ゆき子

○ 山の背に來て葡萄づるたぐる熊の唸りや秋の風　北見　孔雀女史

○　北見　氏橋鶴江女
赤い襟の姉妹三人歌を揃えて朝仕事
○　京都市　靜枝女史
秋の鐘には泣く人多い心して撞け寺男
○　西多摩　森田なか子
紅葉慕ふて高尾の山を知らずこしたよ一里半
○　長門　中津江照子
聞て名高いあの大橋を渡りやすぐさま萩の町
○　下野　牛塚妙月
都好いとて何に行かれませう老いし母君居ますもの
○　京橋　今泉磯千鳥
罌粟の花とは美し名のみ花の心にや毒がある
○　門司市　淵吉雪子
京へ八里の山里なれば瀧の紅葉の盛り時
○　大和　花莚潮
切れはせぬかと苦になる電話暫し返事の絶ゆる間も
○　長岡市　土田りた子
ほたるとるとてどぶ中へおちたほたるにくいやにげてゆく
○　長野縣　町田さみ子
山と山との間だとても隙なくよな時もある
○　豐橋市　伊藤りき子
森の小道に白鷺むれて雨後の山路に虹がたつ
○　南總　齋藤秀子
秋の百姓は田の圃中て稲を刈るやらかつぐやら
○　靜岡縣　青木靜女
沼津宇道三島へ一里靜岡縣道の相の宿
○　門司市　松永なか子
寺の紅葉はまだ色づかぬ内の黄菊は今朝さいた
○　千葉縣　深山千鳥子
桃は三年で實がなるけれど私しはいつごろ花が咲く
○　宮城縣　千葉よし子

春子さん程美人な方は村に二人とありやせん
○　大阪市　冨谷ゆり子
花にくるんだあの島戀ひし千汐滿汐唄の聲
○　讃岐　谷間の姫百合
わしの村には巡査はないがたつた一人の夜廻
○　三河　十六女
私はお醫者の書生でござる末の目的產婆です
○　南豐島　の戸
春のお供をしてきたつばめ秋の實りを見て歸る
○　栃木縣　千葉夏子
聞いて見たいわ十五夜月にかぐや姫御の御話を
○　京都市　小島てつ子
愛しや大原女雪降る朝も花よ花よと賣りに行く
○　京都　辻愛子
比叡の山中に住む少女子は露でかへます化粧水に
○　近江　新井せき子
花の都は電車も通る私が故郷にいつ通る
○　筑前　高松秀代
親のない子は哀れなものよそめてやりたいこの袷
○　磐城　遠藤寧子
山の女神の嘆息にふれて咲いた巖根の鹿の子百合
○　和歌山　池田しげ子
露領日本領をハンモックで結び蜘蛛は瀟灑としやれてゐる
○　北海道　三宅みめ子
馬を泣かせた天龍大井今じや鐵橋汽車通ふ
○　沼津　渡邊とよ
風の間に〳〵琴の音聞いて駒を早める嵯峨の奥
○　徳島縣　四野恒子
蜘の細糸紅葉で染めて機織虫に織らしたい
○　美作　品子
虫は鳴きだす子供はいそぐおしや此の機今二尺

○　上野　羽衣
わたしやお嫁に行く時ほしい月の光のやうな櫛
○　紀伊　失名子
奈良て名所は猿澤池よ水に影ある三笠山
○　北見　氏橋鶴子
駒の手綱を片手に少女後ろはち卷なは鄙
○　和歌山　池見すみか
みともないけど妹お國學のお陰で嫁づいた
○　大阪府　有瀨もと子
嫁女可愛や椒聯歌が大分上手に成つたとや
○　羽前　今　文子
花が咲いたら吹くなよ嵐吹けば散ります實がならぬ
○　大阪府　寺田秋子
わたし十八田舍の娘銀杏返しに白菊さして
○　京都市　山口愛華
内の兄さん綸絆を折つて今じや牛飼羊飼
○　京都市　西田花差
末秋小萩のみだるゝ中に捨てゝおる鎌朝の露
○　陸前　秋山もゝよ
わたし白萩一ばんすきよつらい時にはなぐさめる
○　秩父　紫雲女史
今年豐年黄金の風が野から山から吹いて來る
○　神戸市　久野のゑ子
お金ためては是非行き度いよ四十五年の東京に
○　信濃　太田壽志子
簾絹さかれて秋姫樣は力なくなく霧の奥
○　愛知縣　内山ふみ子
黄菊白菊眞紅の色もお針遊びの道に咲く
○　大和　梁山　泊
秋に世に露ふきこぼす秋の最中もはや過ぎた
○　佐世保　いちじく

淡い白雲透して見れば紅の透綾か夕紅葉
○　津市　榊原みさを
愛しい幼子を背中に負ふて網引く海女を照す月
○　廣島縣　國信　操
空はコバルト野山は紅葉里の流れにや落葉舟
○　備中　篠原しげ子
姉と妹の二人の讀科壁に朝顔の目をさます
○　千葉縣　高瀨春子
戀にやつれし蝶々の息か野邊に冷たい秋の風
○　山梨縣　千　勢子
石の地藏さんさぞうるさかろ尾花ひた〳〵顔なでる
○　千葉縣　入木操子
星の花降る御空の原で神のさゝやき聞かまほし
○　羽前　杉葉女史
舟に似た雲今月姫を乘せて渡るや天の川
○　北多摩　野　菊
なつて見たいよ姉さんのやうに可愛赤ちやんの母さまに
○　栃木縣　磯みい子
わしは紡績會社の工女哉岡木綿をさらす役
○　仙臺　乳深はつれ
私の兄樣俳句がお好きいつも雜誌に投書する
○　長野縣　宮坂　すみれ子
天津少女の御魂が宿りひくか小琴を磯の松
○　伊豆　上原露子
私しや田舍で文字は知らぬ破れ着物でやまに行く
○　波島　森野紫袖
白い帆かげは見る〳〵遠く君の姿も消えてゆく
○　彦根　日比花月
秋が來たとて何さわごうぞ袷綿入皆縫へた
○　岐阜市　鎌田とみ子
なんぼかくしても身の生業は其身そのみにあらはれる

評論文

文學士沼波瓊音先生選評

二等　○呪ふべき自然派

群馬縣利根郡久賀村須川町三九　森下うばら

此の一年ばかりに、文章界の動搖は驚くべきものであつた、所謂自然派の先輩は勿論、中ぶらりんに浮て居る新進作家や、投書などして嬉しがる自稱詩人に至るまでも、解つても解らなくも關はず、何でも寫生的な告白的なものを書く樣になつて來たのは事實です。そこで私共が考へるに、かく動搖するのは進歩、即ち讀者の眼が肥えて、從前のやうなコッテリした空想で出來た者に慊らぬからで、少くとも讀者全般に、我が若し此場合に出逢つたなら――と、其作物の人物と客觀した自己との比較研究を、樂むといふ思想が朧氣ながら湧いて來たに違ひない、其邊から察すると文壇の此の傾向は喜んでよいと思ふ。併しよくまた考へてみると、この新興文學にも隨分缺點がある、第一文に潤ひがない、たゞ挑發的な文字の行列だ、雲の峰をみながら廣い河原をゆく樣な氣はしても、そこに淋しく咲く撫子の匂は出てない。どの作を讀んでも、奇拔なことを書いたなとは思ふけれど、嬉しい樣な悲しい樣な感は少しもしない、皮相ばかりを描いて内心を作るからである、上調子な説明ばかりで、しんみりした會話を省くからである、それで人生の神秘に觸れてるの何のと、噪いだところが仕方がない、全く觸れないではないけれど、それは作者のやうな神經衰弱連のみる、獨斷的な人生ではあるまいか。だから一部の人は喜ぶかも知れないが、強健な意志と、完全な身躰とを並有する、眞面目な紳士や婦人の一顧をも買ふことは出來ぬ、これがまづ缺點。それから現今の作には、從前の作家が好んで書き、また讀者も好んで讀んだ意氣と清淨な愛との代りに、誰も彼も舉つて姦通を書いたり嫉妬をかく、女が生意氣で男が泣虫の癖に自矜の強い奴、どちらが男か女か解らない、その上女に振られてやけになつて肉慾に耽る、どうも恐ろしい樣です、これが若し世間とすれば、婦女子は一日も男子に賴れない、それから婦人ですが、あんな性格の者はまづありませぬ、これも作者

が周圍にあつた中の最も品性の下劣な女を寫したものと思ふ、いくら世間が自墮落になつても、まだ作にある樣な獸性な人間はあるまい、新奇を喜ぶ世人の出來心を、これこそ眞の人類が叫聲と誤つて、姦通をかき獸慾をかき、甚しきは同性の肉交までも書いた、作物は一面眞面目な自己でなければなるまい、あんな者を書いた作者は、よく白晝歩けたものだ。生慾の力といつて、人世を支配する重なるものだとは聞くも、もつと大きい夕！要があり愛がある、肉慾ばかり描くものは犬猫にも劣るものといつてよい、これが爲に無垢な子女を陷れ、貞實な妻を泣かし、これは我が告白だと公にしたところ、一時の喝采で終生の不幸を買ふと擇ぶことが出來ぬ。私しは小說で世を敎へよとはいはぬ、何となれば人生そのまゝなのが小說で、善榮惡亡の理に反くこと多いのが人生だから、けれども病的な自分だけを描いて、これが世間だと僞る作家の圖々しさを憎む。

この分で進んだら何を書くか分らぬ、かくては折角得た勢力は衰へて、矢張理想派が歡ばれ講談物が迎へられやう、これは所謂自然派の爲に惜む所である。（喜びの時呆れる時、人は同樣に驚嘆する、）この一言を敢て新進作家に、私は謹んで贈らう。

（評）自然派の缺點一々、子の言の如し、片輪の作家、片輪の讀者、罵り、呪ひ滅ぼすべきは彼等なり、此文近來の痛快文字。

四等　○誠實

京都　小笠原　あき子

購ひ來りし仕入物が吾等を失望せしむる事は常に經驗する處なり、吾等は嘗て一片のお世辭に依りて滿足を感じたる事有りや無しや、輕浮只口先ばかりなる說敎が少しの感奮をも心靈に與へしを知らず、宗敎にまれ文學にまれ美術にまれ敎育にまれ事業にまれ、眞摯無きものは、何等の有り難さも、尊さも、信仰も起るものに在らず、去れど鄕里の親より贈られし羽織の紐にさへ感謝の念の禁じ得ぬは何故ぞ、妹へ土產の短かきリボンをすら夢に見る迄喜び呉るゝいぢらしさは何が爲ぞや、友よりの音づれに謝し、貧者が一燈の美擧に打たれ、熱淚に充てる說敎に渴仰し、心血を灑盡したる文學美術に極み無き感動を受くるは何に依りて然るぞ、是只、誠實の致す所、誠實無くして生命有るものは無し。

擧世唯、功利、浮華、輕佻なぞと、宛然、腐肉の蠅を抱くが如く呼ばるゝは、是れぞ誠實なく、熱誠なく眞摯無きが爲のみ。見よ、富の榮は永遠の力に在らず、賢者の智も深秘の前には光なく、勇者の武も死の運命

には抗し得ず、凛として千古動かず、永劫に消えざるものは只誠實の命のみ、國君の爲に動きては忠となり、人類の爲に盡しては救世の偉業となり、婦德に現はれては貞操節義の美をなし、藝術に滴瀝しては神技を揺す、親子の情に、姉弟の愛に、朋友の信に、この心を棄てゝ、克く其正道を求め得じ、人もし是の心を以て心とせば、謙讓の德も積み得べく、慈悲の溫情も得べく、各本分を守りて、天職を完し得べく、世には功利、浮華、輕佻など、有ゆる不德は失せて、旭日うららに照る如き純潔の天地は、再び曙光を此の時に差し初めん。

（評）讀者をして襟を正さしむ。

秀逸

○刹那

小石川　未成女史

勝敗は刹那にあり。勝敗に至るの徑路は大抵普通なるものなり。一律なるものなり。是故に吾人若し他人と勝敗を爭はむとならば、宜しく刹那の小時間に着眼せざるべからず。區々たる小事たりと雖も時に或は畢世失誤の因たることなしとせず。再言す、刹那のタイムは至微至細なるものなり而かも勝敗の決が此所にのみ潛むものとすれば、豈戒むべきことにあらずや。坂に車を押さんも、勞する所に勞し、憩ふ所に憩ふ、坂頭に達するまで、諸人均等の働のみ。然りと雖も坂頭に於けるの刹那が、乃ち兩者の岐るゝ所にして、此の時力量足らざるもの徒らに後戻りすべく、力餘るものは難なく先登の功を擔ふべし。向學の人の多くは、刹那の關門にまで達するの苦積精勵を敢へてすといふも尚且つ最後の勇を奮ふものは些し、抑も慨嘆のことゝす　普通人の爲す所をなし、偉人豪傑と比肩せんとする本より間違ひたる望にして、出來能はざるは論を俟たず。苟くも超凡の擧を敢へてせんとならば、當初より超凡の覺悟なかるべからず。是に



書齋　豐橋　加藤芳子

由てかよくその大望は達せらるゝなり。實に刹那は凡俗の到底氣付かざるところにして而かも偉人たり豪傑たらむとする者の忘るべきものにあらず

（評）好識。

○機を論ず

小石川　山崎房子

如何に名作と雖ども讀む其の人を得ざれば世に現れず、耶馬溪如何に奇勝なりと雖ども賞する其の人を得ざれば天下に現れず、即ち好く讀む人あり、賞する人ありて初めて名作と爲り、名所となる、乃ち好機に會したる也。あゝ機や逸すべからず。

雖然只安閑として機の至るを待つと雖ども、自己の手腕を磨かずんば折角來りたる好機に會すること能はず、世人よ、機の至らざるを嘆く勿れ、機はいくらも地上に横はれり、川に臨んで魚を羨むよりは寧ろ歸りて網をあむに如かざる也。

（評）機を得れば樂天となる、得ざれば厭世。

○仁俠

名古屋　伊藤きみ子

仁俠は人の貴ぶべき美德なり、積極的慈善の發せるもの即ち仁俠なり、抑も人の世に生るゝや運命の神の寵兒となりて位人臣を極め、富に、慾に飽くものあり、轗軻不遇、志を遂せず恨を呑んて非命に斃るゝものもありて其境遇や千差萬別なり、而して榮華に耽る得意の勝者は兎もあれ、悲愴慘憺たる逆境に沈淪して不運に嘆く敗者を如何にせん、妻子饑を訴へて貧に泣く者あり、不具にして斷腸の思ひある者あり、噫、此貧者を救けて世に立たしめんとはせざるか、不具者を慰めて人世の趣味を喚起せしめんとはせざるか。

人として惻隱の情なきものはなしと雖も、是等敗者を見て袖手傍觀顧みざるもの多々あり、故に社會主義者起り、財產平等論を唱へ、暴動を企つるものあり、仁を爲すは人類に對する吾人の責務たり。

古來仁俠を以て名を後世に遺し、世人に崇拜せらるゝもの少からず、上杉謙信は村上義清の爲に武田信玄と兵を交ふる事十數度なりき、佐倉宗吾は萬人を救はんとして、妻子と共に犧牲となりて其命を捨つ、共に其志を果さゞりしと雖も、世人其德を謳ひて神に祀る、石川伍右衛門は大賊なりき、然れども彼が貧民を救けし事少なからざりしを以て、後世多く彼を罵らず。

膂力の多き素より婦女に望むべからずと雖も恐るゝ勿れ、金力無きを以て憂ふる勿れ、見よ目に一丁字を知らずと雖も能く之を成したるものあるを、孟軻曰はずや、仁者に敵なしと。

（評）温かにして強し。

○忍耐の説

愛知縣　小島幸子

凡そ事をなし遂げんと欲せば必忍耐力なかるべからず何をか忍耐力と云ふ其怒るべきを怒らず悲むべきを悲まず能く艱難に耐へ辛苦を忍び百折撓まず萬挫屈せざることを云ふ人若し此の忍耐の心なきときはたとひ細小なる事業と雖も能く遂ぐることと能はざるなりかの二宮尊德翁の大事業「コロンブス」の亞米利加を發見し又米國の獨立して英國の羈絆を脱したる等皆能く此の忍耐を保持して以て成功せしものなり彼の蜘蛛を見よ木を攀ぢ枝と枝とを柱として日夜孜々として經營し其功了れば風雨來りて此れを破る破られて復結ぶ其心事百折撓まず萬挫屈せざるにあらずや況や萬物の靈長たる人間に於て遠大なる事業を企て苦難の爲め半成にして止むるもの少からずや豈蟲類に恥づべけんや。故に人宜しく遠大なる事業を起さんとせば確固不拔の精神を持せざるべからず蓋し人たるものは何事をなすにも忍耐力ある者にあらずんば功を成し遂ぐる事能はざるものなり。

◎哲學を論ず

廣島縣　國信操子

哲學は學ぶ可からざるものにして又、學ぶべきものなり、學ぶ可からざるものとは如何、曰く、現今の自殺者を見よ過半否七部分はみな哲學をまなびたるを以て此處に千古の疑問を起し、その、實否を試みんために自殺を計るにあらずや。自殺は一種の大罪なり、此の大罪は、哲學によつて生れ又、哲學によつて消滅す。學ぶべきのものとは、即ち、泰西の諺に曰く『人生の最大要務は死亡の準備なりと』此の言あればなり。人、死して魂何處に迷ふ、是れを研めんには哲學によらざるべからず、哲學によつて此の疑を晴らせるものを眞の哲學者と云ふべし。

◎働

栃木縣　加藤もり子

人生は働きを以て第一とす、働なき者は死物なり、人は小天地なり、天に日月あるは、人に兩眼ある如く、地に皮膚あるは、體に皺波あるが如く、草木は恰も毫髮の如く、河流は、尙汗涙の如し、而して天地常に活動す、豈ハ活動せずして可ならん哉、人は呱々の聲を擧げてより、競爭せずして、一日も世にある能はず。社會に、安逸を宿るべき寸隙なし、欲するも、欲せざるも、一度は、社會の、競爭場に引出さるゝなり。されば、所詮、競爭は、免るべからずとするか、滿身の氣力を振作し、勇敢に働くべし。さるを、世には、働かずして、快樂を仰望するもの多し。然るに、快樂は空なり、假に攫むべからず、摩擦よりして、生ずる電氣なり、感ずるには、難からざるなり。されば、假に、快樂を、得べけんや、終に、一生を有耶無耶に看過するものあり、考ふるに、快樂は働く者の手によりて、永久に占領さるゝなり。凡て、働かずして、快樂を得んと、するものは下に位し。働の後に、快樂の來るを豫想して働く者は中にす。働其物を以て、快樂と、するものは、上に位するなり。西哲曰く、「怠惰は世界に於て最も奢侈物なり」と、宜なる哉、宜なる哉。

短文

編輯局選評

二等 ○あの森

德島縣三好郡西井川村小山田方 水口敏子

東町の場末の白堊は町の寺です、それから二三町北に私が幼い頃遊んだ鎭守の森があるのです、あの森こそ青春の夢を繰り返した處で、戀も空想も涙も詩も皆あの青い森の中にあるのです。

森の神秘

三等 ○筑波山

茨城縣 齋藤もと

筑波山は一日に七度色が變ると申ます、朝日の出る前には濃い桔梗色で眞晝が青、而して日が西にかくれる頃は上の方が淺黄でだん〳〵薄くぼけて丁度裾模樣にでも有りそうな色です、此の外の色は知りませんが晴れた日には私必ずこの三色を見ない事はありません。

眞の寫生

四等 ○雪の山家

岩代國伊達郡小島村 菅野和子

下僕に負はせて淸ちやんを小學校へ送迎へするのが大仕事、冬籠りの準備は既に出來てをる、別に町に買物に行く必要もない、町へは山路三里。米は六俵、豆二石、大根十駄、芋三室、鹽も買つて置いた、上戸はなし甘酒を造らう。近年稀な大雪、榾くべて昔噺。

吹雪、人を捲く

五等 ○時計

陸中膽澤郡相去村 稗貫みつ子

私の村では役場と學校を除いて他に時計のある所は一軒もありませぬ然し役場では毎時別々の旗を出して時を知らせます一時には紫二時は赤三時は黑四時はだん〳〵五時はとき色六時は黄七時は白八時はあい色九時は草色十時はゑび茶十一時は牡丹色十二時は赤と白と入り交つたのてあります。

あい色は學校へ行く時刻

秀逸

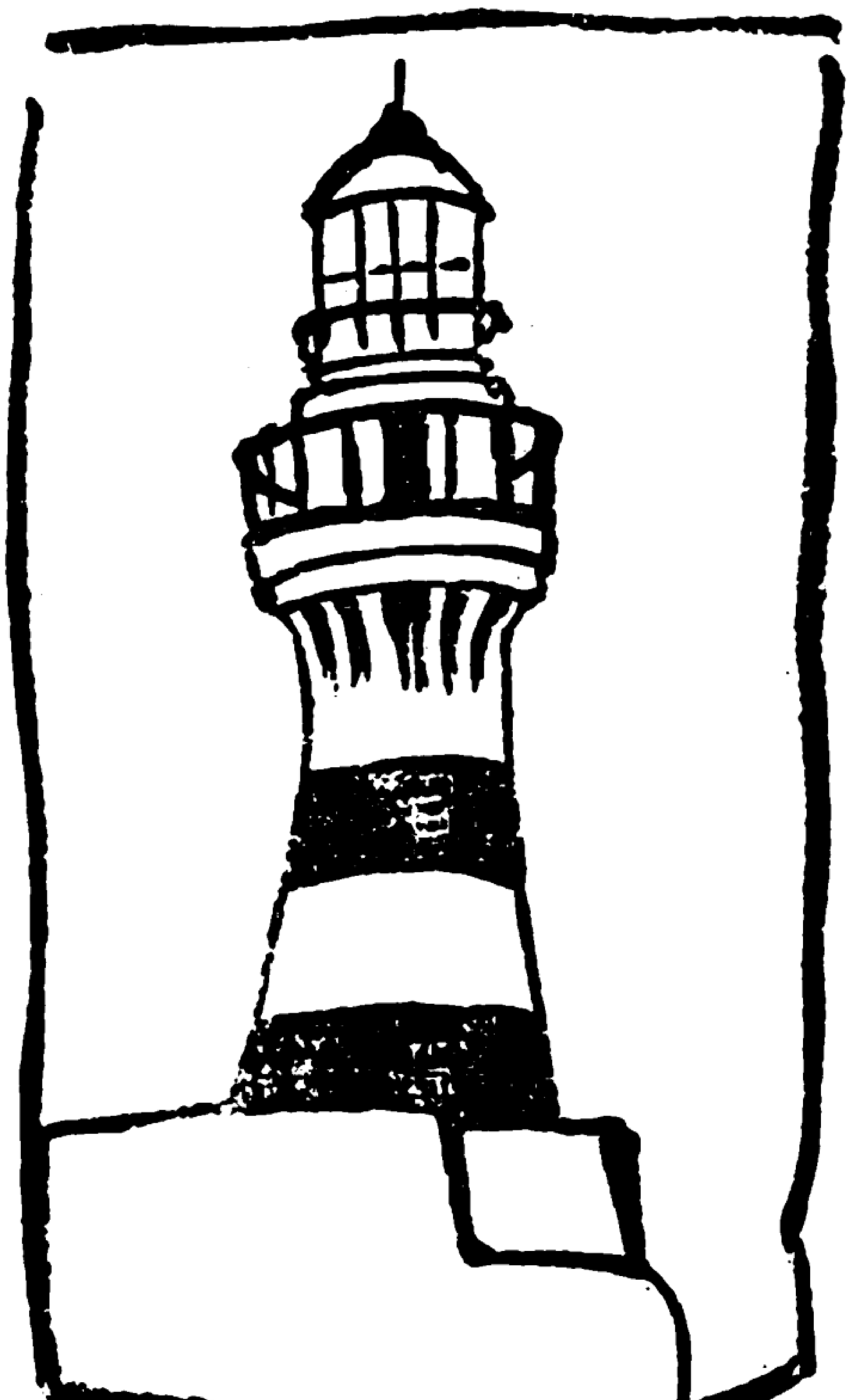
○雪風呂　　和歌山　操生子

私の地方は非常に暖いものですから、めつたに雪などが降ることはありませんが、たまに降ると皆な喜んで彼白い〳〵銀のやうなのを一ぱい入れて雪風呂をたきますが、それは又奇妙に夏の汗ぽを豫防する効があると一般に稱へられてます。

陸奥の風習、我國と自ら異る

○お乳の神様　　陸奥　山本直子

我が故郷の神官の屋敷にある、根は三里も延びてると云ふ、銀杏の木で、乳の形の實は二つさがつて居ります、其木にお乳の出ない人は、赤、黄、青等の布切をさけて御願ひ致します、それから又、女學生達も正月に年始に廻て、名刺が餘ると糸を附けて、結ひてくるのは例になつて居ります。



燈臺　下總　茂登子

人は神の醸せし乳に活く

○白壁　　伊豆　杉山野菊

少女は野に花を摘みて、老爺は山に薪を伐りて、一里の道を、日毎街へと賣りに出るのです。かくて五年、十年、百年と、親から子へ、子から孫へと……やがて建てられたる家並の白壁在所鎌田は富裕な村です。

停車場へ三里、役場へ一里

○はづかしい事　　豐後　ふい子

全く田などへ入つた事のない妾が、今年は雇人に交つて降る五月雨に唄聞きつゝ田植をしたのよ。するとねえ！今日此頃、漸く清い清い香を放つて瑞穂の出たのを見ると、まあ驚いた、妾の植ゑた所だけは、糯の田には粳が粳の田には糯が、所々飛白になつてるのよ。

手織の田植がすり

○花　　山城　むめ子

私は朝起きると必ず、裏の花園へ行くのです。色々

の花は或は伏し、或は仰いて小さい主を迎へます。あゝこゝへ來て如何してもわるい事は考へてゐられません、さんげして罪を亡したのは、何度てせう。かくて、私は日々花のために良い方へ導かれつゝあるのです。

人生、一日も花なかるべからず

○葵の上　三河　一子

私はほんとうにお琴とお能が好きてすよ、だからお母樣にお琴と謡とを習はして下さいつて申しますの、てすけどおきゝにはならないのだもの私どんなに悲しいてしよう、あのお琴にもお能にもある葵の上なんかほんとに好きよ、だからいつもお母樣にせめるのよ。

今に聽許さるゝ時が來るてせう

○冬木立　紀伊　北西さわ子

木枯が吹きおこりました。御堂の裏手を見ますと、立ち並んだ高い冬木が、枯瘦して力ない夕日をあびて、夕の空にから〱と枝鳴りがしてゐます。見てゐる私はふと僞の世の彩ある冠を地になげすてた、聖者のみ姿ではあるまいかと、そつと襟をつくろひました

自然に屈服す

○糊強き衣　本郷　千とせ

私幼い時分から糊を付けた浴衣は決して着ませんてしたが或る時婆が「糊のきかない衣服をお好み成さる方は乾度いくじなしの旦那樣をお持ちなさい升よ」と云はれてから何んだか私急に糊のきいたのが好に成りましたわ。

意志の鍛錬

○鳩　西多摩　森田貴代子

此間から飼つて置たあの可愛らしい鳩を、明日は料るんだつて仰しやつた兄樣が外へ行かれた後、私は何思ふても可愛想てならぬ逃したら兄樣に叱られるだらうと立たり居たり、まゝよ私は叱られても其鳩ぎり此鳥には一命にかゝはる事と、私は思ひ切て籠の戸を開けました。

此夜の夢の美くしさ

○カード帖　麹町區　野村光子

私は先日美しいカード帖を作りましたの之は私が幼い時から十五の春迄毎日曜日に戴いたカードを丁寧に保存して置きましたので美しい草花可愛い小鳥等の美麗な畵ばかり總數三百枚程です之を開いて見ると神樣のみ敎其昔師の君から伺たお話等を思ひ出し升のよ

日曜毎のカードをためるのは好い思ひつき

○薬と名　　和歌山市　妹背美代子

お父様は大學目薬で、お母様は美髪散で、佐世保にお在ての海軍中尉のお兄様は仁丹で、次の内に居るハイカラな兄様はゼムで、姉様は中將湯で、犬好きな弟は清快丸で、五ツの妹は淺田飴で、私はグヂリンて下女の淸は次亞燐。

お母様は又實母散とも云ふ

○大銀杏　　仙臺市　岩田よし子

古い事千餘年宮城の原の端にございます、そして乳の様な物たくさんさがつて居ります、其の下に御宮もあつて、乳の出ない人は其の銀杏の神様へ御まゐりをすると出ると云つて、御まゐりをする人がたくさんあります、そのためか近所に一二軒茶屋が出來ました。

凡そ物、千年を經れば靈ありとか、又云ふ偶然にも本誌には二つの同じ銀杏談を聞く

○ぬきがき　　大分縣　やま川

小說にせよ詩集にせよ手あたり次第讀む時に、心に面白しと感じたとは書き寫すのです、こうしてをると知らず〳〵のまに作文が上手になるてあらうと思うて。

一册一册又一册、積んで山なす頃には天晴名文家となる

○この秋　　羽瑙　笑花賤女

私の宅は只の一軒屋て、前には大きな山毛欅の木が、一本茂つて居ります、此頃私が學校から歸ると直ぐその下に行つて、冬の夜お伽噺のお慰みの用意にと、其實を拾ふのてあります。

我等未だぶなの實の味を知らず

○火の井戸　　越後　日下きよの子

昔しより越後七不思議の一ツとしてありました、火の井戸も、天然瓦斯とて今は此處彼處に用ゐられ、私も今は此不思議のめぐみを受けて生活して居るのてあります。

科學の力

○牧之原　　靜岡縣　近江くに子

南北へ細長き牧之原、茶の名產地なので一面に茶樹が植られてある、東に向へば伊豆山がかすみの様、南は遠く太平洋が帶の樣、西は小笠山のふもとまで一目に見へる、實に淸い美しい原に、私は每朝早くから白手拭を蝶々の様にかむつて、香り深いお茶を摘むのが務めてあります。

茶摘、桑摘、綿摘など皆風流らしい

○當選祝　　石狩　縮澤源子

兄さんが秀才文壇へ出した、短篇小說が三等、妾が女

子文壇へ出した、叙事文が四等、妹が少年之友へ出した短詩が地賞、何れも前月着の分へ當選發表されましたので、お父さんは喜こんで、餅を搗いてお祝をして下さいました、三人共一等賞になれば、餅を二俵搗いて大祝をする筈です。

大當り

○白菊の宴　　静岡市　平林たつ子

私の家では古から八十歳に達した老人がありましたら其年九月九日に必ず、知己の老人を招待して白菊の宴と云ふのを催します。其日には座敷を奇麗に掃除して床には尉と姥の落葉かきの軸をかけ、大輪の白菊を生けます。そして白髪の老翁老嫗がずらりと圓形に居並ぶのださうでございます。

其顔、皆の面に有たり

○水鶏　　栃木縣　磯　みい子

水鶏は七日七夜の苦心をして、一つの卵を産むのださうです、それ故私の方では昔からその卵をとるとお産が重いと云ふので、たれもとる人はありません、したがつて水鶏は安らかに育つ事ができますから、夏の夕方などにはすぐ前の川岸でずゐぶん大勢でなきます。

月が破れる

内のお婆さんがぞうきんを百さして置と火難にあはないおまじないだと申ますから私、小學校から歸つてから毎日一つづゝさして八十五たまりました、あと十五て百になりますから一生懸命さして居ります。

以て百疊の板の間を拭くべし

○琴　　駿河　松永しげ子

妾の家と菊子さんのお家とは、向ひ合て居ります。そしてどちらでも琴をひいたなら、直に返事の琴をひくときめてあります。妾は一曲奏で、琴爪をしまつて居ますと、優しい音が響いて來ます。障子をあけて「菊ちやん。」て呼びますと「お約束」と被仰います。

小說めく

○傳說　　羽前　杉葉女史

妾の地方では昔から栗の花が葉隠れに咲くときは洪水となり菖蒲の節句に代掻きをすると旱魃となり棟の實が多くなると豊作とか寒中雷が鳴るときには田畑に鎌が用がないと謂つて置きます今年も栗の花が葉隠れに咲いたので案の通り大洪水がありました。

此類多くは科學上の理由も伴ふ

○冷熱　　信濃　世良田ゆう子

私は鏝のやける内女子文壇を見て居ましたが、あまり身が入つた爲め忘れてしまつて、ハット思つて火から出しますと、まつかに燒け過ぎてゐました、しかたなしに灰の中に入れて又前の續を讀んて居りましたら今度は冷え過ぎてしまひました。

熱し過ぎるも、さめすぎるも若き日の胸

○お姿

佐世保　いちじく女

いつも本誌に記載になる誌友の姉樣方のお姿を、永久に保存しようと思つて、それを丁寧に切りぬきそして新しい手帳にはり着けましたら立派な寫眞帖が出來ました、そして表におすがたと書いてお友だちがいらつしやるたんびに妾の姉樣よと見せて自慢して居ます。

アート紙更に輝く

○二十五山

船津　金田幸

神岡鑛山で鑛石を採掘する山の中最も其重なる山は、二十五山であります、二十五山の頂巓には二十五菩薩が祭つて有りまして、此山は高き船津山の中最も高きが故に、風も無き麗な日和には、十餘里を隔てたる富山の海青く見渡す事が出來ると云ふ事であります。

二十五山、何ぞ其名のいかめしき



柿木渡し　豐橋　白井つな子

○母のいましめ

麻布　ひさし

お友達のたれかれがみな琴なげ出してヴアヰオリンを手にする樣になりましたので今日母さまに私にも是非にと御願ひ致しましたら「來年幾歲におなりてすえお嫁に行く樣なおなりしてヴアヰオリンが大切か裁縫が必要か考へてご覽なさい」つて申されました。

だつて音樂も大事だわ

○老音樂家

青森市　村林矢須子

白髮を丁髷に結ふた、七十近い盲目の爺さんが、町中を吹き廻はつて歸へるのと見え、いつも日暮になると尺八を吹きながら、私の家の前を、通ります。高く低くさゝやく樣に、又泣いてる樣なその音のいゝには、いつも知らず〳〵きゝ入ります。

○裁縫

鹽竈　片破月

女の務が數ある中に裁縫は最も大切だと思ひます、それで妾は人にまけぬやうに一心に裁縫をはげんて居ります、それに學問を立派になすつた令孃でも裁縫をいやがる方がありますが、私は其御心が知れないと思ひます。

○清い瀧　近江　兒島須賀枝

我家の裏の丸頭山腹に至つて小さい瀧がある、夏の日も冬の日も雨降る時、晴るゝ日も濁らず澄みきつて落ちてゐる、私は動もすれば氣の弛まうとする時は此瀧の常に消く休みなく流れてある事を思出して我と我心を刺激してゐた。

○十五夜　臼杵　安部富士子

御机の上にそなへた、御酒も萩の餅御茄子やつ頭さや大豆それに今年四つの繁ちやんも、御月樣のあがるのを今か今かと待てゐました程なく向ふの山ぎはが、ぱつと明かるくなつたと思ふと圓い〳〵御月樣が御待遠うさまと云ふ姿であらはれました。

○お祭　千葉　まつ子

今月の二日から三日間當地は大祭があるのてしたが先頃の洪水て屋臺も出さぬ樣になりましたそれて聞た小供等十三四を頭に八つ九つ位のが十四五人屋臺倉に集まつて引出そうとして居ましたが世話人等も何が動くものだと止めませんてしたらとう〳〵出して仕舞ました。

○慰安所　飛驒　光島雪子

妾の慰安所、教會堂でも社寺でもありませぬ。風呂の中てす。濛々として白き湯氣の雲か霧の樣に渦卷き上る中に、五分も沈思しますと、身は羽化して舞ふ天女の樣に思はれ、月のある晩なれば又一段てす。

○思ひ出　埼玉縣　水塚樂子

變世も變れば變るもの二十年前は小山川と備前渠との間の一圍ひ三十町步許の妾の家附きの田畑に百六十尺以上の烟突が六本立ちケルレル式の乾燥室やヘイドリヒ式の煉瓦の窯が出來山高の定紋附の土藏は物置と化しぬ去れど十數の汽船と小供の成人とが思出の種にこそ

○お正月と七夕　後志　三宅みめ子

私の處には松竹がありません只竹夫と松子が植木鉢の中に居るばかりなのですお正月七夕祭にはほんとに面白いのよ門松を立てる時金松と内地から物干竿にくる竹を切つて立てるのですそれから七夕には竹のかはりに柳へ短册を結んで平氣で竹に短册と歌ふて居ります。

○琴の音　和歌山縣　池田繁子

妾が二三日前から風邪の氣味て、褥に就いて居ますと床に立掛けありし琴も、淋しさうに塵を被つて、妾に「早くよくなつてたべ」と云ひたい姿をして居るやうに思はれます。妾はうつら〳〵として眠つてしまひましたそしてフト眼を醒したら、小鼠が二匹、琴の糸をコロン〳〵と鳴らして居ました。―(十月一日夜)

○田舍なまり　德島縣　西野恒子

もみ燒香り滿ち渡る夕、稻村の女の子四五人、の刈後てキヤツ〳〵と鬼ごつこして居る、すぐ傍の家では主人らしき五十餘の男四十二三の其妻にやあらん人と稻をすごいて居る、納屋の方では若い男姉樣かぶりの女ともみ摺つゝ樂げに面白き田舍歌謠つて居る、折から通りかゝりし二人の男ほんまに此家の嫁はんは聲がえゝなあ。

○油畫　廣島縣　勝丸りよ

私は油畫が大の好て西洋子供の油畫を四つ持つて居ます常の樣に並べたり散步に行きませうれえと獨言迄言つて遊んで居ますと何時の間に來たのか從兄が後に立つてくす〳〵笑つてるのですそして僕が來たら皆眼を見張てあつけに取られて居るじやありませんかと言つて笑つて居ましたお分家させようと二つ持つて歸りました。

○母樣　撫子

私の母樣は三年前に亡くなつたのよ、それでよそから又母樣いらしたの大變いゝ方で私達に優しくして下さるから弟と妹も皆なついてるのよだけども只お祖母樣丈はいつも母樣を惡く云てるの私それを聞くのが一番辛くてよ母樣だつて時々陰で泣いてゐらつしやるわ。

○大洪水

下野國　町子

妾の家は川端ゆへ洪水毎に許勞致します、今年はおもいがけらない大水でなつかしい女子文壇拾冊と其他沢山の書籍、又家と御分れさせられました。

○御田植

小草子

當地氏神様では六月二十五日に御田植がございます、花のようにかざつた小供が御田のくろに立つて苗をなげると村の人々は吾先にと走り出て多きも八九本少なきは一二本の苗を取つて悠々我家へ返ります、此苗を馬にやると病にかゝらぬと昔から申ます。

○妾の髪結

徳島市　河里子

人は髪かたちが一番だと申し升から美い顔は勿論醜い顔でも結方を注意して上手になれば善いと思つて居ますがまあ下手な事恰度流行の鬼で、れが上つたり下つたり致します。

○私の村

備中　篠原しげ子

私の村は三面山にかこまれて戸数百家ばかりある不便の土地でありますが未だ私の覺えてから一つの天災もなく人々のあらそひもなく誠に幸福な平和な豐かな村であります私は日本全國が皆殘らず此村の様に幸福に豐に平和なるやう祈ります。

○八作

長野縣　依田花園守

昨夜八公が來たので早速、十月の女子文壇の短文「新婚」を讀むで聞せた、すると節くれ立た手で頭をかき乍ら、媛様の御難に逐つちや、と怒りもされずさて嬉しがりは猶されずと様に苦笑したが、あの荒くれ男の面にも流石折からな紅葉を散して、洋燈の故か眸は異様に輝いて居た。

○秋の夕雲

周防　しをれ花

私はなつかしい故郷の事を思ひ出して流れ行く綿の様な雲を見つめると云ふに云はれぬ淋しさが起つて過ぎた昔の夢の様な歴史はひしと胸に浮んで獨り他郷の空に泣くのである。

○牛乳配達

廣島市　手島まさ子

一寸一走りと風呂敷持つて、青物買に三番町を急いで居ると、ねずみ色の冬服に岸と記のある帽をかむつた十一二歳の牛乳配達が赤ぬりの車を引いて此處へ來た、おゝこれも人の子……さぞ寒からうと紳士の姿は氣づかひながら間近くよつて其顔を見ればきつと締つた口元愛情に富んだ面ざし何處一點の申分がないが何としたのか愛くるしい目に露が一ぱい宿つて居つた。

○靜浦の一家

名古屋　伊藤きみ子

奇麗な金色の波を漂した夕日は西へ沈んで霧が一帯にかゝり日永岬の先には帆船二つ三つ、薄墨で一刷毛なでたように雲が一片！此美しき夕方の衣ヶ浦の濱邊には新妻のお里が夕餉の仕度をして、海を眺めつゝ夫の平次が歸りを待て居る、燈の明りは埋間を洩れて草葉の露にきら〳〵と

○月の夜

石狩　羽崎忠子

丸窓に月が照て、お庭の竹の葉が三四枚緒をつり下げたように寫つて居る、つと障子を明けるとぼかしたような遠くの山、黄金のような稲田の面を、十四日の月が靜に〳〵輝て居る、御庭の築山にある露の宮殿では虫の園遊會があつて、今音樂の最中である。

○夕の濱に立ちて

出雲　藤脇孝子

私は今熱海海岸の夕に小貝を踏んで立つて居る、ひた〳〵と波の咽び靜かに、潮の香を送つて、遥水天の間を流れた一刷毛の薄黒い影が、東の方から空を掩ふと、眞紅に燃へた水は紺藍と變つて、やがて名殘の光が銀のやうに輝いた。

○私等の學校

長門　中津江照子

私等の學校では、割烹の實習が月二回ございます。そして、ちようど一家とつひに、主婦やお客さんや、おさん、お給仕等を、くじて、それぞれ、定めます。此度、小豆のごはんにおつゆ、それとお刺身や、カツレツも拵へますのよ。

○日曜の朝　京都　失名氏

午前五時起床、直に東山の雜木林に散步す、裸體なる柏や樸、椎、栗の樹等いと寒げに朝風に打ちふるうを見る、總て四方の落葉をかき寄せて火を點ずれば、焰々として燃ゆ、斯くて少時の暖を取り、總て椎の實を拾ふ、快云ふべからず。

○澁柿　下總　越川つね子

昨日の大霜に、紅色に變化つた庭の一樹の柿の葉、樹は幾百年たつたのか、爺さんも婆さんも知らない、柿は澁柿だが、既う赤らんだ、赤らむと却々美味い、夫れを妾と妹と弟で食べるのです、が殘念な事には、毎年目白と鴫に大半食はれます。

○着物に仕たい　羽後　阿部花子

私の家の前庭に大きな楓の木が澤山あります、是れから漸々秋深くなつて龍田姫が美しい錦を織つて下さる時それは〳〵見事な事ほんとにこのまゝ私の着物に仕たいと思ひます。

○白蝶　小石川　山崎富士江

ある日私が展覽會へだす秋草の繪をかいて椽側へ干して置きましたら、それは〳〵美しい白蝶が二つ羽を休めて居ました。

○玉むし　仙臺市　三好まさる

今年三つの可愛らしい宏ちやんが、送つてくれた「玉むし」秋の日の心地よい光りを浴びながら、裏面に墨黑々と、明治四十年九月九日のうらゝかなる日、下仙のみやげにとて東都の我が初姪宏の君より送らる、と書いてある、筆の跡を見入つた時、机に向ひ給へる河井先生の未だ見ぬ面影が、あり〳〵と映る。

○私の願　京都　辻愛子

世間で三十三に出產した子は一生のかゝり子だと而も末は安樂な家庭を造る事が出來ると云ひます私は天地に一人しかない親身の母樣の三十三の子供ですねがはくば早く成人して樂しきホームを造り萬分の一たりとも孝養をつくしたいと思ひます。

○秋　若狹　塚本ふさ子

皆樣は秋は淋しと云はれますが、私は一年中で一番愉快な時と思ひます試に見よ、黃金色の稻城の門を入ると、如何な貧乏家にも米の二三俵は積んで在りますよ。

○渡舟　京都市　宮原みどり

淀行の渡舟が、彼此最終の客を淋しげに乘せて、ぎいぎいと景氣の宜い櫓の軋を殘しながら漣と銀鼠に寫された水の面を漕ぎ分けて往つた後から、漁火を點けたまゝの烏賊釣舟が二三艘暢氣そうに船唄を張り揚げて櫓拍子を摑へながら、這入つて來た。

○月の一日　京都府　有野坂枝

月の一日何と樂しい日ではありませんか、目出度いお正月も月の一日、市中の事は知りませんが私の村の習慣として、お年寄衆のお宮樣參りも月の一日そして特別に私の樂しい月一回の女子文壇の發行も月の一日、此樂しい一日を待つ御方幾人ありましようか。

○變移　山城　松田綾子

ゆく秋を書院の小窓そと押せば、わが先祖五代の據り給ひし榮華の敷地今は蒜繁りて、松蟲、鈴蟲、轡蟲が切りと鳴いてゐます、嗚呼世は變遷幼なき時味噌好きであつた妾も今砂糖好きとなつたのも道理で。

○故鄉　滋賀　撫子

私は故鄉が二つあります、第一は生れ故鄉で東京、第二は一年の半ばゝ雪に埋もれるてふ東北地方の一寒村、十年近く住み馴れた懷しい故國です、昔ながらの山櫻にほふ滋賀の里に、今逆境に立つ妾は、彼の第二のふるさと時代が戀しくて仕方がありません。

○冬の夜　岩代　嚴谷子

おゝこの雪の降るのにも月はよく出てゐることよ、然し朦朧として居る、雪は崩す樣背戸の柴垣を埋めてくる、身を切る風に瀨の音が聞えると思つたら二三羽川下へくだるのが黑く見えた。

○秋の夜　　大阪　倭文子

思はず絞る我袖の涙に月も宿れるか、と細い聲はヴアイオリンの音と共に止んで、秋の夜は再び靜かになつた月は愈よ冴えて星の數も少なう空に明るい、不意に何處の火の見盤にか、今日は見へ惡いナ、と彗星を見に來たらしい聲。

○兄樣のお墓場　　德島縣　野菫子

兄樣のお墓は里はなれし山根にありますそばには筧があつて水が細く流れてゐます其下には野菊が一本咲てゐて筧の雫になやめられつゝしほらしくうなだれて秋の夕暮の淋しさは一しほそへられてゐます。

○淡紅色のハンカチーフ　　大阪　幸子

昨日私は大事の〳〵ハンカチを川へ流しに行きました。兄さんのお土產に貰つたので色は淡紅色、香水まで滲ませて下さつたのですもの、どんなにか惜しかつたでせう。けれども、肺病で死んで行く友が、あゝよい香だつて嗅いだのですから、私は、あきらめます。

○菊　　神奈川縣　たつ子

私の大好物は菊であります每年家では父が菊をつくりますそして其の殘りを庭の隅へ私が植ゑておきますと父の花より私の方が美しく咲きます今日も三つ四つ花が開きました。

○手向草花　　丹後　鹽見千代子

表は淡桃、裏は白の紋縮緬を合して、紫の絹糸で、ふちを飾つた打敷を本箱の上に敷いて其の上に、父上と母上とそして、私が在京當時の二人の友と、いづれも薄命の子許の、五枚の寫眞を竝べて、その前には每日新しい手向草花を、絕やした事はありません。



ひろめ　　本郷　本橋好子

○婆やの形見　　秩父　近藤登久子

家の庭に一本の栗の木がありますそれは今から十五六年前に私を守しに來てた婆やが大きくして私に拾はせ度いと云つて何處からか一粒の大栗を貰つて來て蒔いといたのださうです木は餘り大きくもありませんが每年五升位なります拾ふ時は必婆やの噂が出るのです。

○昨夜の風　　羽前　今文子

私の家は飯豐山のふもとでごく淋しい所です幼い時父を失ひ兄妹もなく誠に心細く日を送りまし况して母樣の御心はどんなで有りませうそれで母樣が慰め爲に色々の菊を幾本となく培ひ漸々此頃花が咲き初めたのに昨夜の風でだいぶ倒れました。

○好厭　　飛騨　舟子

私はどうも皆樣のやうに奇麗にお化粧仕たり庇髮に結つたり美しい衣裳を着たりして日影に居るのは何だか厭いてありますので私はいつも素顏で髮は銀杏返して衣服は手織の田舍縞、そして每日野や畑へ出てお日樣を浴びて居ります。

○金魚　　大分縣　松木たみ子

私方に泉水がありまして金魚が入れてあるのです此金魚と私は大變仲よしで手をたゝくとすぐによつて、まゐりますのでひまさへあれば私は之を可愛がるのですけれども金魚の命は短いから私の大きくなる迄活きて居るだろうかと思ふと心細くつてなりません。

○犬の運動會　　鳥取市　上山千重子

廚で御料理する隙を一切れの肉摘みて庭に出た弟、何うするかと窓から覗くと、ベス、ジヨン、と口笛で二匹の飼犬を呼ぶ。そしてこなたを顧みつゝ、姉樣犬の運動會だよ、サー二匹共此處まで走つて來い、褒美は

肉だ。

○後　悔　　　豐後　伏見撫子

朝もとうから暮れ六ツの頃迄、畑仕事をして居る作男、夜は貸本屋の講談小説を借りて、面白さうに讀んで居るのを、私は心ひそかに笑つて居ましたが、此繭のやうな美しい米俵を澤山拵へて、これが今年の出來高と云つて、父上に渡した時、私は之迄の自分の事を後悔しました。

○紅　葉　　　白　百　合

最早二人でこうして遊びに出られるもこれ限りれと姉様の仰つたのにはつと思つておもはず目を逸しましたうるんだ目にちら〳〵と紅が映つて膝の本の上に止りました折しもサツと夕嵐の此紅葉を奪はうとするに驚いて本を閉ぢました大切の枝折。

○お　仙　　　秋田縣　佐々木貞子

村一の美人隣の與作爺の娘お仙は、明日親戚の或資產家に嫁に行くとの事ですから、何程に喜んで居るだらうとそと覗いて見ると、破れ障子から庭を眺めて頻に泣いて居る、あゝ容貌よくて寶の山に登るお仙ですら我が家を去るとなれば矢張悲しいと見える。

○稻　刈　　　德島市　森　蓀子

森は微笑み、柚の實は黄み、栗の實ははじけてとぶ、百舌鳥は鳴きさわぎ、都會の人々は茸狩りとてさわぎ立つ。而して妾は姉さんと一所に每日稻苅よ……。

○位　牌　　　和歌山縣　岡本なかの

白木机の上の新しい位牌に、敎相院純學彼銀居士位之靈とあざやかに、墨もて書かれたるに向つて、香を焚きながら、數珠をつまぐれる、そは餘りに若き後姿、美しい後れ毛、ゆらゆらと風に動きぬ。

○月　見　　　京都　英　香

先づ月見の團數には、一臺の机据ゑ置き、御酒まん中に供へ、二箇の三寶に、栗、芋、枝豆、柿、葡萄などおもひ〳〵の果物をかざり、根竹の花瓶には、尾花、水引、月見草などいろ〳〵の、草花挿して、今かと待つほどなく、向ふの東山一つとつ明るくなり、きら〳〵と峯の上は光滿ちて、一座に侍る人々の顏は、よろこびにみちてなつた。

○目　高　　　愛知縣　加古富美子

今日學校から歸つて來て隣の菊ちやんと二人で流川へ目高を取に行き五尾つかまへて來ました、私は嬉しくつて鉢の中に入れ麸をやつて可愛がつてゐました翌日起きて見ますると　あれまあ　鉢に横になりなは　直に流れ目高は一尾もゐません傍にはブチが嬉しさうにしてニヤーと言つてゐました。

○ふる里　　　靑森市　安田くに子

夏季休業にも冬季休業にも歸らず、孜々として學業に勉勵して、今五年目にふる里へ歸ると、八甲田山は昔の姿で迎へ堤河も昔の流でこさせた、只、餅屋の親爺が年寄つて、幼馴染の美代ちやは最う人の妻になつたのか、赤ん坊を背負つて小守唄を謠ふて來るのが見える。

○悲しみ　　　東京　とき子

雁が啼き渡つてから今日で三日目、オヽ妾のお母さんは、桐の葉の二ひら三ひら散り初めてお庭の白き霜の消え行く夕べお死なされた、妾は夢ではないかと疑つたが夢ではないで、アヽ悲しくつて後は書けません。

○豐　年　　　水戸　海棠子

表門を開けると前に小川がある、橋を渡ると一面に田畑である、田の向ふは、竹山に、杉山、其のながめのよい事、早稻はもう、刈取られて、束ねてあるのを見ると實に愉快さを感ずる、今年は、今迄、凶年であつた分まで取れた位であらう。

○妾が家庭　　　四多摩　縫　子

私の家では家内が七人であります、父と兄は每日畑に行き、弟と妹は小學校に通ひ、妾と母とお祖母樣は内に居りて家内を修めます、そして夜は皆一所に夕飯を食べて面白く床につきます。

○月　　　京都　濱部郭公

偶然眼醒めたので上の障子を見ると明るく光つて居るモー夜が明けたの

か知ら……と雨戸を一寸開けて庭を見ると木の葉は銀色に輝いて、一點の雲無き大空には皎々として凄い程の片割月が下界を照して居る、私は思はず身慄して戸を閉めた。

○お宮參り

呉市　中墻愛子

おまつりの朝兄樣は洋服姉樣は小紋縮緬次の姉樣はあづき色の裾模樣姿ゝ妹はめいせんのやがすり弟の正ちやんは水兵ふくお父樣とお母樣はお留守番やくなのよ。

○朝の仕事

長崎縣　白柳

四時に起き出て御飯をたき、掃除をします。それから妹と、私の髮さばき、お父樣のお辨當づめ、袴はいたら今春亡くなられたお母樣に「只今」といつて戸を閉めて、芳ちやんの手を引いて出て行きます。

○湯

丹波　八木みどり

私の宅では毎夜葡萄棚の下へお風呂を立てゝ這入るのよ末弟の敏はいつも私と葉のすき間から美しい星がお湯の中にキラ〳〵黄金の波をたゞよはし居るのを見てお湯の中に螢が居るといふてよろこぶのよ。

○猫

千葉縣　鈴木かね子

名を玉と云ふ、白く黑く斑らな毛は絹糸のやうで、動作の靜かなこと、處女の如くてあるが、鼠に飛びかゝらうとする、其身構えは、思はず人をして戰慄せしめる。

○初茸狩り

南總　齋藤秀子

私は前の日曜日に芳子さんと共に初茸を取りに行きました、まず松山の



日光山　宇都宮　紫城女

中へのへ〳〵はいりて行きますと其處にも此處にもとありまして遂には籠に一ぱいになりました私共は此樣に多く取つた事は始めてでしたから誇り顏で歸つて來ました。

○夕ぐれの野

八王子　芳村秋水子

私の乘つた汽車は多摩川の鐵橋を過ぎました。車窓を開くと美しい秋の夕暮でした、見れば野や山が紫に、紅に、緑に、恰度天女が御衣の樣に染てゐる其の美しい中に、草屋根があつて白布を敷た樣な小川には水車が絕へず夕日を汲みこぼして居る、汽車は恰も其の中を走つて居るかと思はれました。

○栗

巣鴨　關根りつ子

私の家の裏に栗の木が二本あります。花の頃からたのしんで居たかひあつて二三日まへから二粒三粒づゝこぼれ始まりました。あされぼ〳〵と云はれた私もこの栗が落ち始めてからは一ばん早起きになりました。

○初蜜柑

福岡縣　村雨

蜜柑が四つ始めてなりました、一番大いのが佛樣、次がお父さん、次が兄さん、次が弟、私とお母さんとは佛樣のおさがりと定まりました、どれが一番早く熟するでしようか、毎日々々皆んな樂しみてす、弟などは何時も蜜柑木の處ばかりて遊びます。

○月

筑前　露子

朝まだき、蟲の聲に誘はれゝ、そゞろ、紅葉の下かげを歩いて居ますと何やら、首すぢにひやりと落ちかゝつたので、思はず「ヒー」と首をすくめて、振りかへると、二十日過ぎの御月樣が、あはれ氣に、妾を見やつて居られた。

新笑話

編輯局選

三等

○引立役

さわ子

甲女「私今度或家へ寫眞やるのよだから貴女一しよにうつして下さいな」

乙女「アラ私こんなに見にくいもの外の方とお取りなさいな」

甲女「でも貴女でなくては私が引立ませんもの」

四等

○毛生液

愛知縣碧海郡矢作町橋目　永田舞鶴子

孝子「君ちやん、襟卷に今何をつけたの」

君ちやん「あたい、あまり毛が拔けたから毛生液をつけたの」

五等

○禁烟

越後國岩舟郡村上町字細工町　川島しか子

電車の車掌田舍者に向ひ

「煙草のんではいけません。」

田舍者澄したもので

「なあに大丈夫だァ、私は二十才を越してるだよ。」

○江戸通

本郷　朝井千とせ

與作爺曰く「博覽會では夜景が一番の見物だつたそうだナ」

江戸通の田五作曰く「そりやさうサ、何しろ澤山なイルミネーションへ電氣を一面に付けたのだからな」

○電車

千葉縣　花島てい子

或る三人の田舍者が東京見物の歸りに

甲「電車はづゐぶんやすいものだ奇麗な姉さんといつしよに乘つて座つてゝ市中を見られて五錢だからな」

乙「いゝや、電車ほどたかいものはない五圓入れてある財布を取られた」

丙「おれも十八圓の銀の時計を取られたよ」

○出水

千葉縣　行水

細君「婆ヤ役所からやたらに水を用ひていけないと云ふて來たから氣を付けておくれ」婆「ヒエー私しやまた此大水に水道だけでもせつせとつかはぬとお上でお困りと思ひまして」

○電信

東宇和郡　俊子

山奥出の細君、電線に風添ひて音高く響くのを聞きて「貴郎此音を御聞なさい餘程かゝつて居りますよ」

男「ウン急用に違ひない」

○電報の字

佐賀　あやめ

奥樣「今來た電報は御前にだつたのかへ」下女「はい」奥「何といつて來たの見せてご覽」下女面を赤らめ「あまりかなばかりの上に字がまずうございますから」

○問ひ

上毛　新井とみえ

或るプラットホームに巡査が巡ぐりきて「お前はどこだ」男「東京です」巡査「東京はどこだ」男「神田です」巡査「神田はどこだ」男「あゝめんどうくさい越後だ」

○手紙

大阪府　中道萩子

私の妹は澤子と云ふ名ですの或る日しきりに手紙を書いてますから私は見に行つたら澤子樣には御きげんよく濟子にはいかゞです、私は驚いてなぜ自分に樣つけてと云ふとまじめになつてこれと手紙をみせ返事だからと云ひました。

○子供の慾

濱松　岸つき子

姉「花ちやんこの手紙出してきておくれな」妹「いや」姉「千圓でも萬圓でもやるよ」妹「いや」姉「ぢやあこゝにある五厘上げやうか」妹「え行つてきてよ」

○お乳

福島　武川たつ子

「坊や母さん死んだら如何します?。」

「御乳だけ切つて取つて置く!。」

○半分の飽

羽前　杉葉女史

奥樣「松や飽を買つて來たの」

下女「あのれ飽は何處の店へ行つても一つの價で半分しか渡しませんから買つて來ません」

讀友倶樂部

諸姉と記者

○記者様私は諸姉様方の様に大きくは無く其上に淺學の者ですから文も字も下手てさぞお笑ひでせうが是れ以後は勇氣を出してドシ〳〵投書致しますから何卒お目を通し下さいアノ圖畫は繪の具でぬらなければいけないのですか（神奈川縣木村はる）（記者曰、繪は繪の具で塗つてはいけません、墨繪でなければいけないのです）○だん〳〵お寒くなつて參りましたが御なつかしい記者様方には何のお變りもございませんか日に月に皆様の御健康を神に祈つて居ります私の心ゐ憐れと思召さばどうぞ御身體を御大切に遊ばして本誌のために益々お盡し下さいまし これは私のお願ひでございます（岩手縣稗貫みつ子）（記者曰、幾萬の諸孃の爲に本誌は繼續されつゝあるのですから、思へば仰せの通り記者の自愛も大切てす）○記者様此頃明浦の夕景色は克己先生のみづゑ其儘で殊によいのは錦江城頭でございます私も筆がうごくならばあの雲の一片を寫して御目にかけたいのでございますが遺憾てす御ひまとてもございますまいが何うか明石の浦にも杖をひかれてこの夕景色をおながめ下さらんことを御願ひいたします（明石鈴蘭）（記者曰、羨なくて見る明石の雲も風流でせうが、 目下議の事で大多忙、懇切なる嬢の爲に健康を祈ります）○記者様迄一寸御伺致ます私は 病氣保養の爲めこちらに住て居る者です何しろ田舍の事て 自然世の事には 疎遠て一向現今の有様を存じません處が毎月讀友倶樂部を拜見致ますと世の博學多才の諸 姉様方 競て永久的 交際を御求に成て居る者ですから拙きながら手紙や 繪葉書を上て御返事を戴くのを何よりの 樂みに致して居ります然るに初の内二三度こそ親敷御 音便下さいますが其後は一向こちらから伺ても 御返事も下さいません之が果して現今の永久的 とやら永遠の御交際とやらで 御ざいましようか（對馬嚴原曙女史）（記者曰、いつかも斯ふ云 ふ事を聞きました、此れは讀友倶樂部の態 度に關係したことてなく、別に理由のある 事だらうと存じます、永久的と言ふ言葉が輕い意 味につかはれて居るのでせう、「非常に」とか「極めて」とか「最も」とか强烈なる形容詞を使ひたいのは 若い方々の常情て、其意味から「永久」と云ふのも一生涯と云ふ程の事ではないのでせう、譬へ一生涯と思つてゐらしても、境遇が代れば、繪葉書の交換もして居られません、記者などは諸嬢が御交際なさるなら寧ろ一時的と云ふ事に主義を置いて、其上で氣が合へば兩方で一致して 永久に御交りなすつたら宜しからう かとも思ひます、何れ又々申ます）○記者様お變りもありませんか 妾は三千四百海里の海外布哇の天地で 淋しく暮して居りますが女子文壇が 何より妾の慰藉者又妾の發明者てあります 是から拙き文章を投じようと思ひますどうぞ姉さんがたにも 紹介して下さい（在布哇土井定子）（記者曰、海外にも本誌の誌友は澤山 有ます けれど、投稿なさる方は 尠少てす、何うか永遠に 誌友ともなり、 又お作も送り下さい）○岩代國女子の御申越に 就いては別に紙上で答へませんけれど更に編輯局 讀友倶樂部宛に住所姓名を明記して申込んで 御らんなさい（記者）○岩手、橘奈美子。三河、梅月。大阪、弥式部。花子。紫子。越後、横山やす。敦賀、山本久子。羽前、きく。大阪、こゆき。下總、松崎千代子。岡山縣、心臓の女子。南越、清子。以上諸孃 の御申越は一々お答するまでもなく皆それてよろしい。又御あいさつはありがたく承りました（記者）

諸孃の交際　〔其二〕

○讀友の皆々様以後よろしく御交際を願ます（富山縣氷見郡國村向山なつ子）○皆様妾は只今では休學致て居りますそれ故友人が少いのよ何卒御交際をお願致ます日光 水戸紗織のお方但し十六七のお方とお交りが 致しとう存じ升の古い太陽や日本家庭女鑑や女子の友 等有ますからお取換等もお 願致します（府下荏原郡大井村立會原四百九番木村芳子）○お姉様方 お初にお目見得致します、 私れえ、二三ケ月前に當地へ移住しましたものですから お友達もなく淋しくて堪りませんのよ、 哀れと思召して、 姉様の御交際して下さいまし、今の私にとつては それが千金萬金にも易へがたい慰藉ですから、けれども一時的ならいつそ御手紙下 さらない方が勝つてゐます（神戸市礒上 通五ノ十二、平林たつ子）○親愛なる讀友の君よ 妾は誠に拙なきものなれど以後は 御玉章や 御葉書御 惠み給ひ てよ

（東京市神田區今川小路二ノ六伊原樣内 塩山葉波子）○造花、御寫眞、編物、御玉草、御文稿、など御惠送下さい、特に御地名所繪はがき、新聞などをどし〲妾も拙い繪や、寫眞、繪はがき、新聞、編物、紙細工、種々御返禮致します（名古屋市志摩町一ノ一二日比野方 荻洲女子）○誌友の姉君よ妾は女學校を出たばかりのふつつかな少女であります何とぞ御玉草や御寫眞の御交換を永久に願ひます（横濱市神奈川町神明町石井よし子）○聖術讃美歌を御研究なさりたい方は日曜日午後に宅へ御出下さい（麻布新龍土町五福谷以智子）○ホー記者樣や皆樣私エハガキ交換お願致ましたけれど隨分ですわネ男子の方が成る可きだけ女子の名前にして、よこすのが澤山あるのよ私女子の雜誌へお願ひいたしましたのですから男子の方なぞとは思ひもよりませんでした男子の方より戴く位なら何も女子文壇へ御願ひせずと中學世界か何にかへお願ひ致しますわ、ほんとに男子の方ひどいわですから澤山戴きました中でも能く女子か男子か見定めて御返事致しましたのですから、若しも女子の方で御返事の行かない所がありましたら何にか『たしかに女子』と云ふしるしと共に御申出て下さい御返事いたします（竹田光枝）○文壇も益々盛んて御目出度う存じます私或事情て久しく投書が出來なかつたのです次號からは拙いものを投じますによつて御笑ひ下さらない樣にね、それから筑前の安部富士子樣私貧女と同性同名よ以後御交際下さいな（豐後臼杵新町 安部富士子）○誌友の皆樣妾は東北の一山に住んで居り山水明媚を友として居る者ですが今度朋友の進めによりまして本誌を愛讀するようになりましたからして御交際して下さい玉草や繪はがきの交換は大に好みますから澤山送て下さい（宮城縣玉造郡温泉村 川波千葉小梅子）○みなさまごきげん好う妾ゑはがきや内外小切手が大好き又ひろく郵趣とお交換をねがひたいのです又マツチ（スリツケギ）の小箱のペーパーの珍しいのを拾種以上集めてお惠み下されたお方には美しいゑはがきでお禮いたします必ず（信濃北安八坂村中村しづ子）○あひかはらず寫眞、玉草、エハガキを御交換して頂戴（宮崎市城ヶ崎町杉野ます子内垂水かをる子）○諸姉樣私は學びの爲め戀しい古郷を距れて淋しう暮して居ますのよ何卒永久に御交際下さいね御願致します（芝區新堀町五大木喜三郎樣方白菊）○みめぐみ深き姉君たちよ妾は山又山にかこまれし伊那の谷にて瀧川とかず〲の高山を友とする淺學者でございます以後山鳥の尾の長々しく繪はがきや玉草の御交りをねがひます（信濃下伊那郡八幡町古川いさ子）○皆樣妾は外の雜誌を愛讀してたけれど女子文壇が有益だつて事聞きましたから愛讀するように成たのよどうぞ賢明な姉樣方よ妾満十四才の少女よ妹と思てお手紙頂戴ね（備中笠岡町西本町二六〇〇 小林志津）○妾は敬愛なる諸姉に向て繪葉書の交換を願て置きましたが本部は過般洪水のため實に建久以來の慘害を被りために或は家を失ひ或は父母姉妹に別かれ宿るに家なく食ふに糧なきもの幾百人妾幸にして此の慘害を被らざりしも傍觀するに忍びず一椀を割いて可憐なる同胞姉妹に分かたんとす依て當分の繪葉書の交換を謝絶す（靜岡縣富士郡北山村御宿則子方御宿富美夫）○福岡縣の野川靜子樣、八月增刊の私に對しゝのお叱りは聊か御失當ではありませんか、私が最初貴女に否なの御返事を促しました時何故十數日間も御寸書だに下さらなかつたのです何程呑氣な私でもお待ち申す譯に參りませず本意無くも他の誌友と交換致しましたのです、越えて二日突然白菊をお送り下すつた時私はまあ什麼惑がしたでせう「何故返送して呉れなかつたか」との仰せ、當時最早や手に入つてあつた私、何條同じ物二つも望みませう、併しお寫しとりの樣でしたから御返送致すは却つて失禮だと氣づき直さまお詫びの書面に粗末な繪葉書添へてお送り申上ましたのですからまあさう〱お怒りなさらずに常識の乏しい者の仕業よと御氣をしずめて下さい、御以後共相變りませず御親密に願ひます（和歌山縣海草郡西和佐村 池見悠子）○誌友の皆々樣繪葉書交換を願ひます又皆樣のお內て婦人懷中時計御不用のお方は何うぞ私の處に御通知下さい保證人五日市ゑん（盛岡市志家四番地 五日市方ニテきよ子）○多摩川の淸におはします誌友の方々へ一筆しめし參らせ候名に聞くのみに未だそれと知り申されば只なつかしく其の音の如何に床しく詩人の胸にひゞくとやと、常々思ひ居り申し候砧の音――もはや名どころの多摩の夕暮は砧の音をちこちに響く頃とし思ひ申し候御嶽嵐のうら寒き夕淸き河畔の逍遙にそゞり音を聞きつゝ歌思はるゝ人のいとなつかしく候九月十二日（埼玉の入間郡 淺見なみ子）○誌友の御姉上樣よ妾は實につたなきもので御座いますおどうか妹と思つて御交際の程幾年かけてお願

ひ申します（大阪東區北渡邊町八十七番地熊谷百合子）○誌友の皆々樣私は誠に飛雄で無智無才取り所のないものですが何卒御導きなされつゝ御交り下さいませ（石川縣金澤市古寺町九番地黒田勝枝）○宮城縣のお方にお願申ます。誠望御交際を下さいませんか。妾の座は宮城縣でございます（豐後、姫島燈臺第二號官舍内鈴木幸子）○朝夕は秋風の身にしみて何となく物淋しい時節となりました時に山梨縣地方の諸姉樣の中に甲斐絹問の御家がありましたらば私御願が御座いますが甲斐絹の切を讓つて頂きとう御座いますが如何ですかいづれにもせよ其の御方は御一報下さいませ（信濃木曾福島町橋本令江）○私は印旛沼の上流に住む二九に足らざる一少女であります が寫眞、繪葉書の交換を願ひます（下總大和田郵便局内米本區櫻井定月子）○緒姉樣妾は因幡の兎で名高い村の極めて賤しい者で御座いますが女子文壇を愛しますお連れが無いので淋しくつてたまりません何卒末長く可愛がつて下さい（因幡國氣高郡末恒村大字内海村三橋春子）○諸姉樣がたどうぞ繪葉書雜物小說御送り下さい必ず御禮はさし上ます雜物小說を御送下さつたかたへは私の小說文學の書籍詩的の書籍大低のは持て居ますから何れにてもさし上ます（香川縣三豐郡詫間村松田あや子）○以後も、お變りなく、御交換なすつて下さいましな（愛知縣豊橋市鍛冶町大須賀なか方同じくひさ子）○妾は新歌謠は非常に好きてす皆樣の中て御好きな方は繪はがきや玉章へ書いて御便り下さい（陸前國大河原町字小山田丸山香花）○皆々樣親愛を以て、永久御交際して下さる方はありませんか（北海道留萌郡海馬町下山初江樣方橋本千代）○私は南總の山奥の者で別に是と云ふ友達もありませんから誌友の姉上樣方何卒御見捨なく御交際を願ます（上總國君津郡天神山村梨澤能城美代子）○皆樣私は田舍にさびしくくらしてゐますものですが何卒末久うお交り下さいませ（石見邑智郡田所村石橋なみ子）○誌上の皆樣よ私は男女に拘らず廣く御交際を願ひたう御座います又繪葉書、玉章、寫眞の御交換も（下野那須郡荒川村小笠原まち子）○私ても妹にしてやらうと御思召の諸姉さんは直接御繪葉書ても玉章ても下さい直ぐ返事なきつとしますから（岡山縣川上郡大賀村仁賀廣江孫子）○未だ一度も皆樣方と御交際申したことが御座いません何卒妾を妹と思召してとはに玉章や栞の御交換を願ひます（三重縣津市藏町三番地服部小枝子）○そして、寫眞、しをり、附つき、繪葉書等を送つて下さい、御返禮には、外國上等繪葉書か、又は、それ相應の物て致します（磐城國雙葉郡木戸村天野美枝子）○妾も今度女子文壇の御仲間になりました諸姉樣御引立を又妾は古切手を澤山所持して居ますから御報知次第直に御送り申ますさよなら（京橋區新湊町一ノ十二田邊方靜子）○記者樣始め諸姉君樣よ私ははじめて御目にかゝりますどうぞよろしく御教導下さいませ（伊豫新居郡泉川村服部とめ子）○誌友の姉樣何卒玉章や栞繪葉書寫眞等の御交換を願ます先着十五名限り敬神婦人會發行女子道一部をそへ差上ます（山口縣周防都濃郡鹿野町藤井韻子）○何卒玉章や寫眞及び繪葉書の御交際をれ末永く致して頂戴な然しれ私不用書籍澤山ありますかられ諸姉方御交換下さいな皆樣の内て寫眞を送られた御方には御認みの書籍と甚だ見にくい物てすけれども私の寫眞を添へて送ります（長門國郡局區内上大田本田宅中村あき子）○皆樣つまらぬ者てすが繪葉書玉章にて御交り下さいませこちらから繪葉書差上げても一寸も返事下さらぬ方があるのてすよほんとに殘念てすわれ私は神に誓つても御返しにはそむかぬつもりてす（筑前若松士非町堀方あさつゆ）○記者樣や諸友倶樂部の御陰て去る三拾九年六月よりの交際者が百三拾九名其の中繪葉書が百〇六葉玉章が七拾壹通又住所不明や男子て返事上げなかつたのが二拾四名て有ました尙進んで交換を願ひたいてすが今度家事上の都合て遠方へ奉公に行きます甚だ乍遺憾以後交際を中止す菊月拾日（志田郡朝日奈村入舟紅薔薇子）○皆樣初めまして御目にかゝります、同じ御國とは申乍ら遠く隔てた此孤島に父母もなければ兄姉もなしそれはそれは心細い朝夕を女子文壇やバイブルを友として送る者てす何卒永久に皆樣から御文通を御願ひ申上ます私は男の方ても親友として御交際下さる方なれば少しも厭ひません、しかし前以て申上て置たいのは都合によりまして遠からず海外に參る樣になるか知れませんが變らず御交り下さるやうにねがひます（對馬國嚴原久田道町倉成ヤヨイ）○私はまだ愛讀者として諸嬢樣方と御交際をしたことはないてすから記者樣より宜敷く皆樣に御紹介を願ひます（秋田縣雄勝郡三輪村大野こう）○諸姉上樣御氣げんよろしくれ此後相かはらず御つき合ひを御ねがひ致しますよ繪はがきの交換もれ（鹿兒島縣加治木森山

たの子）○皆樣妾は今度皆様と別れるやうになりましたそのわけは申ません、只或事情のためと思召せ皆様、玉章の交換、繪葉書交換、圖書交換等は悉く御斷り申ます、あしからず思召せ、今まで御手紙くださつた皆様、繪葉書をくださつた方にあつく御禮申上ます、それではこれてこれて御別れしませう、時節がら御身大切に遊ばせ（高木とめ子）○御情深い姉君よまことに恐れ入る御願ひては御座りますが私少々御伺ひ申たい事がありますぜひに青森縣弘前市の御方は御知らせ下さいませんか私一身の事に付き御願ひ申すのですから御手紙下されました御方には必ず御願申ます（東京本郷區本郷五ノ六濟明社内保延操子）○何卒お手紙下さいませそして永久的にお交りを願上ます、必ず御返事いたします（茨城縣東茨城郡中妻有賀 黒澤登與子）○繪葉書玉章濫物交換願ます御返禮は必ず必ず致しますよ（長野縣下高井郡中野町上小田中町田さみ子）○以後御交際下し認れん事を一重に希望します（京都岩上通三條下ル佐々木武助方谿野靉）○誌友の皆さん妾は高等女學校三年まで行きましたが今はやめてしまつて田舍に居るので誠にさむしいので拙ない妹と思召して何卒永久に繪葉書やら寫眞の交換なれがひます（和歌山縣那賀郡安樂川村最上岩田純子）○私は何も存じません不束ものですがなに卒御手紙や御寫眞下さいましな早速に御返事出しますよ（京都市高辻新丁西入服部靜子）○先月來より度々投書なさる隔城のやま川樣は失禮ですが若しや山川巖子樣ではありませんか其の方ならなつかしう存じ升巖子樣私を御存知てせう只今は何

歳に御出遊し升か貴女も本紙の愛讀者ですか私も毎月愛讀して居り升（小石川區原町酒井家奥吉岡懿子）○記者樣私はごく海濱生れのものですが今度愛讀者となりました又誌友の諸姉樣御手紙を下さい又ゑはがき御交換を願ひます（遠江川崎町細江新井せき子）○私も初めて女子文壇愛讀者になりまして嬉しく御座います尚ほ艮ろしく諸姉樣宜しく交際を願ひます（埼玉縣古河之畔東武之里菊地美智子）○諸姉樣方には不束なる妾へどし〳〵御手紙下さいまして有難く御禮申上げますなほ十二月に上京いたしますから東京や横濱の諸姉樣末永く妹と思召し御手紙を下さいませ年は十六才です（仙臺市北四番丁八二樋川方鈴木榮子）○燈火親む此頃妾も愛讀者の一人となりましたから諸天下の諸姉よ何卒とこしなへに、御交誼を願ひますよ（茨城縣鹿島郡䑓津村爪木 松岡敏子）○一時的、當座の徒然を慰する爲てなく嬉しい朝にも悲しい夕べも一度友情を結んでは、いつまでも變らせ給はぬ御方と永遠に變まじう御交際が致し度ふ御座います（佐賀縣佐賀市柳町副島松子）○私はもと和泉岡堺女學校の出身です故有て今はこの淋しい孤島に只一人住居致して居ります者どうか皆樣繪葉書や玉章の交換を永久に御願申ます御返事は屹度致します（對馬嚴原久田道町倉成彌生）○私し一度誌友倶樂部で願ひました事の幾日も經ぬ内に御同情深き皆樣より送り與れましたのが机に積んで山の樣に成りました、妾しはもううれしくて〳〵只有難涙に咽ぶのてした（上總淡路汀子）○皆さまお手紙頂戴な、字をくずさないで下さいよ私草書よめなくてよ、や

さしく書いてれ、私きつとお返事出します（若狹遠敷郡雲濱村長谷川笑尾）○私は俳句を好むものですから、繪はがきに俳句一句づゝ書いて送つて頂戴な、秀逸のお方五名に妾の寫眞と繪はがき送ります寫眞下さつた姉さん方には、五名に限り妾秘藏の畫一幅と風流陣、白玉姫、新不如歸、有罪無罪、知らぬ娘等の内一部づゝあげますよ（下野氏家傳馬町小林方野中とみ子）○諸姉樣の内で音樂な御好みの御方と繪はがきの交換や音樂の研究等について末長く神聖なる交りを願ひたう御ざいます、そして面白い樂譜でも御存じの方は御知らせ下さい御禮は必ず致しますよ（福島縣耶麻郡堂島村大字吉沖三浦操）○誌友の姉樣方私は片山里の者ですがどうか今後御交際を願ます付ましては諸姉の寫眞又は繪葉書を御送り下さい直に返書致します（石見國六日市町松浦信子）○誌友の諸姉樣よ何卒花種を御惠送下さい御禮に上等繪葉書を以て返禮致します先着十名に限り薬添へて即答致します（石狩國雨龍郡北龍村字和篠原方愛花操子）○諸姉樣私もひとりの愛讀者です私は一人も親友が有りませんので誠に悲しくてなりませんお此のおろかな私と姉妹の契りを結んで御交際して下さる御方は有りませんでしようか、愛知縣の御方なら御面會が願ひたうございます（尾張國海西郡八開村大字赤目石黒まん子）○誌上の姉樣方よ、私今度當市に登つて居ます何うぞ永久的の御交はりをお願申します（鹿兒島市塩屋町四二番戸白濱方鶴丸ちま子）○妾は永らく皆さんに御指導を願つて何かとみ情を蒙つてゐました者ですが今度少し止むを得ぬ事情が起り

ました爲め暫く皆さんとお別れ申さなければならない事となりましたて誠に情に於て忍びませんが御交際丈けお斷申升（和歌山縣海草郡四和佐村池見澄香）○小說や繪葉書を御交換下さい御寫眞を下された御方には上等の繪葉書封入にて返禮します（熊本市小澤町一〇一番地沼田秀子）○私も又御仲間入をして御交際をして見たいと思ひます而したゞに好奇心にかられて御交際して下さるやうな方は平らに御免を願ひます當地は一體に友情の厚い所と聞いて居りますから私が其中の一人である以上は決して淺薄な御交際は致さないつもりです私は此頃クリスチャンにならうと思て居ます而し未だに私は暗い闇路を迷ふて居るものですから幸にクリスチャンの諸姉私を光明の世に導いて下さるなら深く深く感謝いたします（山形縣米澤市信夫町松本菊代）○何卒諸姉樣繪葉書や妾も貧家に住み乍らも花園を好みて栽培して居ります者て御座いますから花の種苗の交換を願ひますよ（石狩國雨龍郡北龍村字和松本勝子）○豊橋市の靜子樣葉書にて大至急御住所氏名をくはしくおしらせ下さい（岩手縣膽澤郡相去村稗貫みつ子）○私は去月、今年二歲になる愛兒を失ひまして、一時は失神する程に、悲哀に沈みました、どうぞ同情の淚に富める諸姉樣方よ、慰藉になるやうな書籍雜誌を惠んで下さいお願ひてあります（越後中蒲原郡兩川村五十嵐須賀子）○皆樣妾し此の二月から病氣の爲失禮いたしましたが今度全快しましたからまたお邪魔に出ましたどうぞよろしく願ます（宇都宮市中河原町五七石振方石原登笑子）○妾は本誌愛讀の一人てございます、どうぞ未見の御慕はしい、御諸姉樣方よ、何とぞ妹と思召し下さつて、今後久しう御交際を御願申します（富山縣高岡市御馬出町梶川つゆ子）○あの記者さん妾は只今腦を病んで氣がくさくさして致方がないのどうか皆さんと交際のできる樣にして頂戴な（和歌山市附近岡崎村寺內岡崎さき子）○繪葉書御玉章て永久に御交際を御願ひ申します十二號で三人の御方が御返事がありませんて殘念てす（京都市南禪寺町廿一番戸一號田中留吉方まき子）○白栲の衣はいつしか脫ぎすてゝ孤燈の下懷かしく相成候今日此頃皆樣には如何過ぐさせ給ひてや妾事は先日當地へ參り見なる君の（目下陸軍看護長）お洗濯女として朝夕淋しい／＼日を送つて居ますどうぞ姉樣方哀れと思召さば一葉の端書なりともお惠み下されかし（福岡縣企救郡北方新町博多屋內津崎岩子）○ほんとに今夜の樣雨ても降るとかなしくてかなしくてなきたくなるのてすよこんな時てもなつかしい誌友の方てもポストに見舞はせてでもくれたらばと思ふ事が度々ございますよ姉さま方何卒なぐさめて頂戴なまつて居ますよ（宮城縣栗原郡金田村川口高梨さとし）

寫眞編物交換

○誌友の御方てシナリや編物を送つて下さいませんか御禮には必ず雜誌や其の外の書籍て致します（茨城縣眞壁郡五所村木村新一郎方伊興子）○皆さん妾ね寫眞十八枚あるのよ皆さんのと交換して頂戴な、十八枚皆なくなつたあとは何なりとさうとうの品物か、雜誌て御禮します何卒早うよ（京都府船井郡八木村本郷スティションの四齋藤笑子）○私と同年位の方と編物や繪葉書の交換をねがひます（栃木町萬町三丁目齋井常造方八重子）○誌友姉君樣よ妾は愛讀者の一人てすが御地方の風景、寫眞、繪葉書、玉章、編物の御交換を願ひます妾の方よりも屹度御禮には姉樣方の御好みにおうじまして風景、花、美人入其の外種々澤山の寫眞葉を御送り致します（伊豫國越智郡櫻井町村上晴子）○御寫眞どしどし御めぐみ下さいな私もね見にくい寫しを澤山用意して置きましたから先着後着の別なく善光寺紀念スタンプ付繪葉書を添へて着次第必ず必ず御答禮します（長野縣下高井郡中野町上小田中町田さみ子）○懷愛なる姉君逹と玉章の交換、又御寫眞下された方に韓國貴女用ハンケチを御送りいたします（韓國鎭井服部靜枝）○誌友の皆樣方よ妾は筑紫の草深き果に住んで居る名もなき者てありますが姉樣方の中に編物附突栞絹製ハンカチ御寫眞繪葉書等御惠贈下された御方には貴婦人、あけぼの、竹柏園集、曉聲松、山家集、日本新辭林、詠歌辭典、日本人名辭典、萬葉短歌評釋御外に文學書類澤山ありますから御好に從ひ送ります（熊本縣菊池郡菊池村佐藤なほ子）○諸嬢さん只今私の手許に私の寫眞十五枚許り所持してゐますから姉さん逹の寫眞編物小說等と御交換して頂戴（德島縣名東郡國府村大字南岩延村領家藤子）○諸姉樣方の中にりぼん又繪葉書封入の上御送り下さる御方には御禮としてきつと毛糸か或は編物小細工物を差上ますから決して取勝にはいたしませんどうぞ御送り下さいね（新潟縣南蒲原郡三條上町外山よし子）○世のおあねさま私はしやしんの交換がほんとうにうれしいですから交換して頂だい

れえそして編物の交換もおれがひいたします(神戸市秋斉函第百四十四號 高井君子)○なつかしき諸孃樣よ御寫眞や繪葉書の交換をお願ひいたします(和歌山縣那賀郡粉河町 龜井佐太郎方宗たつみ子)○私は娛樂室を設けて些れく友垣の寫眞や編物造花を陳列して居ます 諸姉様よ私にも御見捨なく寫眞造花編 物を御送り下さい(廣島縣豊田郡久芳村早志浪子)○姉上様の内に果造花等を下さる方は御座いませんか御返禮は必ず致しますよ 又繪葉書や玉章の交換も御れがひ申します(岩代安達郡本宮町字中條鈴木ちよ子)○私ロザッキ(細布)ランプしき、花瓶しき、細果及び秋七草あはかき持て居ます御望みの方は面白い小說で御申込み下さい(埼玉縣北足立郡東門前村長島竹子)

繪葉書交換

○繪葉書に和歌や俳句を書きて交換を願ひます又玉章寫眞の交換も返禮は即日神に誓つてよ(靜岡縣駿東郡北郷村大御神天野英子)○永久に御交際を願ひます 繪葉書御交換もれ(埼玉縣入間郡川越町連雀町渡辺かれ子)○わたしは皆様に聞いて頂きます 今日まで皆様と交換を願ふて居りたが返事して下さらぬ方が二十七人ありました 最近神戸民子さん 愛子さんひどいわ皆様神聖に枝折繪葉書の 交換を願ひます(山城國綴喜郡青谷村字奈島藤本寿子)○皆様自然の圖畫及び自然の繪はがきの交換を願ひます(千葉縣印旛郡本郷村大野光子)○誌友の諸姉上様 何卒妾も繪葉書交換の仲間に入れて下さいなして文體は英文又は羅馬字又は日本字でもよいのですから是非御交際を願ひます先着三名には橋神社の繪葉書一組三枚宛差上尙別に自筆のを送ります(千葉縣長生郡新治村北田のぶ子)○姉上様妾は英語がいたつて好きなので度々英文で繪葉書の交換をしていたのです今から女子文壇の愛讀者諸嬢と永久親密に御交際を願ひます(大阪市東區東高津南ノ町百二十八番地ノ六岡村善五郎方河野直子)○四方の姉兄様たちに願ます妾は世界各國の郵便切手及び證劵印紙を聚めて居り且不用のを澤山所持して居ますので皆々様と交換を願たう御座い升からお送り被下ならばお好の繪はがき又は何でも必ず差上ます(東京本郷駒込曙町十一平島すま子)○米國のヤスイ様美はしき繪葉書有難とう御住所が知れ無いので返信を差上げる都合に行きませんの最一度御住所を細かに知らして頂戴(丹後國加佐郡由良町一九〇中垣澄子)○外國に居らるゝ御方に御願ひ申します私は日本の切手を集めて送りますから外國の切手を送つて下さい政府發行の使用濟のはがきも御願ひ申します(大日本青森縣弘前市字田茂木町石戸谷はつせ)○繪葉書や玉章の交換を又編物や寫眞御惠下さい必ず御禮致よす永久に親交を(本郷駒込八重垣町五五、小松や方小ひ枝)○諸嬢の交際を願ます繪葉書に和歌一首俳句一句を書き御送下され御禮は必らず致します(茨城縣新治郡田余村大字上玉里須崎せい子)○世の中で私ほど不幸な者はありません親もなく姉妹もなくひろき世界に只一人此の境遇を憐れと思召す御方もあらば未使用の繪葉書及び寫眞の御交換を願ます(神奈川縣三浦郡浦郷村字田浦四七三遠山方加藤梅子)○おなつかしい誌友の皆さん繪葉書の交換して下さいませんか妾上等の繪葉書か拙いながら自筆繪はがきかて必ず御返事致しますから(長野縣東筑摩郡麻績村坊平宮澤澄子)○誌友の姉様方私は北の端の者てすがこれから繪葉書の御交換を願ます(北海道膽振國早來村営場時子)○諸孃様繪端書交換してくれませんか妾の手元に色々あります附付寫眞掛等送て被下た方には妾の寫眞を添へて送ります其他雜誌もれえ(下總國海上郡富浦村地口松崎千代子)○諸孃様よ米國の私の兄様のところから其地の風景畫を送りこされましたから未使用の風景へがキ御送りの方へ御分配致します何卒是れを初めとして御交際を願ます(靜岡縣濱松下飛削谷茂平様方加茂啟子)○繪はがきの交換を願ひます(豐後臼杵町一八九高橋保子)○誌友諸孃さん妾繪葉書や玉章の交換大好きなのよ然し一時的のは堅く御斷り末永く誠の友情を以て交際して下さる方は大に歡迎します序に御存じかも知れませんが繪葉書の裏面切手貼付して差出すと一種郵便として取扱はれましたが四月から裏面に貼ても差支はないとの事ですから成可く裏面に貼つて御出し下さい(岩手縣稗貫郡臺温泉場小瀨川露子)○妾は至つて山奥なる本州の北端に住む不肖ものであります繪はがきの交換を願ひます歌や俳句の御自筆を最も望みます御返事は必ず致します而し筆勢男子とみえる時は御返事は致しません(青森縣三戸郡猿邊村大字袴田松尾俊子)○諸姉様方にはお變りはありませんか妾は記者様始め皆様のおかげて繪葉書も大分頂戴しました此の後はます〳〵御交換を願ます必ず返事は致しますそして先着五名様には面白い小說をお禮として差上ます(熊本縣鹿本郡中富村大字中分田富野榮喜子)

圖書換讀

○左の不要書ありしなり寫眞にて申込み次第返呈す但し先着十名後者は端葉書にて御斷『化粧かゞみ』『わが學校』『裁縫秘術』『いしよう鏡』『婦人世界』『女學世界』『女子文壇』『少女世界』『少女界』『婦人畫報』『女鏡』『中學世界』其他百餘册ありますから其中御望みのものある限り御送りいたします又『ハイカラ令孃』『富美子夫人』『戀學生』御持ちの方は何卒御送り下さい『草花』『美人』『愛兒』等の繪葉書で必ず御禮いたします（千葉縣東葛飾郡船橋町九日市川島市太郎方はつ）○皆樣妾手許に婦人世界女學世界ムラサキ女子文壇婦人博覽會現代婦人成功談等不用になつて居りますから皆樣の內で和歌俳句の獨學に適する本が御座いましたら何卒御交換願ひ升（日本橋區蠣殼町二ノ九五島藤子）○皆樣の中で青春全部三册御持の方は私の紅葉全集第六編（金色夜叉全部と煙霞療養のある）と金色夜叉の歌以上と交換な又紅葉全集第六編だけと寒風戀風全部三册と又女夫波上下二册もつて居ますが天うつ浪と或は他の小說又は音樂の譜と交換を願ひます御望の方は御一報下さい（東京內藤新宿局角筈六吉田方齋藤白ばら）○皆樣私の手許に春雨の無果花風葉の心中くらべ、東京案內、女用文獨學、新小說、趣味、秀才文壇、女子文壇、不如歸、（但古本）女學世界、少女界、婦人世界、詩人の春、文藝界、ムラサキ、上田力、假月照、歌、滑稽文學、其他いろ／＼あります御望の方は下名へ御早く御申込み下さい（東京下谷中清水町二〇森田齋子）○私の手許に百海女子の友婦人世界女學世界女子文壇などがありますどうか皆樣繪はがきリボン等と換へて下さいませんかそして寫眞の交換もね（伊勢龜山町東町小川沸子）○北海道樺戸郡沸臼村小西綠美子樣よ九月初め御望みによりて思出の記御送りいたしましたが何の御返事もなく又約束の日本も御送り下さいません私しは只一册ばかりの本が惜しいのではありませんがあなたのみ心を御氣の毒に思ひ御良心の御反省を促す爲に此欄に申します（野菊）○誌友の姉上樣の內金色夜叉次郎島浜子及び絹寫眞掛ヒシツキ栞等御送りの方へ妾し央の枝折與繪葉書等送ります又金色夜叉ヒシツキ（細か細繡）を御送りの方へは安藝進水紀念繪葉書廣島みやげな絹寫眞掛は日本海大海戰第二回紀念繪葉書な此の外次郎島ヒシツキ前以外葉等別に添物いたします御送り下さい（廣島縣吳市二川區西本通二丁目一〇二碓井清子）○皆さん妾の手許に最新教育學、春雨集、小學、不如歸、青海、三國誌、三體千字文、和文讀識、天うつ浪、火の柱、有耶無耶集、黃菊白菊、金色夜叉、不言不語、無果花、內外少女鏡、玉島、照子、夏子、多情多恨、思出の記等不用になつて居りますから皆樣の改訂英語讀本（神田氏全部）女子消息文かきぶり、高等女子文かきぶり、國語漢文新辭典、作文秘訣、普通物理學、化學講義、實用教育學、實用裁縫全書、家庭辭書、人數學講義、地球發達史、普通人數學等と交換して下さい、千葉縣東葛飾郡湖北村中峠根本仁助方根本花子）○諸孃樣妾は世にも賤しき女工ですが文學が好きです皆樣御交際下さい又私の所に不如歸、血の淚、自然と人生、晴小袖、花紅葉、美文斷錦等が不用に成て居ますから踏環の中で手習の類物寫眞繪葉書等と交換致します（福島縣郡山町島田工場內細川經子）○私の手許に陸軍凱旋紀念スタンプ付繪葉書甲種三組持つて居ります紬來繪葉書で申込み下さい先着者三名に限り着次第差上ますおくれた方々は妾の不出來なしなりを差上ます（栃木縣芳賀郡市橋川上すみれ）○姉樣方の御手許に不如歸伯爵夫人夏子金色夜叉（初編）少女の戀、吾輩は猫である、青春（初編）乳姉妹（初編）ハイカラ令孃、新夫人など御持ちの方は秋の女學世界增刊の女學校生活家庭十二ヶ月化粧かゞみ少女界おちくぼ物語か絹ハンケチ絹栞りに刺繡を入れたのがございますからどれかと御とりかへ下さいまし先着の方には妾の寫眞上等のエハガキを御そへいたしますわ（岡山市東中山下一一九西岡龍子）○御寫眞御惠み下さいな先着者十名樣には薩摩琵琶狀獨奏譜下の種類の中何れなりとも御禮として御添送致します常陸丸、小督、櫻狩、城山、蟲附入、橘少佐、川中島、吹雪の敵、日本海々戰、錦の御旗後若者には繪端書を以て御返禮致します（東京小石川區白山前町一七若林方角田あや子）○御不用の齊務何なりとも宜敷交換くだされ度私方不用分は『紅葉全集』と『不如歸』と外卅二册御座い升（大阪內安堂寺町二丁目六十九番上岡かつ子）○諸孃樣の中でノルマントン號の歌（曲も一緒）御存じの方は是非御送り下さいな御願ですよ御禮はうつくしい繪葉書で致します（橫濱市神奈川青木町五三六篠原皆子）○皆樣の御許に紅葉全集六編、多情多恨、八軒長屋、天打浪（全部）思出の記、不如歸の歌、孝女白菊の歌、金色夜叉の歌、テニソンの詩、湖畔の悲歌、八犬傳等御座いましたら妾の破戒緣不緣、不如歸、良人の自白、女

夫婆以上と御交換又は御譲り下さい切に御願申上ます（青森大鰐村島田下山方中田歳子）○諸姉様方の中で三宅克己先生著述の『水彩畫手引』御持ち遊ばして入らつしやいますれば私の『吾輩は猫である』の中編と御交換下さいませんか（東京市麻布區霞町一番地 坪雅三方泉千代子）○下野那須郡荒川村須藤露子様本年八月十五日發行の本誌しら萩不用ですから中學文壇と交換致します就ては私の家へハガキにてお申越し下され早速郵送致します（北海道天鹽國上川郡劍淵村二百九十三番地小林清乃子）○誌友諸姉上様妾の手許に女學世界六冊婦人世界、少女世界、女子文壇、婦人界二冊、當世交際社會、日露戰爭記數册、文藝倶樂部、日本婦女用文、育文一致日用文其外おとぎ話など色々ありますから何卒皆様の御内にて不如歸、夏子、伯爵夫人、己が罪など御交換下さい御願てす（香川縣木田郡古高松村字新田高橋ふさ子）○諸姉様よ妾は田舍に淋しく暮して居る不束者ですが御手紙なり御寫眞を下さいきつと御返事は差上ます尚ほ私の許に小説長恨、小猫、新ほとゝぎす、自由結婚、新婚旅行、櫻の御所、海底奇談、江戸紫、闇の光明、飯太平記其他新刊小説も又雜誌も數多ありますから金色夜叉、魔風戀風、吉丁字新聞實子、無官の醫等御持ちの御方はどうぞ御交換下さい相當の御禮は致します（佐賀縣小城郡小城町田尻ひて子○妾は和歌入門、乙女の操、女子の文、一簑一笠、みだれ箱、明治姫鏡、美文作法、茶の湯大全などの書籍が不用てすから同價位のものと交換して下さいよ（美濃土岐郡明世村河合澤田儀平方村上夏子）○諸姉上様私は片田舍にすんで居る小說ずきのものですしかし求めるのが困難ですから大變困つて居るのです皆様の内に魔風戀風、夏子、仇と仇の後編、新夫人をお持ちの方は紅葉全集第三卷、同第六卷、母の面影、涯子、仇と仇の前編と交換して下さい御願いたします皆様の内て私をおうたがいなく本をさきへ送つて下さいました方にはお望みによつて露營の夢、隠れ小島、新小説第十一年第一卷より第六卷までをおそへいたしますもし同じ本が一册ありましたら相當なる御禮をそへておかへしてもどちらにてもいたします（備前國和氣郡伊里村閑谷新田琵末いよ）○皆様妾は筑紫の果てに住む不束者でありますこれから御交際を願ひます唯今左記の本を持つてゐますから皆様のお姿と何か乘類を下さつた方に何れても望みのを進呈致します小説戀草白百合奇美人青春露子夏子 黄菊白菊花紅葉わが罪（大分縣速見郡豐岡町西野方安藤秀子）○わたしは銀鈴小詩歌夜背花を持つてゐます廿八宿明暗と交換して下さい又詩人お送り下されば繪葉書あげますその外古雜誌交換をねがひます（大阪中の島四ノ七入船橋方生田さくら）○皆さんのお中て、女子文壇第三卷第九號御不用のお方はどうか私の女學世界、詩集夕すゞみ、花ざくろ、文章世界、ハガキ文學の中、何づれにても宜しう御座いますから御交換下さいましそれから私の手許に小說やどり木、自殺、紅葉全集第五卷、おのが罪、不同語などが不用になつて居ますから皆さんの御不用書と御交換下さいませんか繪葉書も御交換願ひます。此頃流行して居ます取り入ればかりのやうな事は決して致しませんからどうか御安心なすつて送つて下さいまし（大阪府泉北郡横山村大字善正辻林芳子）○私の手許に左の不用の書がありますから、皆様の中に私の望む不用書があつたら交換して下さい、新式英語獨習書、新式英語獨習初步、ナシヨナル讀本一より五迄、上製東洋歷史、日本歷史、和英作文辭書、諸嬢の中に、言海、玉篇、朝晴、源氏物語、平氏物語等と（千葉縣海上郡足川村八木よし子）○私は全國で發行する雜誌、（可成新體詩和歌俳句の多いのを望みます、）をあらゆる蒐集して見たいと思ひますから誌友の皆様、どんな古いのでも何でも構ひませんから、どうか一部づゝ御惠み下さいませ、併せて和歌俳句の交換をもお願ひ申しますよ（下總印旛郡中郷村鷹田秋山花髮子）○諸姉様の内に言海か日本新辭林かお譲り下さる方はありませんか。又私の栃原算術書上下に婦女家庭訓か小野鵞堂先生書の女子書簡文どちらでもお望み次第三册さし上ますお交換下さるれば實に有難ふムいます（大分縣東國東郡西安岐村近藤げん子）○妾帝國史學會發行の日露戰史上下二卷（三圓）持て居ます元良の倫理學中島の倫理學說批判、吉田の倫理學講義か心理學の書物と一時ても永久ても交換願ます。ラツト氏認識論、異想論、日本佛教史、佛教聖典、鳩翁、松翁心學道話御持の方は、私の詩學維新五册詩學新選五册其外色々ありますから修養上に關する書物なら何でも御送りくだされ御交換願ます（下總海上郡富浦村地口渦淺方松崎千代）○どなたか明治才媛文集及秀才文壇明治少女節用刺繡術新書編み物製作新書御持ちのお方は是非御送り下さいませんか私の少女界と其れに相當した物品はきつと送ります（静岡縣藤原郡

相良町加藤だい）○皆さんの お内に小說不如歸、乳姉妹をお持ちのお方がありますなら妾の 手元へお送り下さい 本でも辭書でも御禮に直ぐきつと神に誓てお送り致します 亦妾手元に小說の田舎源氏、白糸瀧の種、戀か夢か等ありますから 新著の小說を 御送り下さい（岡山縣川上郡大賀村廣江露子）○誌友の姉上樣妾 本年七月より目を病みましたが最早つぶれるところを院長の 骨折りにて今では大方よくなつて まだあそんで居りますが目は最早すつかり 治りましたが用心の爲め後三ヶ月入院して居りますから 御親切の御方は雜誌でも 小說でも文章でもなんでも字の書た物てあれば宜敷から御送り 下さいませ其變り大阪名所の上等の繪葉書十人ほどの 御方なれば十二枚の一組づゝ 必ず送ります（大阪市北區網島停車場前小川病院内橋綺枝）○レザー方々よ 私は大の唱歌ずきですから 何卒『やしま』と云ふ唱歌御存じの方は御報知下さいまし 繪葉書できつと御禮をいたしますなほ面白い唱歌を御存じの方はどし／＼御しらせを願ひます では御きげんよう（遠江國濱名郡 湊塲村伊塲岡部讓方岡部富士子）○皆樣のうちに、 小野先生岡田先生の 習字帖、 美文、韻文の資料、 はいから令孃、美文作法、明治少女節用 おもちの方は、 お送り下さいな何册でもかまひません、 おれいとしては、 當地の繪葉書一組に相當なものをそへて 差上ます（福岡市天神町英和女學校寄宿舎内 佐伯ひて子）○誌友の皆樣妾手元に 人世大觀、文章字典、界格言大全、言海、女子用文（小野鷲堂先生書）健康大觀、美的記事文、小說夫定め（前後編共）、慘風悲雨世路日記、不如歸、肉彈、其他色々不用の書物があるのよ 皆樣の内て子供、美人、名所繪葉書其他小說など御持の御方は御交換を願ます 殊に男子のお方へは御禮に妾手製のシヲリを差 上ます（茨城縣湖本町上町石崎よう子）○濱子、 金色夜叉、 無花果、 魔風戀風、天うつ浪、春潮、我輩は猫てある、 花守など私持て居ますが 伯爵夫人、夏子、 筆子、女夫波、乳姉妹、思出の記、己が罪、にせ紫、 破戒など丶 交換して下さいそして上等繪葉書の交換もねえ（越後見附町 山田貞子）○妾は去年の秋から 肺炎加多留に罹り遊んで居ります病中の慰安は小說や 其外雜誌等の本てあります然し家豐ならずして多く購ふこと 出來ず誠に殘念で御座います 甚だ厚がましい御話で御座いますが姉樣に讀み古しの小說脚本 文學雜誌がありましたら下名まで 御惠與の程 御願ひ申します（東京市下谷區龍泉寺町二八八杉山たか）○私の手元に天地有情、一朝晴、徒然草講義、才媛文四册、婦人寶典（一圓二十錢）日本史教科書（八十錢）讀物のおけいこ、中等文法作文教科書其也新聲、國文學、 ムラサキなのりそ等 不用てすから美くしき繪はがき八枚以上に 御自分の寫眞をそへて申込む方にお送りします 但雜誌か繪葉書のみにても（佐渡新穗村長畝 土屋きせ子）○誌友の皆樣私許に小說不如歸、 新氣運、 寒石、 愁芙蓉、天うつ浪、新綠集、夏子、火の柱、其外文學概論、俳句概論、 わがおもひ、詩人の春若草、海底軍艦、朽木の舟、 女子消息文、 作文錦嚢、彈片、少女世界、女鑑、秀才文壇、文章世界など有りますから 新體作文百科辭林、 暮笛集、廿八宿、 伯爵夫人、密航婦、紅葉句帖など丶 交換したうございます（茨城縣眞壁郡五所村木村新一郎方いよ子）

懸賞品發送報告

第十三號（十一月一日發行）懸賞當選諸孃にはそれぞれ賞品を御送り申しましたから並に一々御名前は記しませんが既にお受取りになられたことと存じます。猶、下に記す方々は至急原稿と同じ筆蹟にて住所姓名を御知らせ下さい。

○四谷、孤蘆女史○横濱、室田野百合○若松、丹羽千代子○丹後、賤の子○東京、とき子○甲斐、矢壽子○埼玉、村上花月。

剽窃詩文の注意

●●●●●第十四號の分　○福井縣、野田繁子。新體詩三等「雨あがり」は「秀才文壇」七卷十六號向井井蛙氏の作を○下谷、奥村富志子。灯火の影四等「御輕」は大町桂月氏著『新體書翰』中より

●●●●●第十三號の分　○紀伊、貞操喚女。新體詩秀逸「にはとり」は中學世界增刊『山紫水明』中より

●●●●●第十號の分　○越後、哲子。短文秀逸「可憐兒」は卅九年一月發行の中學文壇より 右何れも剽窃せるものとす。

◎今回注意を與へられたる諸孃は　○名古屋、ひさえ女。○岐阜。津淦女。○下　息議女。○香川縣、ふさ。

新年號豫告

明治四十一年一月元日發行の本誌第四卷第壹號は如何に盛粧を凝らして世に現はるゝか、先づ左の各項に就いて讀んで下さい

○愛吟（光澤紙原色版密刷）

右は有傑畫の模範として世に喧傳せらるゝワッツ氏の名作にして情調高雅、盛夏の逸品なり、是を田中寫眞製版所の製版印刷に托し、鮮明なる原色版に刷出せるもの、蓋し雜誌界有數の美觀なるべし

▲小說大附錄（新作短篇）

○死後までも（畫入）　小栗風葉作

○未定（全）　德田秋聲作

○角（全）　岡田八千代作

○非牧者（全）　佐野天聲作

○乘合馬車（全）　窪田空穗作

是れ皆當代知名の作家が、文壇の新氣運に乘じて其技倆を試みしもの皆容の作家が傑作として一讀を要すべきは勿論、新年の讀物としても亦此上なく感興深きものなるべし

▲名流婦人の處女時代

教育家、小說家、詩人、音樂家、繪師等現代知名の婦人が、其處女時代には何の動機に志を立てゝ今日あるに至りしか、又處女時代の嗜好、修養等は如何なるものなりしか、其等の斷片を集めて諸嬢が座右の參考に資せんとす。

▲內容と體裁

其外內容に諸嬢の新作投稿の秀拔なるものを滿載するは勿論、口繪の寫眞版光澤紙を用ゐ其材料を精選し、附錄小說には一々插繪を加へ、表紙も更に新意匠の美を發揮す

▲百六十頁の大冊（無比の廉價）

定價は新年號に限り　一冊金拾貳錢　郵稅一錢五厘

右の如く體裁內容を努めて善く美しくするに拘はらず定價は僅に二錢を增し、實質と比較すれば無類の廉價を以て愛讀に應ぜんとす、乞ふ倍舊の愛讀をたまはらんことを。敢て豫告す

記者通信

文壇餘興　道行く人（課題）

此度の文壇餘興には『道行く人』と云ふのを募ります、何時、如何なる場所でも宜しいから諸嬢が道行く人を見た通り、又は感じた通りに書いて見て下さい、往來を步いて、見た處でもよし内に居て外を通る人を見た處でもよし、窓でもよし、夜でもよし、一人だけ詳しく書いてもよし、大勢の行列に就いて感じた處でもよし、いつも見る人でもよし、男でもよし、女でもよし野でもよし、町でもよし、山の中でもよし、都會のまんなかでもよし、つまり道を步いて居る人間に就いて何事かを書けばよろしいのです、千差萬別、士農工商、一種の活きたパノラマを現じやうと云ふ趣向です、例の通り一等金一圓二等金七十錢、三等金五十錢、四等金三十錢、五等金二十錢の圖書切符を賞品として進呈いたします、行數は十六字詰十五行以內、〆切は本月二十日。

雜報

◎御歌會始御題　明治四十一年御歌會始めの御題は『社頭松』と仰出されました、詠進書式は例年の通り、一月十日までに宮內省御歌所宛にて差出せば宜しいのです。

creeping there; I will kill it."

"Let the poor thing alone," said the other, "it has done you no harm." Then Thumbling got safely through the crack into the treasure-chamber, opened the window under which the robbers were standing, and throw out to them one piece of gold after another. Suddenly he heard the king coming, and crept hastily into a hiding-place. The king looked and saw that several gold pieces were missing, and he looked at the doors, but locks and bolts were all sight. Then he went away again and said to the sentries,—"Be on the watch; some one is after the money." So when Thumbling fell to work again, the sentries heard the moving, and a sound of klink, klink. They ran swiftly in to seize the thief, but the little tailor was still swifter. He leapt into a corner and covered himself with a coin, so that nothing could be seen of him, and at the same time he made fun of the sentries and cried, "Here I am!"

(Continued)

(A German Household Tale.)

殺してやらう」と云ふと，今一人は，

「可哀さうな事をしないて，投つて置け．何も君に悪い事をした譯てもないから」と口を入れました．指太郎は幸無事に金庫の中へ這入りまして，丁度盗賊の立つて居る處の窓を開けて，ズン々々と金貨を外へ投出しました處，突然王が御越になる音がする，小僧は大急ぎて隠場に逃込みました。王は大層金貨の數の減じたのを目前に見たが，鍵もかゝり，栓も能くしてあるから不思議に思召，番兵に尚一層よく護衛せよと命ぜられ「誰か，金を狙つてる者があるから，注意せよ」と仰せられて御退出なされた。

其處て指太郎は又仕事を始めた處，番兵は人の氣配がするに氣が付き，後又金貨のチヤラ々々々と鳴るのも耳にしたものだから，大急ぎて賊を捕へんと室内に飛込んだが，小僧さんの方が早く逃げ金貨の一片を以て身を被ひ室の一隅に居つた事ゆゑ，誰にも見付らない．其處て番兵を困らすも一興と思ひ，「爰だ爰だ」と叫んだ。

（つゞく）

master in his craft. But the food was not good enough for him.

"Mistress if you give us no better food," said Thumbling, "I will go away, and early to-morrow morning, I will write on the door of your house, 'Too many potatoes, too little meat.'"

The mistress grow angry and drove him out of the house.

The little tailor journeyed on and came to a great wood, and there fell in with a band of robbers who meant to steal the king's treasure. When they saw the little boy, they thought that a little fellow like that could creep through a key-hole and serve as picklock to them, and so they said,—"Hollo, will you go to the treasure-chamber with us? You can slip in and throw out the money."

Thumbling thought a while, and at last he said, "yes," and went with them to the treasure-chamber. He saw a crack in a door, and was about to get in, when one of the two sentries who stood before the door saw him, and said,—

"What an ugly spider is

いから.

「内儀さん，最少し食物を良くして下さらないなら，此處には居らないて，明朝此家の戸に，(芋が過ぎて，肉不足)と筆太に書くから」と指太郎が申したので，内儀さんは立腹して小僧を逐ひ出して仕舞いました。

小僧は旅を重ねて遂に大森林にきた處が，王の金庫に忍込んと相談をして居た盜賊の一隊に會合しました。彼等は此小な童子を見るや直ちに，彼こそ鍵穴から竊入させて手下に使用したら良からうと考へて云ふ事には，「オイ，一所に金庫に行かないか？君なら這ひこんて，金を投出す事が出來さ。」

指太郎は稍々考思して，終によしきたと返事をして，一行と共に金庫に行きました．彼は破目もがなと戸を眺め，丁度見付かつたので今や忍込まんとする刹那番兵二人が來かゝり，其一人は戸の前に立止まりて，

「見苦しい蜘蛛が這つて居る.

Who through long days of labor,
And nights devoid of ease,
Still hear in soul the music
Of wonderful melodies.

彼や終日　働きて
安けき夜も　あらねども
心に聞ゆ　物の音は
巧妙美絕の　調なり。

Such songs have power to quiet
The restles pulse of care,
And come like the benediction
That follows after prayer.
(Longfellow.)

かゝる詩歌こそ　力あれ
憂にさわぐ　胸靜めん
祈の後に　祝禱の
平和を人に　與ふごと。

At Christmas
play and make good cheer,
For Christmas comes
but once a year.

遊び樂しめ　クリスマス，
歲に一度の　クリスマス。

Thumbling.

There was a tailor who had a son, and he was a tailor too. As the little fellow, who happened to be small, was no bigger than his Thumb, he got the name of Thumbling. But he was brave if he was small, and so he said to his father,—

I must go out, father, into the world." "That's right, my son," said the old man, and took a long darning-needle, "and there is a sword for you to take with you on the way."

When the little tailor was outside in the wide world, he traveled about, and went to a

指太郎

某仕立師に一人の息子があり彼も同じく仕立屋になりました。此小倅は親指位の身の丈でしたから，指太郎の名を受けました。併し小柄でこそあれ仲々勇敢な人間でありましたから父に向つて云ふには，—

「父さん，私は少しく世間を見なくてはなりません」と。「其は至極千萬其では道中護身の爲に刀を一本遣はす」と云ふて，父は長い絎針を與へました。

此小な仕立師は世に出て，所々遊歷して同職の某師匠に身を寄せた處が，其家の食物が良くな

英　文（一二）

津田梅子閲　河井道子述

The Day is Done.

The day is done,
and the darkness
Falls from the wings of night,
As a feather is wafted downward
From an eagle in his flight.

I see the lights of the village
Gleam through the rain
and the mist,
And a feeling of sadness
comes o'er me,
That my soul cannot resist—

A feeling of sadness and longing
That is not akin to pain,
And resembles sorrow only
As the mist resembles rain.

Read from some humbler poet,
Whose songs gushed from
his heart,
As showers from the clouds of
summer,
Or tears from the eyelids
start;—

日は暮れぬ

日は暮れぬ.

夜の翼より　降る闇は,
天翔る鷲の　羽子落ちて
翩々下るに　さも似たり。

村の燈火　雨霧を
衝きて光るを　見し我は
悲哀の感情　身に迫り
忍びがたくぞ　覺ゆなれ。

此哀情には　つかの間も
酷き苦痛の　氣配なし.
眞の悲憂に　似もやらず
狹霧の雨に　似ぬがごと。

讀めや名も無き　歌人の
心の奥より　湧く詩歌を.
其湧く樣は　何と云はん
夏雲破る　村雨や
堰止め難き　涙川。

投書家並に愛讀者諸孃は此社告を御覧下さい



改正 募集課目

選評——文學士戸川秋骨先生、小栗風葉先生、内藤鳴雪先生、與謝野晶子先生、蒲原有明先生、谷江風先生、山中古洞先生、佐々木信綱先生、與謝野晶子先生、岡谷小波先生、山中古洞先生。

甲種

○美文（廿四字三十行以内）
○新論文（廿四字三十行以内）
○お伽噺（振假名付廿四字八十行以内）
○短篇小說（振假名付廿四字八十行以内）
○日記文（廿四字三十行以内）
○實用文（廿四字十五行以内）
○新體詩（振假名付十句以内）

乙種

○和歌（一宛一首）
○新派和歌（一宛一首）
○俳句（一宛一句）
○新歌謠（一宛一首）
○滑稽談（廿一字五行内）
○繪畫（一寸の二寸）
○短文（廿四字五行振假名付）
○文摘餘興（其時によると）

賞外——○文學顧問 ○學校通信 ○誌友倶樂部（凡て廿一字詰）

▲注意——（一）凡て用紙は半紙に限る○課題は隨意なり○一人一章一句宛の事○取交ぜ同封差支なし○開封にて三十匁迄郵稅二錢にて足る

以上は毎月十五日に〆切翌々月に發表のとになります

懸賞呈品

	甲種	乙種
第一等	賞金牌品類……價格金拾圓	絹洋傘……價格金五圓
第二等	呉服物類……價格金參圓	帶止、半襟類……價格金壹圓
第三等	小間物類……價格金八拾錢	文房具類……價格金六拾錢
第四等	便利圖書切符……金五拾錢	便利圖書切符……金三拾錢
第五等	同……金四拾錢	同……金弐拾錢

○賞品は發表翌月五日に故障なき當選者へ贈呈す、當選者は速に住所氏名を明細に通知あれ。

▲嚴守すべき投書規定必一讀を要す

○投書は各欄とも決して政治的時事論に渉るべからず○投書は題の下に必ず住所姓名を記し假名は平假名を用ゐ明瞭なるを要す○各種の投書は別に認むべし○封筒は「原稿在中」の文字を記し中には他の用事の文句を記すべからず○投書に圏點は一切施すを禁ず○投書は他人の作物を剽竊するを禁ず之を犯したる當選文は無効たるべし○投書は一切返附せず○投書は未着其他に關して一切責を負はざることし

定價

女子文壇（毎月一回（一日發行）定期増刊年四回二月、五月、八月、十一月の十五日發行）

一冊	金拾錢	郵稅共 前金拾壹錢
八冊（半年分増刊共）	前金七拾六錢	同 前金八拾四錢
十二冊（一年分増刊除く）	前金壹圓八錢	同 前金壹圓廿錢
十六冊（一年分増刊共）	前金壹圓四拾四錢	同 前金壹圓六十錢

振替貯金又は爲替に限ると

輕便の送金法

女子文壇社の郵便振替貯金口座は第一七貳九番です

○爲換料、通信料、書留料入らぬ安全の送金法

此の「拂込用紙」は何處の郵便局でも申出あれば何度でも無代で呉れます

明治四十年十一月廿八日印刷
明治四十年十二月一日發行

定價 金拾錢

不許轉載

編輯兼發行者 東京市京橋區大鋸町十一番地 野口竹次郎
印刷者 東京市京橋區西紺屋町廿六七番地 石川金太郎
印刷所 東京市京橋區西紺屋町廿六七番地 株式會社秀英舍

發行所 東京市京橋區大鋸町十、十二番地 電話〔本局六〇七番〕 女子文壇社

特約賣捌元 ○東京堂、東海堂、北隆館、上田屋、至誠堂、良明堂

廣告料金

	特等	上等	普通
一頁	三十圓	廿五圓	廿三圓
半頁	……	十三圓	十二圓
一行	……	……	四拾錢

〆切 毎號十五日前

特約取次 神田三河町一丁目 博報堂 ○京橋瀧山町 日本電報通信社

明治三十七年十二月十九日第三種郵便物認可

女子文壇 無比廉價 金拾錢 郵稅壹錢